ガラスに触れたら

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガラスに触れたら

【Ｎコード】
Ｎ３３０９Ｏ

【作者名】
Ｓ

【あらすじ】
恋とか愛とか、余分な感情はすべて捨ててきた。激しく降りしきるあの雨の夜、あたしはすべてを捨ててきたのだ――恋愛不信のフリーター・奏と、彼女を取り巻く男たちの話。

あの娘ははすっぱ（前書き）

※あからさまな性的描写はありませんが、ストーリー上、そういった表現が多々でてきます。ご了承ください。
※未成年の喫煙・飲酒、あるいは禁止薬物に関する記述があります。この作品は、けっしてそれらを助長するものではありません、こちらもまたご了承ください。

あの娘ははすっぱ

1.

ベッドから降りた勝也が、そこいらに脱ぎ散らかしていた服を下着から一枚一枚拾いあげ、身につけていく。

あたしは裸になった彼のうしろ姿が好きだ。ほっそりとした腰のライン。このひとはそろそろ三十になろうというのに（来月で二十七になる、四捨五入で三十路だ）、そのラインはみょうに若者じみているな、と思う。

勝也の愛すべきところ。腰のライン、着やせするたくましい腕（ひょろひょろに見えて、じつは脱いだらすごいタイプなのだ）、細いふくらはぎ、カラーリングを繰り返して痛んだ茶色い髪。奥二重、でも長いまつげ。セクシーな唇（勝也の唇は、上唇より下唇のほうがちょっとうすい）などなど。

下着も身につけず、ぼんやりとそんな彼を眺めていると、外界の音に気がついた。ざあざあ、という攻撃的な音。

いつの間にか雨が降りだしていたみたいだ。それもずいぶんと激しく、暴力的に。あたしの知るかぎり、降りだすことになるのは明朝からだったと思うのだけど。

勝也は雨男だ。

きまってそうなのだ。こうして夜会うとき、たまに外出したりするとき、勝也はとても高い確率で雨と連れ立ってやってくる。

服を着終えた彼も外の暴力的な音に気づいたらしく、リビングの窓を開けて雨の具合をたしかめ、ちいさく舌打ちをした。

「結構ふってる？」とあたしはたずねる。
「残念ながら」と、たいして期待もしてなかったといった風に勝也が答えた。

勝也と会うのは、ちょうど一週間ぶりだった。今日はあたしが仕事の日だったので、仕事先の料亭に勝也が車で迎えにきてくれた。ところどころに改造が施された自慢の白いノアを最寄り駅のコインパーキングに停め、まだ雨の降らない、でも湿気をたっぷりふくんだ夜道を十分強、ならんで歩いて帰ってきた。あたしのアパートは通りからすこし奥まった場所にあるため、路上駐車ができない（そして付近の住宅街なんかに路駐してしまえば、目ざとい住民たちによって、すぐさま通報されてしまう）。

「もう帰る？」
「帰らないわけにはいかねーだろうよ」

あたしは肩をすくめ、しかたなくお見送りのためにベッドから降りた。
素っ裸のうえからタオルケットを羽織っただけの格好で、勝也につづいて玄関に向かう。このアパートは１ＬＤＫ全体が板張りになっていて、裸足で歩くとぺたぺたと小気味のよい音がする。二十年、というちょっとした年期の入った傷だらけのフローリングだけど、新しい傷に気をつかわなくていいし、いまでもちゃんと、ほんのり木のいい匂いがする。
勝也は、あたしがこのアパートを裸足で歩きまわる様子が好きだという。「なんか、ペンギンに似てる」のだそうだ。あたしはときおり、こういった風に動物やちいさな生き物にたとえられることがある。猫だのリスだの、というのはすこし首をかしげたくなるけれど（男のひとの目に、あたしはいったいどんな風に映っているのだろう？）、ペンギン、というのは、まあまあ、まんざらでもない。

あたしは幼少のころから、彼らの大ファンだ。

「でもほんとうに、雨は明日の朝からだって、夕方のニュースで言ってたのよ」

ドアを数センチ開いた状態で、スニーカーを履く勝也の背中がどこか不満げだ。「今夜は雨降らないって言ってたじゃねえかよ」と、無言でこちらを責め立てているようで、思わず言い訳がましいことを言ってしまう。そんなことでほんとうに彼が腹を立てたりするなんて、思っているわけじゃないのに。

案の定、靴を履き終え、振り向いた勝也は微笑んでいた。わかってはいたものの、ちょっとふてくされてしまう。言い訳がましかった自分がとたんに恥ずかしくなったのだ。

あたしの後頭部を、勝也のたくましい腕がつかまえる。あたしはいつも、いともたやすく彼につかまってしまう。キス。それも別れ際にはふさわしくない、ちょっと激しいたぐいの長いキスだ。息苦しさに抗議の声を漏らし、勝也を突き放す。勝也はおとなしく突き放される。

「キスさせようと仕向けるおまえが悪い」ニヤニヤと勝也が言う。

「意味がわからない」とあたしは言った。すこし息を荒げたまま。

「無意識？」

なんてタチの悪い、とおおげさに目を開いて、うそぶいたりする。ひょうきんな顔をしてみせ。

勝也はいつも、別れ際にキスをしたがる。こういった、情熱的なたぐいのキスを。別れ際はもっとこざっぱりと爽やかであるべきだ、とあたしは思うのだけれど、勝也に言わせれば、「おまえがおれを煽るから悪い」らしい。理不尽だ。

突き放された勝也がまだこちらを見ているのを感じた。つぎにく

るだろう台詞が明確で、あたしはもういいよ、と思ってしまう。

「ごめんな」

ずっと目をそらしつづけているわけにもいかない。あたしは彼の目を見る。

なぜ？　とあたしは心のなかでだけ聞き返す。口には出さない。

勝也はほんとうにすまなさそうな顔をしていた。眉根をすこし寄せ、こちらを哀れむみたいな表情。あたしはこれ以上彼につらそうな顔をさせたくはない。

「つぎはいつ？」答えるかわりにあたしはたずねる。

「奏は来週いつが休みだった？」

「ないよ。来月まで」

「そうだっけ？」

「カツが決めたんじゃん」

「そうだっけ」と勝也がとおい目をする。目をこらして、自分の記憶をのぞこうとしているみたいだ。

「そうだよ。十三連勤」

「じゃあ来月まで会えないな」

「どうして？」つぎはあたしが目を細める番だった。うらめしすぎる。「べつにやすみの日じゃなくたって」

「六月末は前半戦の最後だからな。大人はいろいろ忙しいの」

「ふうん」

「そのかわり、つぎのやすみは朝から夜までコースだ」

あたしのへそ曲がりがわかった勝也は苦笑し、あたしの頭をやさしくなでた。
ずるい、と思う。それだけでゆるしてしまうことを、勝也はしっているのだ。
「おいしいもんも食べよう。来週、おまえ誕生日だもんな」

勝也とは、もう四年もこんな関係でいる。
“こんな”関係というのは、“いまを最大限にたのしむ”関係のことだ。
薬指に指輪のあるひとと付き合うのは、これがはじめてのことではなかった。二度め。しかし、以前のそれとこれとは比べるまでもなく相反するものだった。
ひとりめの指輪のひとと付き合っていた当時のあたしはまだ高校生だった。
当時、こどもだったあたしは、世界に存在しているいろいろなものすべてに期待をしていた。期待もしていたし、信じきっていた。しかし、その期待や信頼はたった一年と経たずに裏切られ、あとには亡霊のような日々しかのこされてはいなかった。亡霊になったあたしには、色の区別もつかなくなってしまった。きらきらと輝いていた世界はすっかりその光彩をうしない、そのうしなわれた部分を、猜疑心や不信感が埋めた。
生きる亡霊でいることは、死ぬよりつらいことだった。
――そんな恋愛ばっかしてたら、そのうち身を滅ぼすぞ。
このような関係になった最初の日、勝也は言った。関係を持つまえから指輪の存在はしっていたけれど、そんなものは取るに足らな

いものなのだ、と勝也は言った。要は関係の重きではなく、日一日の充実だ、と。

勝也は救世主だった。それでようやく、あたしの両目にかかった灰色のフィルターは取り外され、どころか以前にまして、からだが軽くなった気さえした。

勝也はすごい。愛だの恋だのさわいでいる世間一般なひとたちがかわいそうに思う。

勝也が帰ってしまうと、あたしは時間をかけてゆっくりとシャワーを浴びた。

１ＤＫの狭いアパート。築年数はあたしより二歳だけ若い。年期のわりに古びているのはフローリングの床だけで、管理会社のひとは「いい木を使っているから、あえてここだけリフォームしなかった」のだ、と言っていた。あたしはこのアパートを一目見てとても気に入った。入居は即決だった。傷だらけだけどいい匂いのするフローリングはもちろん、窓がたくさん――リビングに背が高く大きい窓がひとつ、ダイニングにひとつ、お風呂場にひとつの計みっつ――あるのもここをきめるポイントになったし、なによりユニットバスでなかったことが最大の理由だった。部屋は八畳とせまいけれど、お風呂とトイレはわりと広々としている。お風呂好きのあたしにはさいこうの物件だった。

シャワーからあがっても、雨はまだ降りつづいていた。時計を見ると、一時間ちかく浴びていたようだ。長い雨だ。勝也は無事帰宅できただろうか。

それにしても。

誕生日を勝也と過ごせないというのは、考えてもいなかった。不服だ。裏切られたとか傷ついたわけではないけれど、勝也のことだから、ちょっとでもあたしのために時間を割いてくれるのでは、と思っていた。実際去年まではそうしてくれていた。

――だれと過ごそうかな、誕生日。

それで別れ際、いじわる心からそんなことを冗談っぽく言ってみたのだけれど、そのときの勝也の顔ったらなかった。鳩が豆鉄砲をくらった顔――もちろん実際にそんな鳩に遭遇したことなどなかったので、想像するしかないのだけど――というのはきっと、ああいった顔のことを言うのにちがいない。まぬけな顔、と笑うと、彼はちょっと怒った顔のまま笑った。

――あんまやり過ぎんなよ。

――えっち。

――違げえよ。なに妄想してんだか。図に乗り過ぎんな、ってこと。

みんながみんな、おまえみたいに自由な奴じゃないんだからな、ともっともらしく説教を垂れた勝也なのだけど、まったくもって説得力のない、とあたしは内心肩をすくめた。

あたしをそんな考え方に――まるで洗脳のような強力さで――させたのは、ほかの誰でもない、勝也本人だというのに。

ひとりで過ごす誕生日なんて、いったい何年ぶりだろう。

どうしたものか、と携帯のメモリを眺めてみるが、勝也をのぞけば、ひとりとしてあたしの誕生日を祝ってくれるような人間はおらず（告白すれば、あたしに友人はいない）、ちょっと落ち着かない

気分になった。まるでいまのあたしには彼しかいないみたいだ。実際、まるで、ではなくそのとおりなのが悔しい。

さて、どうしたものか。

「ほんとうにどうしよっか」

口にだしてつぶやいてみたところで、答えは雨のように、天から降ってきたりなんかしないのだ。うまくいかないものである、人生というものは……

「自立のときだね」

自立どきなのかもしれない。これは、そろそろ勝也のやさしさに甘んじているだけの生活から卒業せよ、という啓示なのかもしれない。

勝也のことは好きだけど、それは決して愛じゃない、としっていた。情はあるけれど、これは決して愛と呼ばれるたぐいのそれではない。そう教育をしたのは勝也なのだけれど、まったく悪い女だな、とあたしは思った。

濡れた髪を乾かすため、ドライヤー片手にガラステーブルのまえに座る。じっ、としていると、相変わらず激しく地面に叩きつけられる水の音が聞こえてくる。雨足のつよさが直接からだに感じているような気分になった。なんて嫌な音なのだろう。

雨は嫌いだ。

空から落ちてくる無数の水滴の群れが街中を覆い、あたしたちの生活を隙間なく濡らしていく。アスファルトのしたから湧き上がってくる、大地の匂い。雨の匂い。あれが鼻につくたび、心底ぞっとする。雨の日、みっつの窓は完全に閉めきられている。

それなのに、我が物顔して部屋のなかに滑り込んでくるこの耳障りな音はどうだ。

ドライヤーのスイッチをオンにする。熱風が、外界のつめたい水音を吹き飛ばしていく。

疲れている・いないにかかわらず、雨の夜はいっこうに眠れる気がしない。明日も朝から晩まで仕事だというのに。勝也はあたしをこんなに心細い部屋にひとりのこしたりなんて、するべきじゃなかったのだ、と思った。

＊

割烹・会席料亭『はりせん坊』。この店で働くようになって六年めになる。扱いこそバイトと一緒だけれど、釣銭の管理やお店の開け閉めなど、任されることは社員さんたちとさほど変わらなくなった。

とは言っても、あたしはただのフリーターだ。手当てなんかほとんどつかず、週に一日休みがあるかないかでこきつかわれる。夜は遅くまで残されるし、朝は早い。そのくせ古株ということで、店長や副店長とかわり責任を負わされたりすることも多々あって、なんというか、まったく都合のいい役回りだとうんざりしてしまうこともある。

アパートの最寄り駅のひとつ隣駅。そこから徒歩十五分、川沿いに『はりせん坊』はある。

あたしのアパートから最寄り駅までも十五分ほど歩かなくてはならない。合計徒歩三十分というのは、ちょっとした距離だ。なのではじめは自転車通勤も考えたことがあったのだけど、たった一駅だというのに、この間が結構な距離なのだ。電車に乗れば四、五分。その間を自転車ならスムーズに行っても二十分かかる。それプラス、アパートから駅、電車に乗って隣駅からお店まで、ということを考えると、時間的にはたいした差がない。そのうえ、駅から駅までの区間は坂道が多い。それならアパートから駅までの平坦な道を歩くほうが、まだ楽ちんな気もしないではないのだった。

隣駅から南に橋も含めて十分ほど歩き、東に折れて川沿いに出るのだけど、あたしはそのひとつ手前の角を曲がる。それでなんと五分ちかくの（！）通勤時間短縮になるのだ。その細道――やっと車一台が通れるほどの、細くて昼間でもほの暗い一通道路だ――をまっすぐ五分弱ほど行くと、従業員入り口に出る。

危ないから、といちど店長に叱られたことがあった。昼間のうちから人通りもすくなく陰湿でいやな空気が漂うその道は、夜になるとますます人気がなくなり、灯りと呼べるものはほとんどなくなった。街灯もあることにはあるのだけれど、隣に流れている用水路を挟んだ向こう側にある住宅地のために、ぽつぽつ並んでいるだけだった。そんなところを、平気で若い娘が無防備に闊歩する、というのだから、普段は温厚でにこにこしている店長が目をさんかくにするのもしかたがない。けれど、五分という時間はなかなか切実なもので、社員さんたちの目を盗むようにして、あたしは毎日そちらの細道からこっそり通勤している。

今日で六月が終わる。天気予報によれば、今年の梅雨は例年に増して長いらしい。各地でゲリラ豪雨まがいの激しい雨が局地的に降ったり、川が氾濫して洪水になったりと、今年の雨は変だ。地球は

どうなってしまうのだろう。
　そんな風にして、今日も異常気象がつづく梅雨らしく、外は土砂降りの雨だ。強い風にあおられて、波際の水しぶきみたいに雨が踊っている。頭痛がひどい。毎日朝から晩まで働いて、からだは疲弊しきっているというのに、おかげで夜の寝つきが悪い。昨日も結局ベッドに入ったのは午前三時だ……まあ昨夜は、ほかのところにも原因はあったのだけど。ひとりぐらしでいることは、不摂生でいることと一緒だ。

「ほんと、不摂生ー」

　ちょうちょがかたどられたアナスイの黒いハンド・ミラーに映る、自分の顔のむくみのひどさについぼやいてしまう。とくに目のしたのくまはひどい。赤黒く、目の色は心なしかどんよりと澱み、とにかく覇気が感じられない。疲れ、というのはもちろんあるけれど、それにしても、なんていやな顔だろう。

　疲れたな。鏡の自分もまったくだ、と相づちの目線をこちらに送っている。おそろしく悪天候だというのに、今日はとても大忙しだった。
　法事の団体予約が入っていたのだ。予約だったので、忙しくなることくらい一ヶ月まえから考えるまでもなくわかりきっていたことだったのだけど、この台風にも近い激しい風と豪雨のなか、まさかほんとうに来店するなんて、と当然のことにすこしおどろいてしまった。おかげで食事も一服もする間もなく、気がついたら四時だ。

　事務所に入り、ようやく座ることができてほっとした。ふたたび立ち上がってまかないを貰いに階段を降りて（事務所は二階にあり、裏口隣の階段を使って店内を出入りする）厨房に戻る気分には、とうていなれない。空腹のピークは、とっくのむかしに過ぎていた。

いまさらなにかを食べたいとも思えなかった。
手鏡をカバンになおす。大きな茶色いレザーのエディターズバッグ。勝也が二年前、成人と誕生日のお祝いに贈ってくれたものだ。アメリカの人気ブランドのセカンドラインのもので、本家のシリーズにくらべるとずいぶん格安で質もいい。それでも、こうやって自分が彼にしてあげたことと比較してみると、いかにあたしは彼にお金を使わしているのかということがわかる。アナスイのこの手鏡も、今年のホワイトデーに勝也に貰ったものだし。
ふと考える。あたしが彼にあげたもの。
あたしが彼にあげたもの？
勝也いわく、「奥さんがいる身としては、目にわかりやすく真新しいものを身につけたりしているのはいろいろと勘ぐられてやばい」そうなので、この四年間とくになにかをあげた記憶はない。たまに彼のために料理をしたりとか、お手製おかしをあげたりとか、それぐらいだろうか。彼自身「女に貢がせる趣味はないもんで」と、あたしにまったくお金を使わそうとしない。

「……悪女か、あたしは」カバンと鏡。気がつけば、あたしの身の回りは勝也に買ってもらったものばっかりだ。仕事用に使っている、このピンクゴールドの華奢な腕時計だって。おまけに今日はいてきたかかとの高いサンダルだって、去年の誕生日にもらったものだ。
弁解したいわけじゃないが、もちろん、せがんだことなんていちどもない。勝也はひとに――というか女に――プレゼントしたがる傾向がある。フェミニストなのだろうが、ここまで来ると愛人可愛がりにもほどがある、と最近になって思う。ほんとうにそろそろ自立どきかもしれない。このままでは勝也なしではあたし、ご飯をたべるのもままならなくなるかもしれない……と想像すると、ちょっとぞっとした。
時計を見る。四時二十分。せめてうどんひと玉でも、食べないとからだに毒だろうか。

結局どうしても食欲はわかず、厨房のはしっこでミニパフェをつくって戻ってきた。コーンフレークを敷いたちいさな器にバニラアイスをふたつ重ね、白玉ふたつと餡をのせホイップをしぼり、仕上げに黒蜜をかけただけの簡単パフェだ。店のメニューにはない、あたしだけのオリジナル・デザート。それをあたしは『奏スペシャル』と名付けた。

「おはようございます」

長針が八、を指したころ事務所の扉が開かれた。それと同時、男性の声で挨拶が聞こえる。すこしあどけなさののこった高めで爽やかなこの声。主は山下くんだ。挨拶を返すため、あたしはからだをねじる。

社員用の事務机は事務所の左隅にまとめて二台ならべてある。端のほうが店長の、その隣、あたしがいま座っている机は副店長のものだ。そしてその隣にはバイト達のための長テーブルが用意されているのだけれど、それらはすべて壁際に――入口の扉に背を向けるように――配置されているので、からだをねじらないと入口に立つ山下くんの顔は見えない。あたしのモットーとして、「誰に対しても常に丁寧な挨拶を」というのがある。なので実践すべく、面倒だけどいまもしっかりとからだをねじり、彼の目を見てにっこりと挨拶をする。感じよく振るまう、ということは、あたしが好きな作家さんいわく『世界三大美徳』のひとつだそうから。

「今休憩ですか？」

ちゃっかり（という表現に似つかないような自然さで）あたしの隣に椅子を移動させ座る、山下くん。

この山下くん、というのが、去年の春高校入学とともにこの店でバイトをはじめた男の子なのだけど、これがなかなかの男前なのだ。男前、というかイケメンというほうがしっくりくる。アイドル的なのだ。笑顔がまた素敵で、はじめて彼の微笑み（仕事の指示をして、返事とともに返ってきた営業用のものにはちがいないのだが）を目にしたとき、「この子はアイドル的にもてるタイプの男の子なのだな」と漠然と理解したものだった。あたしがもし同世代だったとしたら、うっかり惚れていたかもしれない。いたかもしれないけれど、あたしはもう二十二なので、年下の男にうっかり惚れてしまうほどうかつではない。

なんでも、実家は開業医らしい。たまたま彼の履歴書を見る機会があり、住所を見てびっくりした。この店の最寄り駅からすこし山の手にのぼった場所。あたりには豪邸しかないともっぱら噂の、県内有数の高級住宅地なのだ。イケメン・金持ち、ときてさらに頭もいいらしいが、彼はとても好青年だ。ちっとも鼻につくところがない。そりゃあもてるだろうと、ともに働く日々を積み重ね、あたしは納得する。おまけに賢いだけあって飲み込みがはやく、仕事もよくできる。まだ一年ちょっとしか働いていないのに、社員さんたちからの信頼たるや、それはすごい。『完璧なひと』というのがほんとうにこの世に存在するということを、彼に会ってはじめて知った。

なんて、プチ回想にふけっていると、右頬に視線。我にかえる。隣に彼が座っていたことを忘れかけていた。山下くんはこちらを見てにこにことしていた。

「珍しいですね、中村さんがこんな時間に事務所にいるの」

「うん、団体予約でさー」

「ああ、昨日仕込み手伝いました」

「忙しかったんだよー。みんなちょうお酒のむから。ひとりで右往左往だよ」
「大変でしたね」
大変でしたねえ、と、あたしは戦場から帰還した兵士みたいな気持ちでうなずいた。
五時からはまた仕事だ。バッグから化粧ポーチを取りだす。あぶらをとってパウダリー・ファンデーションをパフで載せていく横目で、山下くんがまだこちらを見ているのがわかった。それをかすかに居心地わるく感じながらも、気づかないふりを通す。
「中村さん、お昼は何か食べましたか？」
またか。と思った。思ったことをけっして顔にだしたりしないが、あたしはまたか、と思う。
「たべたよ」
「何を？」
「奏スペシャル」
山下くんはあきれたように息をはき、パイプ椅子の背もたれにからだを預けた。
「またアイスだけですか？　いつも言ってるじゃないですか。もっと血や肉になるようなもの食べないと」
「……。」
山下くんは、ときたまこういった説教くさいことを言う。彼は完璧な人種だけれど、こういうところだけには辟易してしまう。
「山下くんってさあ。店長みたいね」

「俺は中村さんを心配して言ってるんです」

苦笑してしまう。よけいなお世話です、とは当然言わないけれど。

「もっと自分の身体をご自愛ください」

「へんな山下くんだな」デスクの卓上カレンダーを見る。今日は木曜日。

「めずらしいね、木曜日なのにバイトなんだ？」山下くんはいつも、金・土日・祝日と水曜日しかシフトに入らない。

「今日五時からって、百合ちゃんだったよね？」

「ああ」と言って山下くんは素敵に微笑んだ。

「原田さんに頼まれたんですよ、今日代わりに入ってくれって」

「ふうん、学校とおいって言ってなかった？　よく間に合ったよね」

「俺の学校、テスト週間前日は短縮授業なんです」

「へえ、そうなんだ」

いい学校だね、とあたしは感心し、山下くんもうなずいて、話はそれきりになった。

「……。」

「……。」

沈黙。

会話が途切れたので、あたしはそれで一段落ついたのだと思い、再び化粧なおしに取りかかった。しかしその隣で、山下くんはまだじっとしている。じっと、まだこちらを見ている気配。しかたなく手を止め、彼のほうに振り向いた。

目が合うと、山下くんは極上に甘く微笑んだ。にっこり。あたし

も微笑み返す。にっこり。しかしなにか話しはじめる様子もなかったので、再度鏡に向き直る。

「……。」

「……。」

なんなのだろう、この気まずい雰囲気は。

「ねえ」しかたなくあたしは化粧品をポーチにしまい、山下くんに言った。山下くんはまだこちらを見ている。目が合う。

しかし、「ねえ」のあとがつづかない。困ったな。

沈黙。困った。

「……百合ちゃん、今日どうしたんだろう」

百合ちゃん、というのは山下くんと同い年の高校二年生だ。この店でのあたしに対するバイトの女の子たちからの評価は海底を這う低さだけど、ただひとり、百合ちゃんだけはあたしを慕って仲良くしてくれる（と、あたしは思っている）。いまどきの高校生にはめずらしいナチュラルな可愛さと魅力があり、とてもチャーミングな女の子だ。

山下くんと百合ちゃんは、おなじ中学校出身だと以前聞いたことがある。山下くんはだれに対しても感じがいいけれど、仕事の要件以外で彼のほうから女の子に話しかけたりするのは、あたし（だからよけいに女子から疎まれてしまうのだった）か百合ちゃんぐらいだった。彼女の家は、駅の北方面にある山の手のふもとあたりらしい。

「ああ」、百人中百人が口をそろえて『爽やか』と形容するだろう

笑顔で山下くんが答える。なんとか話題が見つかったみたいで、あたしはちょっと肩のちからを抜いた。

「原田さん、今日誕生日らしいですよ」

「えーっ」

思わず大きな声をだしてしまった。慌てて口をおさえる。

「え、今日？」

「はい。中学の友達と誕生会するって言ってましたけど」、あたしの驚きっぷりにすこし不思議そうに山下くんはこたえた。

「そうなんだ」

「そうなんですよ」

「セブンティーンか」とつぶやくと、山下くんもおかしそうに「セブンティーンですよ」と言った。

「山下くんはもうセブンティーンなった？」

「あ、はい、三日前に」

「ついこないだったんだね」

「ついこないだです」

あたしは山下くんのほうにからだを向けると、うやうやしく頭をさげた。「それはおめでとうございます」

「ありがとうございます」と山下くんも丁寧に頭をさげる。

「しかし、若っかいね」

「中村さんも対して変わらないじゃないですか」

「変わらないもんですか」あたしは吹きだす。「二十二だよ、今日

で」
「えっ！？」
いつも穏やかな山下くんの表情がとても奇妙なものになった。驚いたらしい。
「えっ……き、今日誕生日ですか？」
「うん。昭和五十八年六月三〇日」
「それは」、ぎこちなく頭をさげる山下くん。「おめでとうございます」
「ありがとうございます」あたしも丁寧に頭をさげる。
「聞く手間が省けました」と山下くんが言うので、「聞くつもりだったんだ」とあたしは笑った。
「やっと一歳追いついた、と思ったのに」
「残念。三日だけだったね」
ふと気づくと五時五分まえだった。山下くんは慌てて制服をひっつかみ、更衣室に走った。完璧な山下くんにも、わりと人間らしいところがあるのだな、と当然のことにあたしは感心する。

＊

夜の営業は、昼間とはうってかわって閑古鳥が鳴く暇加減だった。五時台にはとうとうお客さんはひと組もやって来ず、六時になっ

てようやくひと組老夫婦がやって来たけれど、バイトの女の子がふたりやって来たので、差し引きをするとプラス1となってしまった。おかげさまで、まったくすることがなかった。しかたなくあたしはレジで夏のご案内のダイレクトメールに宛名を書く作業をしていた。

今日山下くんは百合ちゃんのかわりなので、厨房ではなくホールにいた。山下くんは基本的に中（厨房のことを中、ホールのことを外、とあたしたちは呼んでいる）で仕事をしているけれど、ときたまこうしてホールを手伝ってくれることもある。あたしはそれを大歓迎している。彼がホールに出てくれると、女の子たちのモチベーションが断然ちがうのだ。

八時までに何組かちらほらお客さんがやって来て帰っていき、八時半にはすっかり客足が途絶えてしまった。

ホールの女の子たちは、めずらしく外に出ている山下くんを囲み、きゃあきゃあとピンクの声をまき散らしてはしゃいでいたけれど、あたしが山下くんに「中に戻っていいよ」と伝えにいくと、あからさまにじつとりとした目をしてこちらを睨んだ。先輩に対してなんなのだ、その態度は！　と思いはしたけれど言わなかった。結局のところたいして気にならないのだ。だからといって、べつに。

九時になってバイトの子たちにあがってもらい、十時には山下くんにもあがってもらう。いちど事務所に上がった山下くんがふたたび制服のまま降りてきた。

「まかないたべて帰るの？」とあたしが訊くと、山下くんはにっこりして「誕生日祝いです」と、ＵＣＣのブラックをくれた。べつにいいのに、とあたしは笑ってお礼を言った。

「中村さん」

顔をあげると、山下くんはとても大まじめな顔をしていた。苦手

だな、とあたしは思う。

あたしは、この子が苦手だ。

「もうちょっと身体、大事にしてくださいね」

「……ありがとう」

辟易気味なのをおくびにも出さず、あたしは微笑んだ。山下くんは痛々しそうな――ともするとすこし腹を立てている風でさえあった――顔をして神妙にうなずいたのだった。

山下くんといると、いやでも昔の自分を思い出してしまう。

彼は当時のあたしとほんとうにそっくりだ。本人に自覚があるかどうかはわからないが、どうも背伸びがちなところだとか。ちがうところといえば、彼は周囲に感じがいいところぐらいのものだろうか。むかしのあたしはいまよりもっと感じの悪い女だった。

山下くんは当たり障りなく、誰にでも愛想がいいけれど、どこか距離を置いている節がある。ある一定のところまでは気をゆるしても、その境界線を超えると断固として拒絶をはかっているような。ほかのひとたちはどう感じているのかはわからないけれど、すくなくともあたしにはそんな風に見える。周囲を隔てる見えない壁。

それに、あの目が苦手だ、と思う。周囲と遮絶をはかっているくせに、こちらを信頼しきったような、気をゆるしたような、慈愛に満ちた目。だれにでも見せるわけではない、その目。あたしみたいな人間に、どうしてあんな風な目ができるのだろう。

山下くんに見つめられるたび、あたしの耳には聞こえるはずもない雨音が殺意を持って響きつづけるのだった。それは無理やりあたしの頭をつかみ、水中に沈めたりする。

いまでも雨は嫌いだ。もうずいぶんまえに終わったことだというのに。

＊

十一時まえには店を閉めることができた。六月は閑散期というけれど、ここのところしばらく忙しかったので、これはずいぶんとめずらしいことだ。

さて帰ろう、と厨房の裏口を開けて、あたしは愕然とした。

豪雨。

「帰れない……」夕方にはいったん雨は止んでいたのに。

とても凄まじい雨だ。ゲリラ的豪雨、とでもいうのか。風もつよく吹き荒れており、事務所につづく鉄の階段はがたがたと不吉な音を立てて揺れていた。ごうごうと唸る雨風。まるでこの世の終わりを思わせるような惨烈な光景だった。

たとえば、勝也の雨男っぷりというのはこれほどまでなので、もしかすると「今日は後半期に向けての会議」と言っていた彼が会議なんてほっぽりだして迎えにきてくれたのかと思ったほどだった。いちおう外に出て彼のノアをさがしてみたけれど、当然ながら迎えに来てくれたわけがなかった。濡れ鼠のあたしはしかたなく事務所にあがると、タクシーを呼ぶことにした。そうする以外ほかに、どうしようがあるというのだろう。車だと、ここからアパートまでは二十分ほどだろうか。もったいないが、あきらめるしかない。ほか

に手立てはないのだ。

さむい。頭が痛い。震えながらずぶ濡れの制服を脱ぎ、震えながら着てきたUネックのTシャツにサマーニットのカーディガンをはおり、デニムの短パンを履いた。足がさむい。

更衣室から出て、震えながら携帯を開くと、新着メールを知らせるアイコンが表示されていた。

げ、と思った。あたしの携帯にはめったに着信もメールの受信もない。メールがきたとすれば、ほぼすべてが勝也からのものだった。

なのに『2件』って。

不吉な予感しかしない。

受信箱を開くと、やっぱり予感は的中だった。もう一件は勝也ではなく百合ちゃんからだった。おそらく昨日のメールのつづきだろう、とあたしは思った。

昨晩、めずらしく、百合ちゃんからメールがきた。

百合ちゃんめ、とあたしは思う。メールくれるのなら、「明日は誕生日だから休みます」とか言ってくれたらよかったのに。返信がてら、あとでお祝いメールを送ろう。

しかし、めずらしく連絡がきたりするというのは、ほんとうにろくなことがない、あたしは思う。

結局どちらのメールも開かずに携帯を閉じた。なによりもまず、一秒でもはやく帰りたかった。メールを見るのなんていつでもできる。

昨日の夜、仕事の帰り道、突然知らない男の子からメールがきた。

『Ｓｕｂ：こんばんは！
本文：
紹介してもらった石川敦です☆よろしく（＾Ｏ＾）』

携帯画面を凝視し、数秒間うごけなかった。なんのことだ。当然心当たりもなかったし、紹介などと言っても、そもそもあたしのアドレスを知ってる人間自体あまりいないのに。

あたしが首をかしげながら電車を降りると、今度は電話がかかってきた。

――ごめんなさい、奏さん。

百合ちゃんからだった。この石川敦、というのは彼女の幼なじみらしく、しょっちゅう女の子を紹介しろ紹介しろ、と騒ぐらしい。無論「かたくなに断りつづけていた」が、「あまりにもしつこく詰め寄られ」「とうとう根負けて」しまった彼女は、「苦渋の決断の末」あたしのアドレスを教えたのだ、という。

受話器の向こうで、終始百合ちゃんは申し訳なさそうにしていた。よけいなことを、とあたしは思ったけれど、何度も何度も重ねて謝られ、怒るに怒れなかったのだった。

悪いヤツじゃないんですけど、と彼女は言った。

――ただ、女関係にちょうだらしないんですよねー。

最低じゃないか、と思ったが、もちろん大人の分別として口にだすのは慎んだ。そんな男に若い女のアドレスを教えるなんて（それもほとんど無断で）ちょっと問題があるのではないか、とあたしは思ったけれどそれも黙っていた。「はすっぱなお前にはぴったりだろう」と言われた気がしないでもなかった。まあ、現にそのとおり

なのだから、反論のしようもないのだけど。
適当にあしらってもらえればいいですから、と百合ちゃんは言ったけれど、言われるまでもなくそうするつもりだった。

――わたしと同い年で、××高校で、なかなかいないくらいカッコいいですよ。

高校生……（めんどうくさい）と思ったのも言わなかった。
通話が終わったあと、家に帰るまでのあいだにいくらかメールのやりとりをしたのだけど（どうして高校生ってあんなに返信がはやいのだろう？）、これがまあ絡みづらかった。

『芸能人にたとえたら誰に似てる？』
『彼氏は？』
『いつからいないの？』
『今から遊ぼうよ』
『奏ん家（いきなり呼び捨てかよ、とあたしはメール画面に向かってツッコんだ）行くからさー』
『（断ると）いつなら会える？』
『明日は？』
『あさっては？』
『しあさっては？』

とつづくしまつなのだった。
わざと話題がつづかないように単語単語で（なんて感じの悪い女だ、なんて思ってくれたら本望だったのだが）返信していたというのに、彼はなかなかの強者だった。無視すればよかったのだろうけど、彼に振り回されるがままになっていて、気がつけば深夜一時をまわっていたのにはあぜんとした。最後のメールは眠ってやると決

めて無視したのだけど、なんだかもんもんとしてしまい、まぶたはなかなか重たくならなかった。

あれだけけんもほろろにあしらってやったというのに、今日もまたメールを送ってくるなんてただ者じゃないな——タクシーに揺られながら、あたしはそんなことを思った。携帯は、メールの存在を気にすることも億劫で電源を落としてしまった。百合ちゃんからの紹介という手前、二日めにして音信不通、というのはなにがなんでもひどすぎるので、今日と明日くらいは我慢しようと思うが、それ以降もうメールすることも、もちろん会ったりすることもない。火を見るよりもたしかなこととして。忍耐よ、奏。あたしはあたしを励ました。いまだけの辛抱なんだから、と。

年下なんて最悪だ、とあたしは思った。年下なんて最悪だ。それも高校生だなんて。下手に関わろうとすれば、身もほろぼしかねない。

バス通りを折れて、タクシーは住宅地に入った。数メートルほど行ったところにある角で、降ろしてもらう。この先は、道がせますぎて車は入れない。

ほんの五メートルほどだからと、傘もささずにアパートまでの細道を走った。横着をしたあたしに天誅。雨は相変わらず局地的で、エントランスに入ってしまうころにはふたたび、すっかり濡れ鼠になっていた。やれやれ。肩をすくめ、心持ちだけ雨露をはらって傘を畳む。部屋に着いたら、まずかんたんに浴槽を洗ってしまおう。お湯を張って、特別な日用にと置いておいたブランド物のちょっといいバスソープで、今日は景気よく泡風呂にしよう。それぐらいの

贅沢は許されるはずだ。だって、誰も祝ってくれないし、ケーキのひとかけらもないのだ。

誰も祝ってくれないし。

あたしははっとして階段をのぼる足をぴたりと止める。それから慌ててカバンをあさり、すっかり無口になってしまった携帯をひっつかんだ。

――お前が仕事終わる頃、電話するから。

たしかに昨日、電話口で勝也はそう言った。

電源ボタンを長押しし、待ち受け画面になるまでのウェイクアップ時間の長さにいら立ちながら、腕時計で現在の時刻を確認する。

十一時四十二分。

いつも事務所にもどるのが、だいたい十一時半ごろだ。しくじった。その場に両手をついてしまいそうな気分だった。どうして電源を切ってしまったりしたのだろう。後悔しても、そのあいだの着信履歴は戻ってこない。

しかたなく、しょんぼりと階段をふたたびのぼりはじめる。会議中だということで、出るかどうかはわからないけれど、こちらから電話するしかあるまい。あたしは、ひとの好意を無駄にしてしまうことを――もちろん、自分が好意をもつ人間に限るが――なにより嫌うタイプなのだ。

プルル、プルルルル……プルルルル……

勝也は出なかった。

あたしはため息をついて、今度はメールボックスを確認する。新着メール三件。三件？　受信ボックスを開き（あとの二件は無視し

て）、お目当てのひとからのメールを選択する。

『Ｆｒｏｍ：伊吹勝也
Ｓｕｂ：　ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！
本文：
生まれて来てくれてありがとう。次の休みはこないだのレストラン予約したから、楽しみにしといて。
電話したけど繋がらないので。』

肩を落としてしまう。やはり電話はかかってきていた。
それにしても。勝也は聞いているこっちが赤面してしまうようなこっぱずかしいせりふを、いつも平気で口にしてしまうのだ。キザなひとはあまり好きじゃない。
もういちど彼の電話番号をディスプレイに呼び出し、受話器ボタンを押す。お祝いのことばのお礼と電話がつながらなかったことの謝罪がしたかった。
二階の踊場にかかったところだった。鍵をだそうと、携帯を耳と肩のあいだにはさみ、持ち手をひとつだけ落としてカバン内をさぐる。

プルル、プルルルル……プルルルル……

まだつながらない。
ふと、鼻のさきをタバコの匂いがかすめた。濃い、紫煙の香り。
マイルドセブン？
ちらり、と視線だけをうえに向けて、あたしはあとすこしで悲鳴をあげてしまいそうになるほどおどろいた。
男だ。階段をあがってすぐにあたしの部屋の扉はある。そのまえに背の高い男のひとが立っていた。黒いパーカーは頭からフードをすっぽりとかぶり、若者っぽいだぼだぼとしたハーフ丈の迷彩柄の

ずぼんをはいている。ばかごつい、スケーター靴に黒くて大きなバックパック。あたしの知り合いのなかに、こんな格好をする人間はひとりとしていない。

誰だろう――。

踊場から二段ほどだけのぼった場所で立ち止まったまま、足がすくんでしまい、もう一歩もまえに進めなかった。耳元の携帯からは、相変わらず呼び出し音がつづいている。

こわい。

こわかった。うっすらと鳥肌が立つ。ハヤクデンワニデテ。神にも祈る気持ちで勝也を待った。

――留守番電話サービスに接続します。

勝也はやっぱり出なかった。絶望半分、あたしは何者かを見つめた。息をひそめて、というより、ほとんど息を止めて。

男は、階段に背を向けるようにして立っていた。ほの明るい蛍光灯のもと、タバコの灰色の煙が天井に向かう。あたしはそっと左足をひとつ下の段に降ろした。とても慎重に。どうにかこの場から逃げなくては。あたしのかしこい左足は、無事物音ひとつ立てず、地面に着地した。つぎは反対の足――そろり、と右足を降ろそうとしたそのとき――

♪♪～～……――

突然、だんまりを決めこんでいたはずの携帯がけたたましい音を立ててわめきだした。

あたしは今度こそ短く悲鳴をあげ、その場にしゃがみこんだ。あまりにもおどろいてしまったその反動で、かわいそうな白色のかた

まりを地面に落としてしまう。音楽はまだ鳴りやまない。

「……。」

きっと階段上にいる何者かもこちらを見ただろう。あたしはおそろしくて顔をあげることができなかった。ただ黙って、動かずにじっとしていることしかできない。携帯の着信音もとうとう途切れてしまった。こんな風にしゃがんだりなんかしないで、急いで走りだしてしまえばよかった。すっかりタイミングを逃してしまったあとになって思った。

ゴムのようなものがコンクリートですれるような、ぎゅっ、という音がした。男がタバコを捨てて、スニーカーの底で火を消したのだろう。柵の向こうから侵入してきた雨で、踊場と階段は水びたしだった。何者かがこちらに近づいてくる足音が耳に入り、あたしは呼吸することもできなくなった。

すっ、とうつむいたあたしの顔のまえに、大きくごつごつとした手がさしだされた。あたしはふたたび悲鳴ともうめき声ともつかないちいさな声をあげてしまう。

「あんたが、中村奏?」

ふいに名前を呼ばれて、あたしは顔をあげた。

フードはいつの間にか脱いでしまったようだ。茶色みがかった短めの髪は、くせ毛だかパーマだかでふわふわとしている。細く整えられた眉、切れ長のきつくてきれいな目。すっと通った鼻筋。うすい唇。とても美しい顔立ちだと思った。ハタチ前後だろうか。とても肌がきれいだ。

意志のみなぎる、存在感のある目だと思った。それがまっすぐあたしをとらえて離さない。不覚にも、赤くなってしまった。

「そ、」たっぷり数秒経ってから、ようやく口を開く。「そうですけど」
なんなのだ、このひとは。
「どちらさまですか」

あたしの上擦ったことばに、ポーカーフェイスが解かれる。そして恐縮しきったあたしの腕をつかみ、引っ張って立ち上がらせると、くったくなくふわり、と笑った。クールな表情がくずれると、途端に二、三歳ほど幼くなった。

「石川敦。原田百合に紹介してもらった」

そしてあたかも挨拶はそれで済んだとでもいわんばかりに、くるりと背を向けると、あたしの腕をひいたまま階段をのぼりはじめた。
なんなのだ、あたしは思った。

いったい、なんなのだ。

→次話.

2.

顔にこそ出したりしないものの、勝也は苛々していた。時刻は午後十一時半をまわっている、といっても別段、時間を気にしているわけではなかった。先ほどから普段目をかけている女――俗に愛人と呼ぶのだろうが――と連絡が取れないのだ。

中村奏は普段から携帯にも縛られない自由な女だったが、『この携帯は電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため掛かりません』といった風にこちらを断固拒絶するようなことは、四年ほど交際してきたなかで一度もなかった。それも、昨夜「明日仕事が終わるころに電話するから」という旨のメールも送っていたのだから、なおさらだった。

駅の裏通りにある通いの焼鳥屋で、名目だけの“会議”は続いている。誰もが意気揚々とした雰囲気で杯を交わしている場のなかで、勝也ただひとりだけ、そんな愉快な気分には到底なれずにいた。

今日は奏の二十二度目の生誕記念日だ。しかしこの名目だけの会議があることは、年明けすぐに組んだ一年のスケジュールで決定済みだった。社員は全員有無をいわさず強制参加だ。おまけに最近では滅多に顔を見せなくなっていたオーナー夫婦がやって来ていたので、早退さえできそうもない。

――今年は誰と過ごそうかな。

最後に彼女のアパートに訪れた際、玄関先で勝也を見送る奏が言ったことばだ。十日も前のことだった。

うかつだった。誕生日当日に会えないことはわかりきったことだったが、その数日前にでも会って祝ってやるつもりだった。しかしそれもできなかった。奏に今週休みが一日もなかったのは誤算だった、と勝也は苦く思った。

気が強く他人に弱みを見せようとはしない奏だったが、その実、彼女はとても淋しがり屋なのだった。関係を持つようになった当初、淋しいときには男と抱き合うのが一番だぜ、と助言をしたのは勝也だったが、それ以来彼女は勝也の教えを忠実に守り、複数人の男と同時に付き合うような女になってしまった。

奏は美人だ。雪のようにきめ細やかで真っ白な肌、手足はほっそりと長く、下手に扱ってしまえば簡単に壊れてしまいそうなほどに華奢なからだつきをしている。つねに穏やかで品もあり、まるで上等なガラス細工のようだ。手が届かないとは思いつつ、淡い憧れを抱いている男は多い。それにつけ、淋しいときにはすぐ男に抱かれてしまう……うかつだった、誤算だった、と思うのはつまりそういうことだ。

「伊吹君、飲んでる？」

喧騒のなか、ぼんやりと冷酒の瓶を眺めていると、向かいに座っていたオーナー夫人に声をかけられ、我にかえる。瓶の中味はお猪口一杯ぶんしか減っていなかったが、勝也は「ええ」と微笑み、答えた。

「元気ないわね」
「ちょっと考え事をしてただけですよ」

苦笑気味にそんな風に答えると、オーナー夫人は神妙な顔になり、周囲にあまり聞こえては悪いと思っているのか声をひそめて「奥さん、まだ子供ができないの？」と言った。

どちらに非があるのか――「非がある」なんて嫌な言葉だな、と勝也は思った――わからないが結婚して五年、勝也夫妻はまだ子宝に恵まれない。勝也の妻は彼より五歳年上だ。勝也自身、子供は好きだし可愛いとは思うが、自分が父親になるなんてちっとも想像できない。しかし妻のほうはとても切実にコウノトリの来訪を待ち望んでいて、月に何度も産婦人科に通っている。

不妊治療、というものはとてもつらいものだ。きまりが多すぎる。あれはだめ・こうしなさい、と縛られることのストレスと、「まだできないのか」という周囲からのプレッシャーは、真綿で首を絞めつけるみたいに、女性の精神をすこしずつ駄目にしていく。勝也の妻も一度ノイローゼになってしまい、入院までしたことがあった。そのうえ保険もきかないのだ、金銭的にも相当厳しい。いちサラリーマンでしかない勝也にとって、この毎月の出費はかなりの痛手だった。

なにより、どれだけ疲労困憊で帰ってきたとしても、毎月「この日」と決められた日にはかならずセックスを強要されるのには閉口気味だった。彼女とはからだの相性がそれほどよくない。

それに比べ奏とは相性が抜群で、「今月もまだできない」と痛切に悩む妻をしり目に、奏の造りものみたいな美しいからだを思い出し、あれだけ相性がいいと子供もできやすいのだろうか、なんてつい考えてしまうのだった（「タネと卵の問題でしょう、関係ない」と以前奏はすげなく言った）。

「まあ、そうなんですが」
「可哀相ねえ、奥さん。もうあまりお若くもないし、早くできないとおからだにも負担でしょうしねえ」
「ええ。彼女の友人たちはみんなもう子供が一人二人いたりしますし。かなり焦っているようです」
「伊吹君も、もっと頑張ってあげてね」

苦笑いするしかない。ちらちらと時計を気にしていると、「なにか予定でもあるのか」と今度はその隣に座っていたオーナーが勝也にたずねた。
いえ、と慌てて首を横に振る。オーナー夫婦には、勝也がまだ十代だったころから世話になってきた。私用でやすやす先に帰ってしまうことなどできるはずもない。しかし奏のことが気になってしかたがないのも事実だった。

「ちょっとトイレ、行ってきてもいいですか？」
「奥さんに電話？」
「ええ、まあ」

ここでは、勝也は愛妻家で通っている。
「また今度よかったら、家に連れていらっしゃいよ。いつも伊吹君を遅くまで借りてしまって申し訳ないし」
「ありがとうございます」と微笑み、勝也は席をはずした。冗談じゃねえ、などと思いながら。

奏に再び電話しようと携帯を開いて、思わず額に手をあててしま

う。

『不在着信：2件』

どちらも奏からだった。掛かってきてからまだ五分ほどだったが、マナーモードにしたままだったため気付かなかったらしい。

いい兆候じゃねえな、と軽く舌打ちしながらリダイヤルする。こんな風に互いの行動が噛み合わないときは、大抵なにか悪いことが起こる前ぶれだと勝也は知っていた。

プルル、プルルルル、プルルルル……

もう携帯は繋がっているのに、奏はなかなか出ない。やがて「プツッ」という音がし、『ただいま電話に出ることができません……』というアナウンスが流れた。

ただいま電話に出ることができません？

また舌打ちがでる。乱暴に携帯を閉じると、勝也は店のトイレの前でしゃがみこんだ。まったくいい兆しじゃない。『電話に出ることができません』って一体なんでだよ。

これは……とよからぬ疑問が内臓をじわじわと浸食しはじめて、勝也は苛立たしげに頭を振り、腹部をさすった。これは彼の妻に言われて気づいたことだったが、勝也には動揺したとき、無意識に腹をさするくせがあった。

「なんで出ねーんだよ」

ちゃんと昨日連絡した。こないだの帰り際にも「誕生日の夜電話するから」とたしかに言ったはずだ。それにもかかわらず出ない、ということは、つまり「出たくない」からということになる。腹部から妙なざわめきがからだ中に広がっていく。また舌打ち。しかた

なく立ち上がると携帯をジーンズのポケットにしまい込み、勝也はトイレのドアノブをひねった。
落ち着くんだ、勝也。冷静になろうぜ。顔を洗い、目があった鏡のなかの自分は心なしかひどい顔をしていた。腹の底からは、まだ妙なざわめきが湧き続けている。これは。

――これは、嫉妬だろうか？

「冗談じゃねえよ」

勝也が肩をすくめると、鏡の自分も同様にやれやれといった風に肩をすくめてみせた。

両親は勝也が小学生だった時分に離婚した。原因は性格の不一致だ。母親が言うには、彼の父親は昔かたぎの人間で、典型的な亭主関白だったらしい。彼の母親はそういった男尊女卑な差別にはとても神経質で、お互い愛し合っていたから結婚したものの、年々我慢できない部分が蓄積し、離婚に至ったらしい。
法律でもね、男女は平等って決められてるのよ。男は外で仕事をして女は家庭で家事と子育てをしなければいけないなんて冗談じゃないわよ、まったく。男の人だってね、女である母親から生まれてくるのよ、なのにどうして女より男が偉いなんて思い込むのかしら。まったくバカみたいよ……というのを幼いうちからほとんど洗脳みたいに言い聞かされてきた勝也は、いつの間にかそれが彼自身の考え方の基盤になってしまっていたのだった。
母親はとても気の強い人だった、と勝也は思う。言いたいことはなんでも口にしなくては気がすまないタイプだったし、すぐヒステリックになった。そんな女が古風な勝也の父親と仲良く暮らせる訳

もなかったのだ。当時の勝也はとても内気な少年で、ずっと母親が怖かった。覚えているかぎり父親も怖いには怖かった記憶はあるが、目をこれでもか、といわんばかりに吊り上げて金切り声をあげるさまに比べれば、全然おそるるに足らなかったように思う。そのヒステリックな金切り声をほかのなによりも怖れていた勝也は、自分の母親に反抗した記憶なんてほとんどない。覚えているかぎりずっと母親の言いつけを守り、彼女の意思のままに生きてきた。怖ろしかった母親に逆らってまで自分の意思をとおしたのは、進学を望んでいた（大学で遊ぶような金銭的余裕なんてなかったにも関わらず）母親を、ほとんど振り切るようにして就職を決めた十八のときだけだ。

そんなわけで、昔から本当に恐ろしいのは男の暴力でも怒鳴り声でもなく、女のヒステリーだと洗脳まがいにからだに叩き込まれて大きくなった勝也は、付き合う女の子みんなを尊敬し、大事に扱ってきた。

もっとも、両親の離婚劇を間近で見てしまったためか、愛、という感情がいまいち理解できなかった。それはいまでも。結婚については例外中の例外だとしても、この二十七年ほど生きてきたなかで、“誰かを自分のものにしたい”なんて思ったことなんてほかには一度だってない、と勝也は思う。

大切なのは日一日の充実だ。結婚したからといって、勝也と彼の妻が死ぬまで一緒にいられる保証なんてない。

所詮結婚、なんていうものは、保身でしかないのだ。自分も相手も守り抜けない、氷でできた家のようなものだ。紙のうえだけの繋がりに何の意味があるのか。それが知りたくて勝也は彼女と結婚したのだが――そしてそれは勝也が思っていたよりもずっといいものだったのだが――、五年経ったいまでも正しい答えは見つからない。

疲弊して帰宅したとき、家で誰かが自分を待っていてくれるとい

うのは、想像を絶してすばらしいことだ。ちょっとした奇跡みたいだ、とさえ思う。彼女と暮らしていて、そしてささやかな未来について語ったりしていて、幸福を感じないわけにはいかない。
でも、奏を見るとからだの深部が疼く。全然愛なんかじゃない、欲望だ。おそろしいまでに底のない、純粋な性欲。

奏といると、勝也は自分でも怖ろしくなるほど遠いところまで行ける気がした。
それが最終的に互いの大切ななにかを損なう結末しか待っていなくても、いまが充実していればいい、と思った。それどころか、いつ死んでもいいとさえ思うのだった。

＊

こんな夜分おそくに、アパートの廊下で口論するわけにもいかず、しかたなく彼を部屋に入れることにした。不承不承。ほんとうに、しかたなく。

「困る、ほんとうに困るのよ」

とりあえず部屋には入れたものの、あたしはひたすら「困る」と繰り返した。それなりに冷静さは保てたものの、実際には時間も場所もかえりみず、盛大にわめきちらしたいくらいには腹を立てていた。
あたしの部屋のせまい玄関をくぐると、彼の背の高さはてきめん

に際立った。あたし（一六三センチ）と十センチも変わらない勝也。石川くんはおそらく一八〇ちかくはあろうか、といった感じだ。

――シャワー借りていい？　もろ雨浴びちゃってさ、そのうえ一時間近く待ったんだぜ。

――それとも、奏が先浴びる？　お前（お前？）もびしょぬれだな。風邪ひくぞ。

あきらかに怒の色をにじませているあたしにまったく臆することなく、石川くんはひょうひょうとしたものだった。まるで初対面だとは思えないくらいの自然さで。

あたしは洗面所からバスタオルを一枚だけ取ってきてため息をつく。まるで会話にならないのだから。

バス・トイレなどの水回りは、リビングのなかにある。引き戸を開けてすぐ右隣に入口があり、その分だけ出っぱっているのだ。だからリビングは長方形ではない。

「いいよ、さきシャワー浴びたら」ほうり投げるみたいにしてあたしは言った。それから木枯らしの風を思わせる冷たさで「シャワー浴びたら、すぐに帰ってね」と付け加える。

「なんで？」きょとん、とした面もちで彼は言った。

「なんで？」あたしは面食らった。なんで？　ってなんで？

「何時だと思ってるの。はやく帰らなきゃ、あしたも学校でしょう」

彼は耳を疑うようなことを言ったのだった。「泊めてもらう気満々だったんだけど」

「はっ？」

「学校なら、こっからの方が乗り換えひとつ減って楽なんだよね」

あたしの家の最寄り駅は、準急行だけでなく急行も停車する。石川くんは背負ってきたバックパックのジップを開き、折りたたんだ洋服を見せてくれた。

制服。

「困るんだって」いらだちも隠さず、なおも繰り返した。どうして初対面の、それも礼儀も常識も持ち合わせていないような高校生を泊めなければいけないのだろう？

彼はしばらくあたしの目を静かに見つめていたけれど、数秒後相好をくずした。

「百合ちゃんの言うとおりだなー」と。

「え？　百合ちゃん、なんて言ってたの？」聞くのがおそろしいけれど、気になる。好色女だとか男たらしだとか、どうせそんな風なことだろうけど。

石川くんは考えをめぐらすみたいにしてまた数秒ほどバックパックを睨んでいたけれど、ふっと目線をあげると、肩をすくめて立ち上がった。

「さきシャワー借りていい？」

このタイミングで？

「ガチで風邪ひきそうだから」と石川くんはカバンのなかをごそごそしながら言った。

そして突然はっとしたみたいに頭を抱え、短く声をあげた。

「どうしたの？」聞く義理もないけれど、たずねる。

どうやら替えの下着は持ってきたものの、寝間着は持ってこなかったらしい。あたしは極限に怒りが達すると無口になる。黙ってク

ローゼットをがさがさと乱雑に掻きまわし、なんとか勝也がいつか置いていったらしいTシャツとハーフパンツを見つけ、それを渡してやる。
さんきゅー、とごく軽いタッチで彼は言って、洗面所に向かう。そして、洗面所に入る角に消える間際、ひょこり、と顔をのぞかせて言ったのだった。

「あんたみたいなガキんちょなんか、絶対ハナもひっかけてもらえないよ、って」
「え？」
「言われた、百合ちゃんに」

それきり顔は引っこめられ、仕切りがわりにしているカーテンがぴしゃり、と閉められる音が聞こえた。

＊

最後にひとり暮らしの女の家に入ったのはいつのことだっただろうか。そんな風なことを考えながら玄関に足を踏み入れ、敦はすこし驚いた。
奏の部屋は、いままで敦が見てきた女の部屋のどれとも違っていたからだ。とても整然としていて、そこには完璧な秩序があった。女の部屋、というものはもっとごみごみと小物が多く――ぬいぐるみやクッションのたぐいだったり、アイドルのポスターだったり――、もっと煩雑で収拾のつかないものだと思っていた。
部屋と玄関を仕切る無地のカーテンを開けると、こざっぱりとし

たキッチンが目に入る。ちいさな水屋――のうえに二合炊きの炊飯器と電子レンジが乗っている――と木製の椅子が一脚。その真後ろ、玄関を入って右手に引き戸があり、それがワンルームへの入口だった。入ってすぐ右に洗面所らしき入口がある。広さはだいたい八畳ほどだろうが、極端に物がすくないために、体感的には実際よりも広く感じる。部屋正面には大きくて背の高い窓があり、右手の壁につけるようにしてシングルのベッドがある。ベッドの足元には冷蔵庫――ワンルームサイズのちいさなものだ――があり、そのうえには二四インチほどのテレビが置いてある。さらにその上部には、量販店あたりで千円もしないような黒と白の安っぽい無機質な壁掛け時計。窓の左手に、はめ込み型のクローゼット。中央にちいさなガラステーブル。それが、奏の部屋のすべてだった。

「シャワーありがとう」

敦がシャワーを浴びて戻ってくると、奏はすでに部屋着に着替え終わっていた。白いTシャツに、ネズミ色のスウェットパンツ。

「奏も風呂入りなよ」麦茶をだしてくれた彼女にグラスを持ち上げて感謝の意を示し、敦は言った。

「石川くんが眠ってからでいい」

「敦でいいよ」

「敦くん、明日学校でしょ？　はやく寝なさいよ」

敦でいいよ、とは言えず、まるで母親みたいな奏のことばに肩をすくめる。

明日は無論学校だ。そして期末テストがはじまる。

「どこで寝たらいい？」

「ベッドを使ってくれたらいいよ」

「奏は？」

「眠くないし、起きてる」
奏の部屋に、客用の布団はない。
「一緒に寝ようよ」
「寝れるわけないでしょう」奏の声が呆れている。
「なんにもしないよ」
「いい。キッチンで本でも読んでるから」

若いんだから睡眠はちゃんと摂らないと毒よ。あたしのことは気にしないで。
そのあとはいくら敦がことばを重ねても彼女は聞く耳を持たず、冷蔵庫を開けてハチミツと牛乳パックを取り出すと、ぱちん、と電気を消して部屋を出て行ってしまった。
相変わらず激しい雨音が聞こえてくる。おかげで三分のいちほど開けられたリビングの大きな窓から入ってくる風は冷たくて心地がいい。幸先悪りいな——しばらく雨音に耳をそばだてていた敦はため息をつくと、奏のことばに甘え、ベッドにもぐり込んで目を閉じた。
さすがに五つも年上となると、自分の意のままに扱うのはすこし難儀なことなのかもしれない。これからどうしようか、と敦は考える。明日になれば、体よく（あたしは一日中仕事があるし、石川くんも学校でしょう）追い出されてしまうだろう。それじゃあいったい、今日何のために来たのかわからない。いままで、どんなに嫌がった振りをしている女が相手であっても、家に入ってしまえばこちらのものだとばかり敦は思っていたし、そもそも、いままで自分の思い通りにならない女に出会ったことなんて、ほとんどゼロに近かった。世界の広さを痛感した気分だった。敦は戸惑っていた。
でも、まあ、あれだ。耳障りな雨音に眉をしかめながら自分を励

まそうとする。
まだ一日目だ。先は長いのだ、と。

＊

それにしてもひどい雨だ。けれどそのために気温は低く、窓を締め切っていても暑さを感じることはなくて救われた。エアコンがついたリビングを招かざる客が専用しているのだ。これでむしむしとした熱帯夜まがいの夜だったとしたら、と想像するだけで途方にくれてしまう。
ありがたいことに、本は読みかけのものをキッチンの椅子のうえに置きっぱなしにしていた（本を読んでる、なんて出てきたというのに、飲み物しか持ってこなかったことに気がついたのだった）。シンク上の蛍光灯をつけ、本を拾い、椅子に腰かける。文庫本を開きながらぶあついガラスでできた大きなグラスに口をつける。近頃は、冷たい牛乳に――低脂肪乳じゃない、正真正銘の牛乳に――蜂蜜を加えて飲むのにはまっている。
あの子、もう眠ってしまったかしら、あたしはわずらわしさからくるため息を吐きだしながら思った。
明日の朝になれば、彼は出ていくだろう。学校に行かねばならないのだから（テスト、って言っていたっけ）。
はっきりと言ってやろう。
勝手に家に押しかけてくるようなまねはしないで。もう二度と会いたくもない、と。
しかし、普段は気のつよいあたしだが、面とむかってきついこと

ばで相手をずばずば責めたりできる性分ではなく、いっこくでも早く出て行ってほしいと願う自分の意とはまったく反するように、この日からしばらく、あたしと石川くんの奇妙な同棲生活がつづいてしまうことになる。

＊

七月に入って、この数日間は連続で雨が降った。昨晩見たテレビの週間予報でも、七つすべてが雨、雨、雨、だった。

だから勝也は期待などしていなかったのだが、七月四日、今日は奇跡的に晴天だ。周知の雨男である勝也にとってはずいぶんめずらしい、お出かけ日和となった。助手席の奏はうれしそうに「今日はあたしの勝ちね」とはしゃいでいる。

先月末、奏が誕生日だったということで、とりあえずはショッピングに連れて行ってやることにした。去年港の方に出来たばかりの、大型アウトレット。アメリカのどこかの古い街をイメージして建てられたとかで、お洒落な街並みに海外ハイブランド店などのインポートから国内カジュアルブランドまで、なんと総勢一五〇以上の店舗が軒を連ねている。勝也は出来た当初から数回ほど行ったことがあったが、奏は今回がはじめてだ。洋服大好き・奏のことだから、きっとよろこぶに違いない。

「なに買ってもらおう」窓から景色を覗いたり、ときたまからだをねじって後ろを走る車を見たり。無邪気にそわそわと、車内の奏は

まるで子供だ。
「なんでも」お前が望むものならなんでも。勝也は年上らしく寛容に答える。
「なんでも？」幼稚園じみた笑顔で奏は勝也のほうを向いた。「困ったな」
勝也は思わず苦笑してしまう。誰にでも見せる訳ではないだろうが、このギャップにやられる男はさぞかし多いはずだ。

広い敷地内のあらゆるカジュアルショップ――一階から三階まで、右往左往と――をまわって、奏は次々とTシャツだのジーンズだのを選んでいく。ときたま奏の後ろで所在なさげにしている勝也に意見を求めたりしたが、彼女の選び方には悩みがほとんど見えない。手に取ってはからだに合わし、からだから離すと棚に掛けたり置いたりして、いちど遠目に商品を観察する。そしてなにか納得したように頷くと、勝也が財布を出すまえにさっさとレジに並び、自分の財布から支払いをすませてしまう。
「今日はおれが買ってやるって約束だったのに」と呆れて言うと、「勝也に買ってもらおうと思ってるのは、ちゃんと取っておいてるのよ」と大まじめな顔して言うのだった。
勝也は奏に腕を引っ張られるまま――その動作は傍目にもかなり親密に映るはずなのに、そこに愛がないなんてときたま勝也はほんとうに不思議な気分になる――五軒ほど前に入った店に連れて行かれた。
その店は、国内に多数存在するカジュアルブランドでも代表的に有名な店で、オリジナルブランドのほかに海外からセレクトしたインポートブランド品なんかも取り扱っている。カジュアルのなかにも上品さがあり、勝也も割と気に入っていて、よく利用したりする。

「どうしてこれはおれに買ってもらおうと思ったの？」

先程来たときもからだに合わしたり姿見でそれを確認していた、緑とオレンジを基調としたタイダイ染めを施したエスニック調のロングワンピース。夏らしく、気楽に着こなせそうだった（ラフ、ということばを奏は好む）。

奏によると「エスニックはこの夏ブーム」らしい。今日の彼女の服装も、ミニ丈の白いスモッグ風のワンピースで、裾あたりをぐるり、と青い糸でクジャクの羽根みたいな模様が刺繍されている。こういったものを『エスニック』というのだ、と奏は勝也に教えてやる。

値札を見たが、彼女が自分で支払いをした商品の数々と比較しても、とくべつ値段が張る訳でも張らない訳でもなかった。

「なんとなく」きっぱりと奏は言った。「これはカツに買ってもらうべきだと思ったの」

勝也には彼女の主張がいまいち理解できなかったが、可愛いのでふたつ返事で受け入れてやる。

「試着は？」タグを見ると『F』の表示。ワンサイズだ。

奏はうれしそうに微笑むと首を横に振った。「いい。この店のオリジナルはだいたいジャストサイズだから」

無邪気なのに、その笑顔はどうも男心を刺激する。勝也は無性にその小悪魔的な唇を奪いたくなって、所構わずそんな風に発情している自分に苦笑する。もう若くはないのに。

奏と関係を持つようになったこの四年ほどの間、往々にしてこんな風に理性が効かなくなることがある。いますぐ抱きたい、勝也は思った。奏は魔物だ。無意識のうちに男を翻弄する。

時計を見る。二時過ぎだった。このペースで買い物をしていれば、

三時くらいには一段落着いてしまうだろう。レストランの予約時間まではかなりある。それまで手頃なホテルで休憩して性欲と時間を消化するのもいいかもしれない。

「奏」

レジに向かいながら、勝也は彼女のそのしなやかな腰に手をまわす。勝也と奏の身長差はもともとさほどと変わらない。なのに奏といったら、ときたま十センチ近くあるかかとの高い靴を履いてきたりするのだ。そのため、今日のふたりはほとんどおんなじくらいの背丈でいる。しかしまあ、女と男とではこうもからだに違いが出るものなのだな、と勝也はすこしがっかりしてしまう。奏の腰の位置は勝也のそれの位置より、十センチ以上も上部にある。

「なに？」奏は勝也のほうに振り返りもせずに答えた。

「抱きたい」

彼女の耳元に顔を寄せ、熱っぽくささやく。くすぐったそうに身をよじって、奏はふふふ、と笑った。そしてようやく勝也を見た。

至ってまじめに言ったというのに「ちょっと疲れたから休憩したいだけなんじゃないの？」なんて言うからため息が出る。

疲れてなんかねえよ。それどころか超絶に元気だぜ。なんならここで始めようか？　と勝也が先程に増して真剣な声を出すと、はいはい、となんともムードのない返事をしたりする。

「野獣め」

なんて、いたずらっぽく笑いながら。

＊

午後四時過ぎ。アウトレットモールを出て、来た道を三十分ほど引き返したホテルに入った。ここからなら、七時に予約したレストランに二十分とかからずに向かえるから、というのが勝也がこのホテルをえらんだ理由らしい。

勝也もあたしも、とても長い時間をかけて抱き合うのがすきだ。何事もあわてたり急ぎすぎたりすることはからだに毒だ、と彼は信じているのだ。だから食事にもかなり時間をかけるし、運転中もあまりスピードを出したりしない。そんなところも彼の愛すべきところだ。不良みたいな風体のくせして、慎重でまじめなところ。

「スロー・セックス」

と勝也は言う。

それがどういったものなのか、いまいちあたしにはよくわからないのだけど、勝也とのそれは、ほかの男の子とのそれとはちょっと違う。勝也はとても丁寧にあたしを抱く。すみからすみまで、といった風に。ちっとも攻撃的じゃなく、柔和温順に。やさしくて、とてもあたたかに。

勝也がつねづね言うとおり、あたしたちのからだの相性はパーフェクトなのかもしれない。でもそれだけだ、と思った。とくべつな感情なんて芽生えない。ただ、勝也といると救われる気がする。

勝也といれば、背中に羽がはえる。からだが軽くなり、自分の生きかたに自信が持てる。

あたしは勝也がすきだ。おなじ人間として。

「居候――！？」

長いセックスのあと、勝也はあからさまに眉間にしわを寄せて大きな声をだした。

あたしはすっ裸でベッドの足元方面に頭を向けて寝そべった姿勢でいて、勝也はあたしの頭よりもっと端のへりに腰をかけていた。マイルドセブンのチャコールフィルターを口にくわえて。

「うん。はじめはなんて非常識なやつって思ってたけど、慣れてしまえばわりと一緒に住んでておもしろいなーって、最近思う」

「そのくらいの年齢のガキなんて、百パーお前のからだ狙いだろ。みえみえだな」

「まったくそのとおりなんだよね」あたしは笑ってこたえた。

「追い出しちまえよ、そんなくそガキ」、さもおもしろくなさそうに勝也が吐息とともに煙をふーっ、と吐きだした。

「いい高校通ってるらしいよ」

「しらねーけど」

「あたしの通ってた高校の教科書とは全然レベルがちがうんだよね」

「しらねーけど」

いつもあたしに自分以外の男ができたとき、彼はとても興味深そうに根掘り葉掘り聞きだそうとするのに、今回はなかなか興味がわかないみたいだった。なのでみずから石川くんについて語る。

「見た目はただのヤンキーなんだけどね。派手めだし、髪型もなんだか変だし。すっごい大人顔でさあ、高校生には見えないのよね。

でもたまにね、笑いかたといい、喋りかたとかふるまいかたといい、幼いなって感じる瞬間があるの。すっごくおもしろい。そんなときはちょう高校生っぽいんだ」

「……。」

石川くんがとつぜんあたしのアパートに転がりこんできてから、今日で五日めになる。

年下の男の子と仕事以外で関わったりするのは、もしかしたらはじめてのことかもしれない。扱いかたがよくわからず、無駄に溢れかえったエネルギーに辟易していたけど、ちょっと慣れてみれば、未知の世界に足を踏み入れるというのはわりと興味深いことだった。敬語・敬称を使わない彼と喋っているとこちらもすこし若返ったような気分にもなるし、トータル的にみてもなんとなく新鮮で、当初自分が思っていたほどもわるくないのだった。

「なあ」ジッポのふたをかちかち鳴らしながら（まったく興味なさそうに）勝也が言った。

「そのガキとはもうヤったわけ？」

あたしは目だけで彼の顔を見ながら首をふった。「してない」

そんな、命綱なしの崖のぼりみたいなばかなまねをするはずがないのに。勝也はなにを考えているのだろう。そんな、身をほろぼしかねないこと。

「彼、おもしろいのよ。あたしの家お客さん用布団置いてないじゃない。だからベッド貸してあげて、あたしは部屋のすみで寝てたのね。しばらく」

なにかの手違いでも起きたら大変だと、初日と翌日はがんばって眠らなかった。三日めからは敦が完全に眠ってしまったころを見計

らって、なるべく彼から離れたリビングのすみで横になっていた。
そしたら、さすがにうしろめたさを感じはじめたのか、「誓約書を書くからちゃんとベッドで眠ってくれ」と言いだしたのだ。

「誓約書とは？」
「『一・居候させていただく身として、主の嫌がることはしない。
一・寝込みを襲わない。
一・入浴中、着替え中を覗かない。
一・必要以上に触れたりしない。
これらを破った場合には即刻家から出て行く』」
「……十七の男なんてケモノも同然なのにな。生き地獄だな、こんなに上等な据え膳をまえにして。かわいそーに」

まったく同情のこもらない声で勝也は言い、灰皿に火も消さずにタバコを放ると、あたしの髪をすいた。胸のしたあたりまでのびたあたしの髪は、勝也が「女は長い髪のほうがいい」というのでのばしている。この四年間で手入れのために美容院には行っても、いちどもばっさり切ったりはしていない。高校時代まではずっと肩よりうえの長さでいたのに。
しばらくあたしの髪を撫でていた勝也は、すこしおもしろがる風に口を開いた。

「そんな盛りのガキ、どこで拾ったんだよ」

拾った。
あちらが一方的に押しかけてきたあげく居ついてしまったというのに。
「ん、紹介してもらった」かぎりなく無許可で、だけど。
「ふうん、仕事場の奴かと思ったわ」

「彼が？　ちがうちがう」
「まあうちんとこの奴らなんかみんな、奏に手が出せるほど強気じゃねえか」
「どういう意味？」
「奥手な奴ばっかりだろ。ちょっといい女になるとまったく」
「あたしいい女？」自意識過剰気味ににやりとしてみる。
「超絶に」、即答で勝也はうそぶいた。

「厨房の奴らなんかとくに、お前と目もろくに合わせられねえもんな。いまどきの男は弱いねー。どちらかっちゃあ、女の方が強気でさ」
「山下くんはそうでもないよ」

「山下？」と突然勝也が嫌悪感をあらわにした。「そうだ、あのませガキ」

あのませガキ。二度繰り返す。

「あいつお前に気があるな」
「そうじゃないかって思ってた」
「でもあいつ、原田さんと付き合ってんじゃねえの？」と勝也が言ったので、あたしはちょっとびっくりした。
「あ、そうなの？」あたしのことが好きなのかと思ってたけど。どんだけ自意識過剰だ。

「しょっちゅう一緒に帰ってんだろ」
「帰ってんのはしってる」
「そういうことなんじゃねえの？」
「そういうことか」言われてみれば納得する。「どうしていままで気づかなかったんだろう」

「あんなかわいー彼女がいながらお前にまで色目つかってきやがって。あわよくば、って感じでよ。ちょっと顔のいい奴はこれだから」
「カツ、原田さんみたいな子がいいんだ？」

百合ちゃんはいまどきめずらしいくらいの、フレッシュで、純情そうな子だ。彼の好みとは正反対だと思っていたけれど。

「女子コーセーいいじゃん。だって」
「うわ、オヤジ」
「そう？　歳かなー」
「歳だよ」

ま、と言って勝也がベッドにふたたびあがってくる。あたしにまたがるように。
じっとあたしの目をのぞきこむ勝也の目線はとても熱っぽくて、それがあたしのからだにも伝わり、熱をもたせる。そして目も閉じず、あたしにキスをした。音を立てて、触れるだけの短いキス。

「おれの目の黒いうちは、あんなませガキなんかに指一本触れさせねえ」

早く居候の身の程しらずなほうのくそガキも追い出しちまえよ、と。

「なに、嫉妬？」
「ちげーよ」
「怒ってるもん、なんか」
「年甲斐も大人げもなんにもねーな」勝也は苦笑して言った。
「安心してよ」とあたしは再び顔を近づけてきた勝也を脇に押しやって、ベッドから降りる。

「あたしはもう誰にも所有されたりしないの。石川くんにも山下くんにも、カツにもね」

時計の短針は六、を指そうとしていた。いい時間だ。

「シャワー浴びてくるね」とベッドの勝也に声をかけたけれど、彼は黙ったままだった。

＊

ほんとうのところ、いまさらからだの関係を持つ男がひとり増えたところでべつになんでもない、と思っていた。いまさらかまととぶるつもりもない。

問題だったのは、相手が“高校生”だということだ。あたしにとっては、それはとてつもなくおおきな問題だった。すくなくともあたしにとっては。だからはじめのうちはすごくつらかった。

彼が居ついてしまってはじめての週末、待ち望んでいた、百合ちゃんとシフトが重なる日、その午前十一時。

「テスト中なのに」とぐずぐず言って目をこすりながらホールに降りてきた彼女をつかまえ、とんでもなくやっかいな刺客を送り込んできたことについて轟々非難を浴びせる、なんてことができるはずもなく（あたしは可愛い百合ちゃんにはちょっと甘すぎるかもしれない）、そのかわりずっと心配に思っていたことを質問したかったのだけど、どう切り出していいものかわからず、初恋の悩みを打ち明ける中学生みたいにもじもじしなければならなかった。

「なんか、奏さん疲れてません？」おかしな様子のあたしを不審に思ったか、百合ちゃんのほうからそんな風に訊いてくれた。
「ちょっと寝れてなくてさ」ため息まじりにあたしは答えた。ほんと恋する中学生みたいだ。
「大丈夫ですか？」
「全然平気よ」

ならいいんですけど、と心配そうな目で百合ちゃん。会話終了。
ちがう、とあたしはあわてた。ちがう。全然平気じゃないし、訊きたいこともあるのだ。話を終わらせてどうする。

「石川くんってさ」

やっと彼の名前を口にすると、触れてはいけない傷に触ったように、あからさまに百合ちゃんの表情がこわばった。

「あいつ、さっそくなにかしでかしましたか」
「いや、そうじゃないんだけど……」

しゃくしゃく、青ネギを小口切りにしていた手を止め、あたしは彼女に向き直り、大まじめにたずねた。
「彼、家庭に問題とかあるのかな」

百合ちゃんはしばらく人形みたいに動かなかった。
「いや、あの」、あたしは慌てた。今度こそ触れてはいけない問題について訊いてしまったのだと思ったからだ。
「言いにくい話ならいいの、思っただけだから。そうなのかなー、って」
「あいつが言ったんですか？」未確認飛行物体についてたずねられ

たひとみたいな顔で、彼女はこちらに訊き返した。

「ううん、ただそうなのかなって思っただけ」

「お母さんとはぜんぜん仲良しだと思いますよ、おじさんはずっと単身赴任中ですけど」

「なんだ」

あたしは胸をなでおろした。

「てっきり帰りたくない理由でもあるのかと」

百合ちゃんはすっとんきょうな声をあげた。

「帰りたくない……！？」

「え、え、それって、あの」

「うん……じつは、三日くらいずっと家にいるんだよねー」

「あのばかっ」百合ちゃんは顔をまっかにしてぷんぷん怒っていた。可愛い。

そして、「そんな非常識なやつなんか奏さんもさっさと締め出しちゃったらいいんですよっ！」とこちらがなぜか怒られてしまったのだった。

「あたしが言ってもだめだろうし……百合ちゃんなんとか言っておいてほしいんだけど」

「だめですよ」と彼女はきっぱりと断った。「わたしの言うことなんてなにひとつきいたりしないんですもん」

奏さんの体調のためにも、さっさと追い出しちゃったほうがいいですよ。それだけ言うと、百合ちゃんはそそくさと今日の予約確認を、と二階にあがってしまった。

そんなあ、と内心あたしはなさけなく声をあげ、そしていざというときに強い物言いができないあたしは当然石川くんにもなにも言えず、彼が押しかけてきてから五日経った今日も、石川くんはゆうゆうとあたしの家から学校へと出かけていったのだった。

＊

「お疲れ、敦」

ようやく期末テスト二日目が終わった月曜日。ロッカーから明日のテスト科目の教科書を取り出している敦の背中を、突然何者かがばしん、と強く叩いた。

痛ってえ。顔をしかめて振り向けば、小学校からの悪友・ケンヂが立っていた。

「どうだった？」

「なにが」

「テストに決まってんだろ。ほかになにがあんだよ」

ああ。テストか。教科書やら辞書やらを抱え、自分の席に戻る。ケンヂもそのあとに続く。

「オレ全っ然ダメだった！　ヤマも全部外れちゃってさー」

「要領悪りいな」と敦が笑うと、ケンヂはむっとして「オマエはどうなんだよ」と口を尖らした。

「勉強したのかよ」
「金曜テスト終わってから学校でちょっとと、今日登校してから教科書をすこし読んだ」
「それだけ？」ケンヂが目をまるくする。
「それ以上なにを勉強することがあるんだよ？」反対に驚いたように敦が聞き返す。
「相変わらずやなヤツだなー。顔がいい人間ってさ、やなヤツばっかりだよなー」
「顔は関係ねえだろうよ」
「関係大アリだよ、顔がよくておまけに頭がいいなんて、ほんと嫌味なヤツ」
「上等だよ。要領がいいの。昔っから。お前とは違って」
「ひと言多いんだって。ガチでやなヤツー」

上等上等、とつめたくケンヂをあしらいながらも、数日ぶりの悪友との会話は、敦をすこしだけ安心させた。なんにも考えず選ばず、茶化したりけなしてみたり、やっと自分のことばを取り戻した気になった。
奏とはまるで会話にならない。なんとか口説き落としてやろうと敦も果敢に攻めていくのだが、あの女のガードといったら、まるで鉄の要塞みたいだ、と敦は思った。神経ばかりがすり減って、あげく気の利いた冗談ひとつ言えなくなるほどに疲弊してしまう。

「あーイライラしたら余計に腹減ったぜ」ケンヂが腹部をさすりさすり言った。
「帰ろ。今日はがっつり牛丼が食いてえな。吉牛かすき家、とくべつにオマエに選ばしてやんよ」
「あ、悪りいケンヂ。先帰っててくれよ」
「なんでだよ」肩すかしをくらった気分になって、ケンヂは高い声をだした。

「勉強して帰るから」
「は？」

オマエが？　敦を指さし、無言で訴える。

「どうしたんだよ？」
「どうしたもなにも」テスト期間中なんだから勉強ぐらいするだろうよ、敦は面倒臭くなる。
「勉強なら、今日オマエん家お泊まりコースで英語する予定だったからちょうどいいじゃん」

「誰が決めたんだよ？」敦は眉をひそめた。

「オレ」
「勝手に決めてんなよ。それに、いま俺家いねーから」
「は、なんで？」
「なんでも。しばらく帰れないの」
「しばらくって？」
「しばらくつったら、そりゃあ、しばらくだよ」

えー、とケンヂは途方にくれたように眉をさげる。

「困るってー」
「なんでだよ」
「オマエ英語得意だもん。だから一緒に勉強したかったのにさあ」
「俺じゃなくて、ホントは百合と勉強してえんだろ」

途端にケンヂの顔が真っ赤っかになる。黒いモヒカンウルフの隙間から見えていた耳が、一瞬のうちに両側とも赤く染まった。

「なっ、バ、バカヤロウ、ちげーよ！」

はいはい。面倒臭せえ。ふわふわの髪（先月もカットしたのに、痛みすぎて半年前にかけたパーマがいまだにとれないのだ）を雑にかき回すと、敦は教科書やらを小脇に抱え、ケンヂに背を向けた。頭上で手をひらひらさせる。

「図書館行ってくる。じゃあな」

「恋愛にたいしても人生にたいしても不まじめで有名なオマエが学校で勉強とはな……」後ろで、ケンヂはまだなにか喋っている。

「世も末だな」

背中を向けたまま、敦は苦笑いした。

世も末。たしかに。女とひとつ屋根のしたにもう五日間もいるというのに、まだ“モノ”にできないなんて、敦にとっては不名誉きわまりないことだった。

「世も末だよ」

とうに教室の外に出てしまってから、敦は呟いた。

テスト期間中だけあって、学校の図書室にはたくさんの生徒がいた。にもかかわらず、静かなものだ。ほかの高校だったらきっとこんなわけにはいかないはずだ、と敦は思う。

敦の通う私立の高校は、県内でトップクラスの学力を誇る。小学部から大学部まであるマンモス学校で、ここに通う人間は幼い頃から英才教育を受けてきたような、骨髄まで勉強漬けにされた者ばかりだ。しかし敦はとくにいままで――小中はもちろん、この学校に

入るときにも――とくべつ勉強してきた、というわけではなかった。要領がいいのだ、と自覚するとおり。理数系はもともと得意だったし（公式さえ暗記してればなんとかなるから、というのが敦の理屈だ）、英語なんて洋楽を聞いていればできるようになる。ほかの科目についても、とくに苦手なものはなかった。国語や社会、体育、家庭科美術さえ、それなりにこなせた。

人が多いと言っても、昼飯時だ。それほどの混雑はなく、幸い敦の定位置もあいていた。

昼食前にとりあえず場所取りだけしておこう、と席をおさえた。入口からいちばん右奥、辞書やら持ち出し禁止書架のあたりにあるテーブルの、最奥の席。他の生徒はだいたい入口付近かカウンター付近に座っている（窓があるからだろうか）ので静かだし、この場所はほかの書棚で、入口からは死角になっている。静かで、しかも目立たない。最高だ。あいていてよかった、と敦は思った。

学食を食べて一息をつくと、教科書と英和辞書を開き、勉強に取り組みはじめた。

敦の勉強法はいたってシンプルだ。授業中ノートに書いたもの、英文訳などすべてを教科書に書き込む。問題の解答もすべて。そうすれば、テスト直前は教科書一冊見返せばいいし、実にわかりやすくコンパクトだ。先端０．３ミリのカラーペンで細々書き込みをはじめる。赤・ピンクならなおいい。クリアの赤い下敷きで書き込んだ文字すべて消えて見えるからだ。

辞書と教科書とを交互に目を走らせていると、ひとつの単語が敦の目に入った。

『ｍｉｓ－ｔｒｅｓｓ』

ｍｉｓｔｒｅｓｓ。ミストリス。その意味は、

『n　主婦；　女主人；　女性支配者；　（（英））女性教師；情婦，　愛人．』

とある。

『愛人』……不倫相手、とすれば奏はその男の『愛人』ということになる。今朝の会話が思い出された。

――彼氏じゃないよ。べつに。彼、結婚してるもの。

今日、鉄の防御をほこる彼女は、男とデートらしかった。五つ上の、店の社員だと奏は言った。彼氏じゃない。奏があまりにもさらり、と言うものだから、敦はちょっと度肝を抜かれたのだった。男がいたのにも驚いたし、しかもそれが不倫だと、それもあっさりと口にするものだから当然だと思った。

つらくないのか、と敦は思わずたずねていた。自分なら冗談じゃない、不倫みたいな抜き差しならないものなんて、と思っていた。可能な限り修羅場は経験したくない。当然だ。

しかし、どうして？　と訊き返した奏は、ほんとうに不思議そうに首をかしげていた。

――あたしはべつに彼に愛情があるわけじゃないから。ひととしては好きだけど、いつか終わりがくるものとして向き合ってる。

涼やかに、奏は言ったのだった。

「『愛人』……ねえ」

俗に愛人、と呼ばれるものというのは、もっとしたたかで後ろめたいものだと敦は思っていた。

奏はちっともそんな風ではない。堂々としていて、まるで夕飯時にいろんな家庭からエサを貰ってまわる、世渡り上手な猫みたいだ。

容姿もスマートだし、実際猫に似ている。
でも、と敦は思った。カラーペンが彼の指の間でくるくると踊っている。
でも、彼女のほうはそんな風にあっさりとしていたとしても、相手は奏のことをどう思っているかはわからない、と。

――もしかしたら案外相手は本気かもよ。
――どうしてそう思うのよ？

ないない。奏は驚いた顔のまま笑った。目をまるくして。

――彼は生粋のプレイボーイだからね。複雑なことがなにより嫌いなの。とってもやさしく丁寧に扱っているようで実際は、ひとりひとりの女の子にあんまり肩入れしないようにしているのよ。

他人とうまく付き合うコツは、相手に必要以上の感情を持たないことだ、ってことを教えてくれたのは彼なのよ――奏は微笑んで言ったのだった。敦はカフェオレボウルをあやうく落としそうになった。そっか、と敦は納得した。『奏さんは大人だから』。百合が言っていたことばの意味がようやく理解できたような気がした。

勉強を再開する。彼女が帰宅するかはわからないが、いつも通り、五時になったら帰宅しよう。と敦は思った。

＊

午後七時。
勝也の車は、ホテルからさらにふたりの住む街方面へと引き返した市内のレストランの駐車場に入った。今年の春、奏と花見のあとにいちどだけ訪れた、ちょっとくだけた感じの――つまりラフで奏好みの――カジュアル・フレンチだ。
ホテルを出てから（というかホテルを出る前からもだったが）の道中、勝也はひと言も口をきいていない。

異常だ、と勝也は自分に幻滅してしていた。これじゃまるで十代のガキだ。
さすがにもう、勝也にもわかっていた。認めざるをえなかった。奏の誕生日の晩あたりから、自分のはらわたのなかで縦横無尽に暴れまわっているこのざわめき。それのせいでいま現在、勝也はこんなにも大人げない振るまいをしつづけているのだから。

オーケー、認めよう。
これは、嫉妬だ。

「伊吹様。お待ちしておりました」

その店は某ショッピング・モールの最上階にある。最上階、とはいっても立地的にもとくべつ高いわけではなく、この建物自体五階建ての中途半端な造りであるので夜景などはとくに楽しめない。が、料理がいちいち凝っていたり、めずらしい食材を使っていたりして面白い。ソムリエもギャルソンも一流料理店らしくかしこまってい

るものの、スーツやドレスで着飾っている者たちは少数、来客者の大多数はジーンズなどの軽装だ。頼めば箸さえ持ってきてくれる。しかし、あくまで値段は一流だ。

平日、ということもあって、店内はがらがらだった。窓際の席に案内される。まだうっすらと明るい空はなんだか雲行きがあやしく、ひと雨来ると厄介だな、と勝也は思った。駐車場には屋外を移動しなければならない。

「カツ」

奏が呆れたように言った。勝也はもう長いあいだ、奏にこんな顔をさせている。それでも勝也はまだ知らん顔で、飲み物をオーダーした（僕には炭酸水、彼女には今日おすすめのロゼを、食前酒はいりません）。

「ねえ、どうしたの？」ギャルソンが行ってしまって、奏が再び刺々しく口を開く。勝也はどこ吹く風だ。なぜなら彼は十代で、恋に青臭いガキんちょに成り下がっていたからだ。ええそうですとも、という開き直りほど最強な防御策はない。

「カツ」

奏が途方に暮れた声を出す。勝也が彼女に対し、こんな風な態度を取ったことなんて、いままでいちどもなかったのだから当然だった（五つも年上なのだ、年齢的にも大人の分別としても当たり前のことだった）。

いったん口をつぐみ、下を向く。それから再び勝也をじっと見つめる。眉が下がっている。

「あたし、なにかカツを怒らせるようなことした？」

「してない」

ソムリエが来たので、仕方なく勝也は口を開く。ソムリエは勝也の炭酸水をテーブルに置き、続いて奏のワインの説明に入った。大まじめな顔をして奏は説明を聞いていた。あらゆる物事に対し、奏はいつも真剣にそれらと向き合う。恋愛以外の、あらゆる物事に対して。

「……だったら、」

「奏」

ようやく説明が終わり、ソムリエが帰っていった。

「結婚しよう」

「えっ？」

「って言ったらしてくれる？」

途端に奏は困惑した顔になった。戸惑うことを、こんな風な顔をするだろうことを知っていて、勝也はわざと言ったのだ。

それでもすこしの間もあけることなく、奏は「いいえ」ときっぱり言い放ち、首を横に振った。あっさりしたものだ（そんなところがいいのだが、と勝也は内心首をすくめた）。

「カツおかしい。どうしたの、急に」

心底訝しげに、ひょっとすると怯えてさえいる様子で、奏はちいさく言った。

可愛いな、と思い、じっ、と勝也は彼女を見つめた。見つめられた奏も負けじと勝也を見つめ返した。

ギャルソンが前菜を運んで来るのが勝也の視界の端に映る。

「うっそー」

突然、勝也は変な顔をしてみせた。呆気にとられた奏が息をのむのがわかった。

「嘘うそ。冗談」

「はい？」

「やっと料理きた、と思ったら急に元気になったよ」

「意味がわからないんだけど」

「いやー腹減った。ここの料理うまいもんな」

奏は黙り、たっぷりと思案をめぐらしたあと、慎重に口を開いた。

「お腹がすいてたから、むすっとしてたの？」

勝也は微笑み、肯定した。

「それで不機嫌だったわけ！？」

こどもかっ！　奏は怒って目をまるくしたが、すぐにこらえ切れなかったと言わんばかりに吹き出した。

「ばっかじゃないの。カツのヨウチエンジめ」

くすくす、小鳥がさえずるみたいに奏は笑い、丁度同じ頃、テーブルに前菜が到着した。

「奏さー」

そのあとは、勝也もすっかりいつもの調子に戻り、くだらないことを言っては奏をおかしがらせた。小鳥のさえずり。

「なあにー」

デザートと飲み物が運ばれてきたところだった。三種盛りのアイスクリームと、エスプレッソ。奏にはカフェラッテ（くまさんが描かれていて、それはますます奏を上機嫌にさせた）。

「もーすぐボーナスだからさ、奥さんにアクセサリーのひとつでも贈ってやろうかと思ってさあ」

「いいじゃない。すてき」奏は目を輝かせた。

「で、こないだ暇だったから下見に行ってきたわけよ」

「ふうん」

「ティファニー好き？」

「うん？　あたし？」

なるべくなんでもなさそうに、勝也はカバンから青い小箱に入ったそれを取り出すと、彼女に向け、テーブル上を滑らせた。年甲斐もなくどきどきしながら。

「可愛かったから。奏に似合うなって」

奏は驚いたようにそのちいさな箱を凝視していた。無言。

「買うつもりとかなかったんけどな、ほんとは。でも奥さんのはすぐ決まっちゃったし、こんな店にくる機会もそうそうないからちょっとひやかして帰ろうと思ってさ。なんか、こう……一目見ただけでびびびびっ、ときたわけよ。『これは奏のために造られた指輪だっ！』てな。あ、サイズたぶん合ってると思うけど、もし合わなく

たって交換してくれるから大丈夫だし」

自分でもいったいなにをそんなに焦っているのか、と内心首を傾げたくなるほど、勝也は浮き足立っていた。なんでもいいからことばを重ねようと焦ってしまった結果、早口で、ずいぶんと言い訳気味になってしまった。

奏は無言のままだった。やがて勝也のことばもつきた。

沈黙。

そしてとうとう奏の表情が強張っていくのがわかった。

「……。」

絶望したように奏が顔をあげ、その大きな黒い瞳を揺らし、勝也を見た。それから再び小箱に目を落とした。

「どうして」

そう言った奏の声が小刻みに震えている。

「どうして、こんなことをするの」

想定外の事態だった。勝也は固まった。奏は泣きだす寸前に見えた。大喜びで受け取ってくれるとは踏んでいたが、まさか受け取りを拒否されたあげく、責められることになるとはまったく予想だにしていなかった。それも箱を開封もしないで、だ。なんて、と勝也は思った。

なんて惨めなのだ。

「困る」

小箱を睨んだまま、切羽詰まったように奏は呟いた。

勝也は銅像みたいに固まったまましばらく口も聞けないでいた。

「指輪は、困る……」

それきり彼女は黙ってしまった。小箱からどこにも目線を運ぼうともせず。

なんだよ。勝也の胸のなかから急激になにかが零れ落ちていくのがわかった。その正体は彼にもいまいち把握しかねた。それは、この四年もの間に奏と一緒に築きあげてきたものかもしれない。万がいちでも、そんなものがあれば、の話だが。

沈黙。とても痛い（痛々しすぎる）沈黙だ、と勝也は思った。

「おれが」、顔から表情が零れ落ちていく。からだ中の筋肉がどんどん衰えていく。

「結婚、って言ったからか？」

「ちがう」奏は彼と目も合わせようとしない。

「……でも、あたし指輪は困るの」

「箱、開けてもくれないんだな」

「……。」

消え消えにごめんなさい、と奏は呟いた。その目はうさぎのように真っ赤だった。

「いいよ、もう」なにもかもがどうでもよくなっていた。

「嫌がってんのに、それでも無理やり渡そうとするようなそんな押し付けがましい——そんなアホらしいことはしねえよ」

曲がりなりにも、それだって創立してから一七〇年ちかくも誇る立派な超一流ブランド品だ。領収書持っていったら返品はきくだろうか。明るくそんなことを考えている自分が、思いのほかダメージを受けていることに勝也は気が付く。

彼女に向けることばとしては、かなり辛辣なものをえらんだつもりだったが、奏はまだ黙って俯いたままだった。あきらめて勝也は椅子から立ち上がる。興ざめだ、と勝也は思った。興ざめだ、なにもかも。いったいどうなってんだよ。

「出ようか。送るよ」

奏の家に着くまでの小一時間ほど、お互い終始無言だった。その間奏はいちども顔をあげようとさえしなかった。

アパート付近で車を停めたとき、今日はありがとう、と言ってようやく彼女は顔をあげた。その目は依然としてうさぎのままだったものの、涙を零した様子はまったくなかった。

奏が勝也に涙を見せたのは、いままでたったいちどしかない。

たったいちどきり。四年前のあの夜だけだ。

＊

勝也のノアがバス通りの角を完全に曲がりきってしまうのを見届

けたあと、あたしは膝からその場にくずれ落ちた。
いつの間にやら、雨が降りだしていた。昼間はあんなに気持ちのいい晴天だったというのに。ごつごつとしたアスファルトに、夜のつめたい雨に、膝が痛い。雨はしめやかに、しずかにからだを冷やしていく。前髪からしずくがしたたり落ちて頬を濡らした。

はやく帰らなきゃ、風邪を引いてしまう。でも動けない。
まだ震えている。自分の両肩を抱くようにして確認する。どうしよう。心がシベリアの永久凍土のように凍てついている。寒くてたまらないのだ。

――“それ”があるだろう。

降りしきる雨の隙間から、暗闇の合間から、声がした。
懐かしい声、愛しかった声、この四年ほどのあいだずっと怖れつづけている声。逃げつづけてきた声。
あたしはぎょっとして顔をあげた。反動でしりもちをついてしまう。
だめだ、とあたしは震えた。だめだ、考えるな。帰ろう。こんなところにいるから、くだらない過去に付きまとわれるんだ。

――“それ”は『きみが僕のものだ』っていう証だ。『僕がきみのものだ』っていう証でもある。十分だろう？　そのこと以上に、なにをそんなに欲しがる？

あたしは耳をふさいだ。うめき声をあげてしまう。

――きみといる時間、たしかに僕にとってはきみが“いちばん大事”だった。嘘じゃない。きみにはいちどだって嘘はつかなかった。

やめて。
やめて。お願い。あたしは歯を食いしばって、目を閉じる。このろくでもない悪夢が頭上から過ぎ去ってくれるのを待とう、と。
――なにをそんなに欲しがる？
やめて。
――“それ以上”なにをそんなに？
やめて。
――僕、中村さんはもっと大人だと思ってた。
「いやだ……やめて……」
――残念だ。

＊

「あれ、おかえり……って奏！？　ずぶ濡れ？　どうしたんだよ？」
石川くんはベッドにねっころがってあたしの本を読んでいた。村上春樹。黙ったままクローゼットを開け、着替えをだす。
「なあ、奏」いつの間にベッドから降りたのか、あたしの隣に石川くんが立っていた。肩を掴まれ、彼のほうに向き直される。

「なにがあった？」頬に手が添えられる。あたたかい手。うつむいているので声色だけしかわからないけれど、彼はほんとうに心配そうだ。でもあたしはだんまりを決めこんでいる。

「……襲われたのか？」

あたしは無表情のまま首をふった。ちがう。それよりもっと、心をずたずたにすることだ。

――残念だ。

「っ」

凍りついた心臓がきしんだ。反射的に耳をふさいでしまった。

「ほんとうに、大丈夫か？」その異常な様子に、石川くんがいよいよ心配そうに声をだす。

まずは風呂入ろうな。風邪引くとやばいだろ？　とびきりやさしい声。濡れたあたしの髪の毛をなでる。

「それとも、一緒に入ろっか？」石川くんの声がにやりとした。からだ洗ってあげようか？　と。

あたしは茫然としてうなずいた。

「……え」石川くんが固まる。うろたえる。

「え、え、え……？　奏？　ホントに大丈夫？」

あたしは茫然としてうなずいた。

「奏……？」彼の両手があたしの頬を包みこみ、うえを――彼のほ

うを――向かされる。
石川くんの整った顔がすこし歪んでいる。眉間のシワ、曲げられた唇は半開きだ。息をしている、生きているひとの表情だ、とあたしはおぼろげに思った。そんな風なことに思いいたって、この部屋に戻ってきてからはじめて、あたしの目が、ちゃんとした目としての機能を再開したことに気が付いた。

「あ……」

あれ、あたし、どうやって部屋に戻ってきたんだろう？　階段は？　カギは？
石川くんの両手は依然あたしの頬にあてられたままだった。無為に見つめ合ってしまうかたちになってしまい、バツが悪くなる。

「ごめん、シャワー浴びて……」

くるよ。そう言い終わらないうちに、石川くんのきれいな顔がちかづいてくる。艶っぽい瞳。その奥にあやしい色がほんのすこし光っているのが見えた。
あ、と思ったときにはすでに彼の鼻先があたしの鼻先に触れたあとだった。

抵抗する間もなかった。

目を閉じることもできず、あたしは固まったまま、石川くんのキスを受け入れる。
石川くんの両手があつい。触れられている箇所から順に、しびれがからだ中に広がっていく。なによりあたしの心臓を揺らしたことは、石川くんが目も閉じず、睨むようにつよく――相手をひどく動揺させる、こわいくらいにつよい目線だ――こちらを見つめつづけ

ていることだった。なにか試されている気分になって、あつくて恥ずかしくて、それに気を取られているうちに、彼の舌が乱雑に口内に侵入してくる。若者っぽい、荒々しくてどこまでも情熱的なキス。相反して、その舌があまりにやわらかいので、あたしの心臓は必要以上にうるさく騒いでいる。大胆でいて、とてもやさしいキス。あたしは拒むことも忘れて――手も足も自由なのだ。いつでも逃げようと思えばそうできるのにかかわらず――石川くんのキスに酔いしれた。

あつい、苦しい。おどろくくらい艶めかしくて官能的だ。

彼のキスはとても長かった。このまま永遠と、そうしていられそうな気がした。悲しいのかびっくりしているのか、それともただ興奮しているのか、自分のことが全然わからない。ひとつだけ海を眺めるみたいに理解できたのは、石川くんはキスが上手い、ってことだけだった。

あたしの頬から彼の両手が離される。それがあった場所に、不意打ちのようにつめたい空気が触れて、心臓はさらにつよく脈打つ。あたしの両頬から離れたその手は、一方はあたしの脚に、一方は後頭部にまわされた。お互い、いまだ見つめ合ったままでいる。

「石川くん」、脚にのばされた彼の手が、するするとワンピースの裾からなかに入ってきた。

あたしが口を開こうとすると、もういちどキスされてしまう。まるで文句を遮るように。

「……敦」

「え？」

「敦、って呼んで。くん付けはなし。呼び捨てで」

色っぽく、濡れたように甘い声。そしてあたしが口を開くすきも

与えられず、ふたたび口をふさがれてしまう。名前を呼べなんて言ったのは君のくせに。
そのあいだに右手は脚からゆっくりと、あたしのからだを這いのぼっていく。セクシーな長い指。あたしは身をよじりもせず、おとなしくしていた。
「奏」、耳元にあつい息がかかる。切ない声だ。胸の奥をなにかが圧迫する。
「今日は、いい？」
抱いていい？
ふいに泣きだしたくなって、目をつぶった。聞かないでよ、と思ったけれど、あたしはたよりなくうなずいた。

意識は正常に戻っていた。脳の働きもいつもどおりだったと思うし、思考もしごくまともだった。
身をほろぼしかねないこと。それをついに受け入れてしまったんだ、とわかっていた。すべて、あたし自身がえらんだことだ。
年下だとあなどっていると、石川くんは予想をはるかに上回った腕の持ち主だった。
ベッドのうえの石川くんはとてもサディスティックだった。なんども息絶え絶えにさせられてしまい、なんどもゆるしを請わなくてはならなかった。終わったころにはすっかり骨抜き状態だった。経験的には絶対じぶんのほうが上だと思っていたのに。なんとも、まあ、情けない。
石川くんのセックスは、勝也のそれと正反対だった。暴力的で余地のない行為。性的感情がとどまる場所もしらず高められ、おどろ

くぐらいに動物的だった。とても凶暴だった。石川くんだけでなく、あたしも。すごく蠱惑的な石川くんの指や舌。たまらなくなって、なんどもとぎれとぎれになりながら彼の名前を呼んだ。そのたび彼は乱暴なことばづかいながらも至上に甘い声で、「敦って呼べよ」と舐めるようにあたしの耳元でささやいたのだった。

後悔しているわけじゃなかった。

だけど胸のうちがびっくりするくらいにすうすうとする。

性的行為のあとというのは、こんなにも空虚になるものだったろうか。本能的に抱き合ったのなんてずいぶん久しぶりだったので、うまく思いだせないけれど。

お互いに行為の果てにたどり着いたあと、勝也はいつまでもやさしかった。しばらくそのままじっとしていて、やがてあらかたの熱が去ってしまうのを待って、あたしから離れた。彼の持論では、余韻をたのしむまでがひととおりの流れだということになっていたからだ。

行為が終わってしまうと、石川くんはすぐにあたしから離れた。そしてシャワー借りるな、とひと言だけ言って、ベッドを降りてしまった。果ててしまったあとではない。この瞬間にあたしの胸のなかからなにかがごっそりと抜け落ちてしまったのだった。

勝也に言わせてしまえば、「セックスの醍醐味もわからないガキが」ということになるのだろうけど、これが普通なのだ、とあたしはじぶんに言い聞かせようとする。

もともと愛のない行為だったのだ。そこにないものを求めようとするなんて、愚のきわみだ、と。

♪♪〜〜〜……――

唐突な轟音。
あまりにも突然だったので、この部屋が空爆にでも遭ったのかとさえ思った。あたしは思わずベッドのうえから二センチほど飛び上がってしまうくらいに驚いた。
音はガラステーブル上から放たれていた。シルバーボディの小さな塊。石川くんの携帯だ。けたたましい爆音に、大げさなバイブレーション、なんと攻撃的なのだろう。まるで空襲みたいな音楽だった。おそらく音量は最大だ。
あたしは頭のうえからタオルケットをかぶって――それこそ防空頭巾があったら、なんて心から思った――この空襲的音楽が鳴り止むのを待った。そして頭上から爆撃機はすがたを消す。やれやれ。タオルケットから出ようとしたそのとき、ふたたび耳をつんざく殺人的な音楽がうねりをあげる。どうやら爆撃機はUターンしてきたらしかった。あたしはあわててタオルケットに逃げこむ。鳴り止む。安堵するもつかの間、ふたたび鳴りはじめる。それは数回に渡って繰り返されることとなった。

「げっ」

だから石川くんがシャワーを浴びて戻ってきたときには、もう全力でほっとしていた。
彼は手のかかる恋人でも扱うみたいにして携帯を拾いあげ、わたしながら受話器ボタンを押した。ピッ。瞬時のうちに八畳間に平安がもたらされる。
電話ごしに、石川くんは終始謝りっぱなしだった。はい、すいません。えっ、すいません。あ、すいません。全然いけます、すいません。いやホントに、大丈夫です……すいません。

「ごめん、奏」

電話を切ったあと、石川くんはあきらかに電話に出るまえより疲れていた。

「ちょっと出てくる」

「えっ？」

出てくる。いまはちょうど十時になったところだった。

「どこに？」思いのほか不満げになってしまい、慌てる。

石川くんはそれに答えず、バックパックを背負うとさっさとリビングから出て行ってしまった。「ごめん、先寝といて」、玄関のドアが開くと同時にそんなことばが投げられる。

あたしがなにか返事をするよりさきに、ドアは閉められてしまった。

→次話

『アー・ユー・ゴナ・ビー・マイ・ガール』

3.

召集場所である地元のカラオケ店には、十五分もたたずして着いた。原付を入口の脇に乱雑に停め、エンジンを切る。

バイクにまたがったまま、敦は数分間だけまどろんだ。

まだ余韻から抜けだせない頭のなかでは、一曲ループに設定されているのか、さっきからずっとおなじ曲が流れている。さっき――はじめて奏にキスをしたその瞬間から。ジャカジャカとうるさい、お気楽な古典的ロックンロール。コード進行はあくまでもシンプルに、歌詞は何度もおなじ内容が繰り返される。オーストラリア出身のガレージロックバンドの曲だ。敦は彼らがデビューした当時から、中学生のころからのファンだった。この曲はとくにお気に入りで、英文も和訳文のほうも諳【そら】んじているほどだ。いまから数年後には、某お笑い芸人が「エアギター」なるものの世界大会で見事栄光に輝くことになる、例のあの曲だった。

初期衝動。終始そのことばが離れなかった。

初期衝動。性急になるまいとするものの、敦は夢中になるあまり、余裕などこれっぽっちも持てなかった。意識さえままならないほどに、奏とのセックスは熾烈を極めたのだった。

柔軟に身をまかせながらも、その実、奏は思いのほか敦を翻弄し

た。柳の枝のようにしなやかにしなる彼女の白い肢体。細長い手足が敦の首や腰や太ももに絡みつき、それらはまるで独立したそれぞれの生物のようだった。のけぞったときにのぞく彼女の白い喉が目に入るだけで、一瞬のうちにクラッシュしてしまいそうで――やばい、持っていかれる、と最中、敦は何度思ったことか。優位はなんとか常にこちら側に保てたが、ほとんど力ずくだった。最後はほとんど力でねじ伏せるようなかたちになってしまったが、そんな風にしても組み敷いたこの女を俺は征服したのだ、と思うと、何度でも敦のからだは熱をおびるのだった。

カウンターで手続きをした人物の名前を告げると、受付の女の子が営業的微笑みを浮かべ、部屋の番号を教えてくれる。敦も営業的に微笑みかえすと、女の子は顔を真っ赤にしてもじもじしていた。

部屋に向かいながら敦は軽く左手で額の汗を拭った。シャワーを浴びて出てきたというのに、まだからだがあつい。しばらくは正気に戻れそうもなかった。出会った瞬間から感じ取っていたことだったが、つくづく魅惑的な女だ。ニックじゃないが、彼女を自分のものにしたい、と敦は強く思った。それが自分自身の理性的なところで、というよりは、ごく本能的に。

やがて部屋に到着する。２０１号室。二十人ほどはゆうに入れる広さだ。だいたいいつも、大西さんはこの部屋を指定する。今日は十人前後があつまっているはずだ。

ノックをしてからドアを開く。ちょうど誰かが一曲を終えたあとだったようで、およそ二十ほどの目が一斉に敦をとらえた。敦は途中参加が苦手だったが、いつもなにかしらと忙しい――女だとか女だとか女だとか、で――のが周知されているせいか、今日のように突然なにか思い立ったみたいにして召集がかかったりすることが多く（大西さんなりに遠慮はしているのだろうが、結局は呼び出されるのだ）、いやおうなくこのような待遇を受けることになる。まっ

たく、この待遇の気まずさは、百回経験したって慣れないものだ。

「遅かったじゃねえか」

ドアを開けたすぐ目の前にカラオケの機械とテレビが置いてある。そのテレビの正面に――敦から見て部屋の右奥に――、敦のボスが座っていた。両手をソファーのへりに掛け、からだを深くしずめるように。組まれた足がとてつもなく威圧的だ。

大西さんに呼ばれて、まだ二十分ほどだというのに。

「すいません」もちろん口に出せるはずもなく敦は平謝りするほかない。

「まあ座れよ」

「ありがとうございます」

大西さんが自分の隣を指定した。なんとか顔が引きつるのを抑えながら、そちらに移動する。その道中、ドアの正面の席――大西さんの右斜め端――に悪友が座っているのを見つけた。あいつ、ちゃっかりとそんな安全な場所に……内心悪態をつくが、いまさら「俺ケンヂの隣でいいです」とは言えず、敦はみずから狼の檻に入る兎のような心情で、一歩ずつ覚悟をかためながら大西さんの隣を目指した。

腰を降ろすとほぼ同時、タカタン、タカタン、タカタン……、と、スピーカーから無神経なほどお気楽なドラムが流れだした。

あ、と思っているうちにベースが介入し、そしてギターがうねりをあげる。マイクが目の前に突き出された。にやりとして大西さんが、「お前そろそろ来るころだなって思ったからな」と言った。

「出た、敦の十八番！」

他の先輩たちや仲間たちから歓声もあがった。低音から高音まで、音階に幅がある敦は歌が得意だ。サビの高いパートも余裕で声がでる。

画面上のニックは最高にいかした男だ。俺もまたパーマかけたいな、と敦は漫然と思いながらリズムをとりはじめた。

サビの締めくくり、お決まりのフレーズ。「Ｉ　ｓａｉｄ……」ポーズを決めて台詞を読む。

――俺の女にならないか。

内心笑ってしまう。

ばかな、と。

そんなことを口にするなんて、愚かにもほどがある、と敦は思うのだった。

ひとりの女に執着するような男なんてもはや男じゃねえ、愚鈍の極みもいいとこだ、と。

＊

部屋にのこされたあたしは、虚脱状態にあった。裸のまま、ベッドのうえで。

ひとりで自分の部屋にいるというのは、ずいぶん久しぶりのような気がし、それはどことなくあたしを珍妙な気分にさせた。石川く

んはがさがさするタイプでも、つねに喋りつづけているような騒がしいタイプでもなかったけれど、思わぬタイミングでひとりにされてしまったせいで、ワンルームには途方もなく分厚い沈黙があたしの隣に腰を降ろしている。

はやく眠りたいのに、やけに目が冴えている。まだ日付は変わっていないけれど、明日も朝から仕事だ。店の鍵を開けなくてはならない。なのに今夜はもう眠れそうもない。しかたなく立ち上がり、冷蔵庫から牛乳をだしてドリンクをつくる。グラスを片手にエアコンを切り、窓を開けると窓の外からしずかな夜の音が流れこんできた。雨はいつの間にかあがってしまったようだ。その雨のおかげか、今夜も風はつめたく涼しい。部屋に侵入してきた夜に押し出されるようにして、不穏な沈黙があたしの部屋をあとにする。

さて。

すこしずつ落ち着きはじめた頭で、今日一日の出来事をなぞるようにおさらいする。

七時に石川くんが学校に出かけていった。十時ごろ勝也が迎えにきた。それから一時間半くらいでアウトレット・モールに着いた。さきにお昼をとった。おそばだった。ショッピングをたのしんだ。勝也にはマキシ丈のワンピースを買ってもらった。ホテルに行った。いつものように時間をかけてすみずみまで抱き合った。空腹の勝也が不機嫌になった。予約時間ちょうどくらいにレストランに入った。勝也はミネラルウォーターを、あたしは赤ワインを飲んだ。やっと勝也の機嫌がよくなった。料理はとてもおいしかった。勝也はいつもみたいに饒舌に喋った。デザートを食べた。そして「たまたま」「奏に似合う」と思って「びびびびっときた」指輪をあたしにプレゼントしようとした。あたしは受け取らなかった。険悪なムードのまま帰宅した。雨が降りだした。過去につけこまれ、絶望的な気分になった。部屋に戻ると石川くんにびっくりされた。石川くんに抱

かれた。とても暴力的に抱き合った。骨抜きだった。一時間も経たず、行為は終わった。石川くんがシャワーを浴びた。石川くんの携帯が鳴った。慌てて石川くんは部屋を飛び出していった。

そしていまにいたる……か。なんと長い一日。

そういえば、今朝石川くんが言っていた。

――相手は奏のことをどう思っているかはわからないじゃないか、と。

思いだして、思わず息をもらして笑ってしまう。勝也があたしをどう思っているか？

わかってないな、とあたしは思う。石川くんはまだまだこどもだ。わかってない。勝也に他意なんてあるはずがないのだ。ただあたしが、ちょっとばかり過敏だっただけなのだ。

そうだ。あたしが過敏だっただけなのだ。あれからもう四年が経つというのに。

＊

なにやら店内が剣呑としている、というのは、事務所のドアを開けた瞬間に山下にはもうわかった。

発注の時間でもないのに、この時間事務所にいるはずのない伊吹副店長が背中から不機嫌を漂わせて机に向かっていたし（不機嫌どうこう以前の話として、もともと山下は彼に嫌われているので、今

日も挨拶したが無視された）、着替えて下に降りれば緊迫した空気に気圧されているのか、ほかのバイト達もいつも以上におとなしかった。滅多に怒ったりしない店長が怒気を漂わせているのだ。気の弱い料理長は萎縮しきっているし、あまりにも店内が険悪な雰囲気で、客商売としてピンチだ、と山下は中村奏に助けを求めようとしたのだが、彼女もめずらしく苛立っている風だった。

昼間、伊吹が常連客と喧嘩をしたらしい。

その常連客、というのが初代店長（つまりいまの店長の父親、現オーナーのことだ）がこの店をオープンさせた当初からの付き合いで（樋口さん、という）、忘年会新年会、あるいは法要などことあるごとに、もちろん普段の食事にもこの店を利用してくれていた。しかし今日の喧嘩で、樋口さんは「もう二度とここには来ない」とまでのたまったという。年間を通してみると、ものすごい売上を樋口さんだけで担っていることになる。オープン当初からずっと来店してくれている客なんてとても稀少だったし、普段温和な店長だって、それは怒るに決まっていた。

山下はそれを気の弱い料理長（今回のような揉め事が起きると、店長と副店長のあいだで板挟みの状態になり、山下はそれを毎回気の毒に思っている）に聞いたのだが、原因まではわからなかった。

そしてどうして奏までもがぴりぴりしているのかというと、喧嘩の際止めに入った彼女に、伊吹が引っ込んでろ、と怒鳴りつけたらしい（最悪だ、大人げないと山下は憤慨した）。でもいつも女の子には優しい紳士な彼らしくもない振るまいだ、とも山下には思えたのだった。

「修羅場だ、修羅場」

とバイトの女の子達は嬉しそうに噂話に花を咲かせる。彼女たちの噂（女という生き物は、どうしてああも、噂、というものが好き

なのだろう？）によると、伊吹と奏は「そういった関係」なのだそうだ。でもそれも「終わるのも時間の問題」らしい。根拠があるのかはあやしいところだが、今日の事件以前にふたりの仲は雲行きが悪いのだ、と。

「奥さんにばれたんだよ」

「不倫なんかサイテー」

「節操なさすぎ。あいつ、男だったらだれでもいーんだよ、きっと」

ふたりがそんな親密な仲なのかは――しかし伊吹が奏に好意を寄せているのは明らかだ――さておき、あのまめな副店長がそんな失敗をするとは思えないので、山下は彼女達の憶測ははずれている、と予想する。

それに彼女たちはわかっていない、と山下は思った。

「だれでもいい」なんて嘘だ。現に俺は相手にされていない、と。

いっそ、中村さんが彼女達の言うような節操なしだったらよかったのに、と山下は思う。というか噂話になる副店長がうらやましい、とも。噂のなかだけでも、中村さんと恋人になりたいとさえ思うのは、いよいよ俺も重症だ、ということになるのだろうか、と煮付けを器に盛りながら山下は考えている。

＊

「うわのそらだったな、なんか」と、解散したあとでヘルメットを被りながらケンヂが言った。

敦は不思議そうにケンヂの方を振り返る。「誰が」
「オマエ以外にだれがいるよ」
「俺？」
「その俺だよ。ほかにだれがいるよ」

カラオケ店を出たのは、もう朝の五時過ぎだった。外の空気は、まだ肌に張りつくみたいにひんやりとしていたが、すでに陽は山から顔をのぞかせていた。エアコン漬けにされた敦のからだに陽はとても優しい。帰って寝る時間はないな、と敦はげんなりと思った。今日もテストがあるというのに。

実家に戻れば、七時前には家を出なくてはいけない。とても微妙な時間だった。駅前のファーストフード店で時間を潰してもいいが、ケンヂは家に帰るとかいう。しかたなく敦も帰ることにする。バックパックの着替えも入れ替えたいし、ちょうどよかったかも、あくびをしつつ原付にまたがったところで、ケンヂが「うわのそら」発言をしたのだった。

敦は鼻で笑い、「意味わかんねえ」と仏頂面のまま言った。誰が？　自分が？　よしてくれよ、ばかばかしい。

「いや、ホント変だったよ。音ははずすし歌詞はトチるし、全体的にテンションも低かった。先輩達も言ってたぜ」

「え」と敦は顔をこわばらせた。「言ってた？」誰が言っていたのかが重要だった。
「だれって」とケンヂは眉間にシワを寄せながらマイルドセブンに火をつける。そしてなんでもなさそうに、敦がいちばん恐れている名前をさらりと挙げるのだった。
「大西さんとか」

思わず敦は片手で顔を覆ってしまう。絶望。あのひとに目を付けられてしまえば生きてはいけない。

「けどまあ」、顔からみるみると生気がなくなっていく敦をみて、あわててケンヂがフォローにかかる。

「怒ってたわけじゃねえし。オレと違って気に入られてるしよ。『なんか変じゃなかったか？』ぐらいのことだったよ」

「……。」

敦はキーを差し込み、セルボタンを押してエンジンをかける。まだ左頬にケンヂの視線を感じながら。

「なんかあったのか？」

「べつに」

「答えてくれねーの？」不満げにケンヂは言った。

「答えるもなにも」うっとおしそうに敦はアクセルを開いて空ぶかしする。

「べつになんにもねえし」

ケンヂには少々お節介なところがあった。それは時に敦を煙たがらせる。

「つうか、最近家にも帰んないでどこ行ってんだよ。あんまりおばさんに心配かけてんなよ」

余計なお世話だった。母親じゃあるまいし。幼なじみにうんざりする瞬間はこのようなときだと思う。うるせえな。と呟いて敦はアクセルを開き、原付を走らせる。ケンヂがなにかを叫んでいたが、

真っ向から無視した。

＊

散々な一日だった。

昨夜、結局石川くんは帰ってこなかった。思わせぶりな睡魔は、東の空が白みはじめたころになって、ようやくあたしの布団に潜りこんできた。

寝不足。それにつけ、お昼のピーク時に“とんでも事件”の勃発。勝也が常連さんと問題を起こしたのだ。なにが理由だったのかはわからない。しかしそのおじいちゃんもなかなか口の悪いひとで、悪気はないのだけど（おそらく）、ときに新人の子たちの心をぽきんと折ってしまうこともある。だからといって、こちとら接客商売をはじめてもう十数年になる勝也だ。売り言葉を買ったりするほども彼は気が短いわけでもないし、なにより「お客様は神様」なのだ。それも相手が四十年来の上お得意さんなのでなおさら。ほんとうに今日のことは、まったくいつもの賢い勝也らしからぬことだった。

――煩せえな、引っ込んでろ。

今日の勝也はどうかしている。口論する声が聞こえたから慌てて止めに入ったというのに、とんだとばっちりをくらってしまった。勝也に怒鳴られたのははじめてのことだった。そのときはむっとするよりもおどろきのほうが勝ち、呆けた面もちになったのだけど、その後いっこうに機嫌を直さない彼に、しだいにこちらも苛立ってしまった。まあ、温厚な店長もさすがに今回のことには怒り心頭だ

ったからしかたがない。きっとしばらくは尾を引くだろう、とあたしは予想する。クビにはならないだろうけど、ちょっと心配だ。

そのようにして、店長が帰る九時までは店内の雰囲気はあたしがこの店に来て以来最大に険悪なものでかなりくたびれた。店長が帰ったいまも、勝也はまだ不機嫌でいる。それになぜか、十時半ごろに発注のために事務所にあがったかと思えば、さらに不機嫌に磨きをかけて戻ってきたのだった。懲りずにまたバイトの子と揉めたりでもしたのだろうか、と首をかしげてみるが、真相は当事者のみぞ知る。

「なあ」、売上金を勘定していると、いつのまにやらうしろに渦中の人物が立っていた。

「このあと、あいてる？」

今日は十時まえに客足が途絶え、店内はノーゲストだ。料理長は高校生たちと一緒に十時で帰ってしまった。なのでいまは厨房にフリーターの男の子がひとりのこっているものの、ホールでは勝也とふたりきり。

「ちょ」あたしは顔をしかめて背後から腰にまわされた勝也の両手をはがそうとする。「店のなかでくっついたりしないでよ」、ここからは見えないとはいっても、厨房にはひとがいるっていうのに。

勝也は離れない。それどころかさらにからだを密着させてきた。

「いいじゃん、見せつけてやれば。ここでする？」

「しないって。ばか」

耳たぶを勝也が甘噛みした。あたしは戸惑いながらも抵抗する。

たとえこのような状況下にいたとしても、勝也がこんな風に店でちょっかいをかけにきたりしたことなんて、いままでいちどもなかった。

「カツ、変」

当然ながら、いくらあたしが抵抗をみせたところで、男性の腕力にかなうはずもない。勝也はフェミニストだ。どれだけ自分の気持ちが高ぶっていとしても、女の子が嫌がっていればすんなりと手を引いてくれる。それもいまのあたしのように本格的に抵抗をはじめているのならことさらに。

とうとう、金銭の勘定もままならなくなってしまった。首もとのボタンがひとつずつゆっくりとはずされる。しずかに抵抗を試みつづけてはいるが、まったくの暖簾に腕押しだ。からだを反転させられ、あたしは勝也と向き合うかたちになった。声をあげてしまえば、厨房の男の子に気づかれてしまう。あたしは唇を噛みしめ、渾身のちからをかけて勝也を睨んだ。勝也の片腕があたしの首のうしろに添えられ、ふたりはそのまま崩れ落ちるみたいにしてレジカウンターのしたにしゃがみこんだ。どたどた、と派手に物音を立ててしまったのに、勝也はまったくのどこ吹く風であたしの首筋に顔をうずめたりする。あたしはもう限界だった。

限界。あいていた左手でこぶしをつくり、大きく振りかぶる。それを思いきり彼の後頭部に落としてやった。

「っ……痛って！」

「四十五分づけであがります。現金チェックのつづきだけお願いします」

制服のみだれをなおしながら、あたしは彼に背を向けた。

いままで勝也に対して感じたことのない感情が、あたしのからだ

の片隅にぷつぷつと湧きはじめていた。
気まずい。
昨日の夜のことについて、自分ではあまり気にしないようにした。だからこそ、意を決したあたしが昨日はごめんなさい、と謝ったとき、「いいよ」といつもどおりの勝也が笑ってくれたのにほっとしたし、それ以後その話に触れたりしないでくれたのにも安心していた。またこれから、いままでどおりの関係に戻れる、と思っていたのに。
気まずい。勝也はあたしの最大の理解者で、よき関係のパートナーだ。はやくほとぼりが冷め、こんな気持ちもすぐに薄れてしまわないかな、とあたしは思った。

しかし、あたしと勝也の関係は、この日から一週間ほど経った日、見るも無惨に崩れてしまったのだった。

＊

突然アパートのチャイムが鳴ったとき、あたしと石川くんはトランプをしていた。ばば抜き、七並べ、神経衰弱、大富豪。ふたりでして、なにも面白いことはない。
「誰？」と石川くん。
「誰だろう……」誰？　訊きたいのはこちらだ。

もう二度と会うことのないような気でいたけれど、性交した翌日の晩、帰宅すると、なにくわぬ顔の石川くんは、平然とあたしのベッドで本を読んでいたのだった。それから一週間、いまだのいまだ、彼とあたしはこの奇妙な同棲をつづけている。しかしあの日以来、あたしたちは抱き合っていない。

そろそろ日付も変わる。そんな夜分遅くに、というかあたしのアパートをたずねてくる人間じたいめったにいないのに。その可能性のあるとしたら、挙げられる人物はひとりだ。

「……はい」

鉄扉ごしに返事をする。それからおそるおそる魚眼レンズを覗いた。

「おれ」

はたしてあたしが予想した人物が外にいた。

おおかた誰かというのはわかっていたものの、あたしはびっくりして——というか半分以上困惑して——ドアを開けた。いつのまにか石川くんもうしろについてきていた。

「よう」小脇になにか封筒らしきものを挟んで、勝也は爽やかに言った。両手をジーンズのポケットに突っ込んで。

「……よう、じゃないよ。どうしたの、いきなり」

まともに会話を交わすのは、一週間ほど前に店で彼にゲンコツを落として以来だった。それ以来いちどもメールや電話さえしていなかった。

「大事な話があるんだ」と言った勝也は、そのときはじめて石川く

んのほうを見たのだと思う。
「例の居候君か」と勝也は言って、鼻をすこし鳴らした。
「誰このひと、奏？」と石川くんはうしろから抱きすくめるみたいにあたしの肩に両腕をだらんと掛け、つむじあたりに顎を乗せ、言った。挑発する気まんまんなのだ。
まだいたんだな、とつぶやいた勝也の目の色がさきほどと違っているのに気がついて、内心ため息をついてしまう。
「なあ奏、さっさと追い出しちまえよ、こんなくそガキ。かさばって仕方なさそうだな」
まったく大人げない、とあたしは思った。フェミニストで女の子には極上にやさしい勝也だったけど、相手が同性となるとすぐむきになった。売られた喧嘩は買ってやる、上等だよ、という雰囲気が声になって彼の背後から聞こえてくるようですらある。
「ああ、あれだ、愛人サン」
「悪りいけど、少年。おれ奏ちゃんにね、大事な用があんだよ。ものすごーく大事な用がね。しばらく外に行っててくれねーかな。これでコーラでも飲みなよ」
勝也は財布をジーンズのうしろポケットから出すと、スマート千円札を抜きとり、ぴっ、と石川くんに差しだした。
外。とあたしは――と石川くんもきっと――思った。あたしが帰宅してすぐあたりから、強い雨が降りだしていた（梅雨は明けたはずなのに、最近はまだ雨が多い）。
「こんな時間に？」ちゃっかり千円札を受け取りながら、石川くんの声がにやにやしている。上等上等、といった風な声。
「こんな時間に、いたいけな高校生を外に放り出すんだ？　雨なの

に？」
「そうだよ。受け取っただろ、金」
「オトナゲないんすね」

勝也が黙り込んだ。いらいらしているのが手にとるみたいにしてわかる。纏うものが棘だらけなのだ。
しびれを切らしたあたしは石川くんの腕を引っ張り、「石川くんは奥にいて」と言った。

「カツ。用があったのなら連絡くれればあたしが外出たのに」
「急用だったんだ。すげー大事な話なの」
「ここじゃだめなの？」
「座ってゆっくり聞いてほしい」

今度はあたしが黙り込んだ。すぐうしろに、まだ石川くんの気配がする。
「奥にいてよ」と、犬や猫にするみたいに手ではらう仕草をしたときだった、勝也がとんでもないことを言いだしたのは。

「おれさ、店辞めることにしたんだ」

あたしは勝也を見た。ばかみたいに立ちつくして。
え？　辞めることにしたんだ？
「うそ」呆然としてあたしは言った。
「な、大事な話だろ。聞いてくれる？」
「……。」

石川くんに向き直る。そしてふたたび彼の腕を引っ張ると、たたきに向かった。

「な、ちょっと、奏？」
「ごめん、埋め合わせはかならずするから」
ぎゅうぎゅう押されて無理やり靴をつっかけさせられた石川くんは、「信じられねー」だのあれこれ文句を言っていたけれど、「十五分だけだからな」と最後には、大人げもなく思いやりの心ひとつ持ち合わせないふたりを呆れた風に見やり、出て行ってくれたのだった。
「……。」
さて。
バタン、という音のあとの静寂は思いのほか重苦しくて、あたしはすでにこの状況にまいっていた。
勝也の全身から、イレギュラーの香りが漂いまくっている。ちっとも普段どおりではないのだ。どう振るまっていいのやも、どう声をかけたらいいのやもわからず、あたしはしずかに途方にくれる。
「部屋、入っていいか？」たたきに立ったままの勝也が口を開き、あたしはそこでようやくあたしを取り戻した。
「どうぞ」
「おじゃまします」
「なんか久しぶりな気がするわ。奏の部屋」と勝也のたのしそうな声をうしろに、あたしはひとまず飲み物をつくった。自分用におなじみの牛乳ドリンク、勝也にはカフェオレ。
今日の雨は体感温度をあげてしまうたぐいの雨だ。ひどい湿気である。これは朝までエアコンのドライ機能フル稼働でまずまちがいなさそうだ。

「なんで急にお店辞めることにしたの？」コトリ、とガラステーブルにグラスを置きながらあたしはたずねた。
「店長に辞めろ、って言われたの？」
「違うよ」
「だったらどうして？　樋口さんの件で店に居づらくなったの？」
「それも違う」
「だったら」

アイスコーヒーを嚥下する勝也の喉が、とても色っぽい。グラスを置いて、彼はあたしの目をまっすぐ見据えた。

「おれずっと夢だったんだ、自分で店を持つの」
「しってるよ」

それはよく知っている。勝也はときたま、その夢の話をしてくれた。おいしいコーヒーの飲める画廊をしたいのだ、と。イベントを開くときには、昼間はカフェとして夜はダイニングバーとして。

「まとまった金が用意できたんだ。東京のツレがいい新人画家を紹介してくれてさ、置ける絵も見つかったし」
「よかったね」
「でさ、」

勝也はもともと関東の出身で、彼の両親が離婚したときにこの街に引っ越してきた。いまでも向こうに、たくさん友達がいる、とは聞いていた。

「店開くのも、向こうにしようと思うんだ」

向こう？

「え？」
「東京」と勝也はさらり、と言った。
「それはまた」遠いね。声がちいさくなる。
「おれのツレ、あっちでわりとおもしろい仕事してるやつばっかなんだよ。コネも期待できるから」
「……。」
「昨日オーナーと飲みに行ってさ、相談したんだ。おれあのひとには若けえ頃からずっと世話になってきたからさ」
「……そっか」
「あのひとの許可が降りないで勝手な真似はしたくなかったし」

あたしは黙った。
どうしていま、ということを訊きたかったけれど、それはもう訊くまでもないことだ。
勝也はあたしと別れようとしているのだ。
今月あたまに揉めた指輪事件のあと、あたしと彼のあいだに存在していたものは、原形もとどめず無残に壊れてしまっていた。修復不可能、と勝也は判断したのだろう。いらないものを捨てるのに、自立どきを決めたのだ。

これは別れ話だ。

どこか他人事のように思っていた。ああそうか、別れ話か……と、そんな風に。
四年もつづけてきたこのだらしなくも心地よい関係にいま、終止符が打たれようとしている。なのになんにも感じないあたしは、人間としてなにか大事なものが欠落しているのかもしれない。

「奏」

あぐらをかいていた勝也が、姿勢をただした。
「今日は頼みがあってきたんだ」
「頼み？」
別れよう、ってこと？　と心うちでたずねるあたしに、勝也は手に持っていた封筒から書類らしきものを取りだしながら言った。あたしたちの住む街の市役所の封筒？
「ついてきてほしい、奏に」
あたしの目をまっすぐに見つめ、そう言ってガラステーブル上に広げたのは……
「……うそ」
「嘘じゃない。これを提出すれば、おれたちはもう夫婦じゃない」
「うそ、なに、どうして？」
離婚届には、勝也の奥さんの几帳面な字と印鑑がしっかりとあった。
「やっと気づいた。いままで散々遊んできたけど、おれは一番お前が大事なんだ」
「……。」
「ついてきてほしい」
頼む口調ではあるけれど、勝也の目は「ついてきてくれるよな」と言っている。
なんだろう、これ、とあたしは思っていた。手先がしびれたみた

いに震えている。

「べつにいますぐ結婚してくれ、って言ってんじゃないんだ。とりあえず、ついてきてくれるだけでいい。奏は、おれの側にいてくれるだけでいいから」

一緒に住もう。それでちょっとだけ店を手伝ってくれたらありがたい。その分の給料だって多めにして払ってやる。

「いままでみたいに自由な関係ではなくなるけど、悪いようにはしないよ」

「……。」

「なあ、お願いだ、奏。おれはお前と一緒にいたいんだ」

「……でも」

「東京って言っても、千葉寄りの郊外だからそれほど空気も悪くないし」

「あのね、カツ」

「歩けばおしゃれな店とかおもしろい店だらけだぜ、向こうは。悪い話じゃないだろ？　おれとお前だったら絶対うまくいくって。おれたちいままでうまくやってきただろ」

勝也の目が本気だ。前提前提として話しをしてはいるけれど、ほんとうはすべて、彼のなかではもう決定済みの事実なのだ、とわかっていた。

泣きそうだった。

勝也がそんなにまで、あたしのことを考えていてくれて、そんなにまで、あたしのことを大切に思ってくれていたなんて。

勝也の言うとおり、あたしたちはこの四年ほどのあいだ、うまくやってきた。ほんとうにうまくやってきた。大きな喧嘩はおろか、ちいさな揉め事ひとつ起こさなかった。あたしと彼なら、もし生涯

をかけた生活のパートナーとなったとしても、きっとお互いを苦しめたりするようなことは、決してしない。断言できるほど、それはたしかなことだった。
勝也の言うとおり、なにも悪いことはないじゃないか、とあたしは自分に言い聞かせる。もともといまの仕事を生涯つづける気もなかったし、そんなフリーター女の行く末など、決まりきったものだった。いつか結婚をして子供を産んで、安定的な生活を求められるのだとしたら、その相手は勝也みたいな男性であるのがいちばん理想的じゃないか、そう思ったのも間違いない。

でも、と思っていた。

でも。
泣きそうだ。可能なかぎり、あたしは自分の恩人を、傷つけるようなまねはしたくない。

でも。
答えはすでにでていた。
勝也がはじめのことばを口にしたときには、すでに。

「……ごめんなさい」

顔をあげられなかった。まつげ一本動かせない。

おそろしく長くてつめたい沈黙があたしたちの頭上に鎮座していた。
あまりに長い時間の経過を感じたあと、勝也はふ、っと声を漏らした。
「そうか」と言って、勝也は笑った。卑怯なあたしはやっと、顔をあげることができた。

「ホントは訊かなくてもわかってたけど、」

穏やかな表情ではあるけれど、とても冷静な風ではあるけれど、その声はびっくりするくらいに傷ついていた。微笑みらしきものを浮かべているぶんだけ、彼の様子はよけいに痛々しく、惨めたらしかった。

「つめたいんだな」

あたしはいやに平坦な気持ちで、勝也を見ていた。ひどく傍観的に。

「どうも思わないか、おれたちただのセフレだもんな」いまにも泣きだしそうな笑顔だと思った。勝也がいつも通りに笑おうとするぶんだけ、悲しみはいっそう際立った。

信じてもらえないかもしれないけど、と氷の顔のままあたしは思った。心臓までつめたい。

信じてもらえないかもしれないけど、あたしはほんとうに勝也だけは傷つけたくなかった。

「悪かった、と思ってる。ほんとうに。お前をそんな冷酷な人間にしたのはおれだよな」

「……ちがうよ」

あたしはもともと、こんな女だったんだよ。

凄惨な顔をしたまま勝也は立ち上がった。「帰る」

「まあ、今月中は店にいるからよ。いち社員といちバイトとしてもうしばらく付き合ってもらうよ、中村サン」
見送りのために立ち上がろうとすると、「来ないでくれ」と制止された。

「じゃあな。いままでありがとう」
「……カツ、」
「おれはほんとうに、この四年間楽しかったよ」
「……。」
「お前もいつかまた、誰かを愛しいと思えたらいいな」

また、誰かを愛しいと思えたら？

ばたん、といやに重々しく閉じた鉄扉の音を聴きながら、あたしは思った。
ひどく感傷的だった。履き違えているわけでもないのに。無惨に傷ついたのは勝也で、彼に対してそんなむごたらしい行動をとったのは、ほかならぬあたしだ。ちゃんとわかっていた。
別れたんだな、と気が遠くなりそうなほど漠然とあたしは思った。
あたしたち、別れたんだ。とくべつ別れたいと思っていたわけでもなかったのに。エアコンの風がやけに肌にぴりぴりとした。

＊＊

彼女の停学が明けてからここ一週間ほど、あのセドリックを見掛けないな、と思っていた。勝也がつねから目障りだ、と感じていた例の黒い車だ。しかし、もしかするとすでに彼女が帰ってしまったあとだったか、あるいは停まっていたのにそれを自分が見逃していただけかも、と結論づけていたので、その夜、事務所のパイプ椅子のうえで放心した面持ちでいる中村奏を見つけたときは、すこし驚いた。

「珍しいな、今日はお迎え来てないんだ？」

自分（副店長用）の椅子ではなく、彼女の隣のパイプ椅子に座り、声を掛けてようやくその存在に気づいたように奏は勝也のほうに首をまわした。普段の天真爛漫な彼女にもおよそ似つかわしくもない、意識の沈んだ目をして、奏は勝也を見た。

何週間か振りに出勤するようになったここ一週間ほど、奏の様子がいままでとは違っている、というのには、彼女が制服のまま――服装にこだわる奏はいつも一旦帰宅し、着替えてから出勤していたのに――でいた時点で、もう気づいていた。

ほんとうはこの一週間その忌々しいセドリックを見掛けないことよりも、彼女を包む空気が勝也に“それ”を教えていた。

失恋したな、と。

その男は、奏のシフトが入っている日は毎日迎えにきた。まめなことで、と、存外女に対しまめである勝也は面白くもなく思ったものだった。ご自慢の黒いセドリックで。彼女の終業時間の三十分は

早くに。そしてときたま、奏とふたりで店に食べにもきた。カウンター席の端に寄り添い合って座り、寿司だの一品料理だのをつまみつつ、指をからめたり互いの耳元でささやき合ったり、まるで日本人らしくもない甘くとろけきった雰囲気に、勝也は毎度毎度も唾棄したい気分でいた。

「今日はなんか用事でもあったんだ、彼？」

彼女の顔を覗き込むみたいにしてたずねる自分のしらじらしさに、勝也は内心苦笑した。悪いやつだな、おれ。

「別れたんですよ」

案の定。

顔がにやけそうになるのを、大人の分別としてかろうじて抑え、勝也はへえ、と気のなさを装い答えた。彼がまさかそのポーカーフェイスの裏で、「ざまあみろ！」と相手の男に向けて親指を下に突きだしているなんて、奏は思ってもみないだろう。

「あんなにアッツアツだったのに？」

「その表現、ちょっと古すぎてサムいですよ」

「え、そう？」

「そうですよー、古いですよ」

奏が笑った。仕事用のつくりものではない、本物の、彼女の笑顔。それを見たのはずいぶんと久々のような気がして、勝也は心臓がぞわぞわと騒ぎだしたのを感じた。

――これはチャンスだ。

思えば、奏が十六の春にこの店にやってきたときから、勝也は彼女と『いちバイトと社員の関係』以上の関係になってみたい、とひそかに思っていたのだ。

何事もすべてがタイミングだ、と勝也はつねから信じている。タイミングタイミング、と思いつつ、うまく勝也のそれと彼女のそれが交差する瞬間を待ちわびてはや二年。その間に勝也は結婚し、彼女はしょうもない（と勝也が思っている）男などに引っかかってしまった。

良い人間関係、というものはすべて、『需要と供給』の一致によって生まれていく。上下の関係、左右の関係、心と心の関係、欲と欲の関係。タイミング、とはつまりそういうことだ。それがちょっと食い違えば、需要だけが多く供給はちっともそれに追いつかない。あるいは需要などほとんどないのに供給は延々つづけられていく。その多少は互いに循環していて、あるときかちり、と歯車がかみ合うようにして均衡がとれる。それが、勝也の言うところの『タイミング』、というわけだ。

気がつけば、さっきまでたのしそうに笑っていた奏の顔から、いつの間にかその笑顔がなくなっていた。

かわりにあるのは、絶望、かなしみ。

「……泣いてんの？」

勝也がおどろくより先に、当の本人が自分の涙におどろいたようだった。無意識の涙、というやつか。

泣いてません、と言った奏は、いまにも事切れそうだった。笑えねえなあ、と苦笑しながら勝也は思った。

「大失恋、ってか？」

そのことばは、まだほんのわずかに残っていた奏の平常心を無情にも握り潰してしまった。それを皮切りに、彼女は壊れたみたいに泣きだしたのだ。声をあげて、年の割に大人びていてつねに穏やかないつもの彼女の面影はこつぜんとその姿を隠し、代わりに姿を見せたのは、まだまっしろで清純な幼い少女だった。

まだ子供なのだ、と勝也は思った。と、同時、十代のこのあどけない少女を、自分の手で成熟した女に育ててやりたい、とも。

心の動きを関知した勝也の脳は、すばやく彼の体中に命令をくだした。

勝也は手を伸ばし、隣で背中をまるめちいさくなって涙を流しつづける奏の肩に腕をまわした。奏はぴくり、ともしなかった。

もう片方の手が、その涙で濡れた頬に触れ、顔をあげさせる。ためらうことなく、勝也は奏の唇に自分の唇を重ねた。半開きのそれのなかに、舌をやわらかくねじ込む。奏に、抵抗する素振りはまったくなかった。

「なあ中村」

彼女の舌のあまりのやわらかさに、頭がくらくらした。

「方法なんてもんは人間それぞれかもしんねえけど、そんな風な恋愛ばっかしてると、そのうち身を滅ぼすぞ」

「……。」

「セックスはな、欲を満たすためにするんであって、身をすり減らすためにするんじゃない」

「……。」

「もっと楽な生き方ってのがあるんだよ、人間には。たしかに、楽に人生を愉しむ道ってのが」

「……。」

「わかるか？」

わかるか？　なんて返事を求めたくせに、濡れた奏の唇がひどく官能的で、勝也はほとんど反射的にその唇を奪っていた。

「淋しいときは、からだで埋め合わすのがいちばん合理的だよ。からっぽになっちまったんだろ？　身も心も」

――おれが埋めてやる。

か弱くうなずいた彼女に、理性が残っていたのかなんて、そのときの勝也に判断つくはずもなかった。

勝也自身、もうとっくに理性の限界だったのだ。

＊

勝也が帰ってどのくらい経っただろう。あたしはなにかに操られるようにふらふらと立ち上がり、玄関の外にでた。そしてどこに行くでもなく、自分の部屋の前の階段に座り込んだ。雨はずいぶん小降りになっている。座ったコンクリートのつめたさにすこし心を痛めながら、あたしは四年前のあの夜のことを思いだしていた。

あの梅雨の日。

あのひどい失恋の夜。

――おれさあ、お前がはじめてあの男を連れてきたときからさ、

気に入らなかったんだよな。

もっと、からだの力を抜け。耳元で吐息まじりに、勝也は言った。

市内のホテルへは、彼の車で行った。結婚すると同時に購入したという、例のタウンエースで。

指輪で大失敗をしたというのに、あたしはいったいなにを馬鹿なことを、と思ったけれど、勝也のいうとおり、楽な生き方があるのなら、そっちの道を選びたいとも思った。怠楽的で困る、ほんとうに。

もう死んでもいい、とまで自暴自棄でいたのに、勝也のあのことばで半分以上救われた気でいたのだ。

――セックスは欲を満たすためにするのであり、決して身をすり減らすためにするのではない。

勝也となら、うまく生きていける、そう思った。当時あの店には綺麗な大学生の女の子が数人いて、そんな彼女たちを差し置いて、勝也が自分に本気になった、とはまるっきり思えず、それのおかげで自惚れたりもしないで、彼に対して必要以上にあつくもならずにすんだのだった。

――ずっとこうしたかった。早くお前に触れたい、ってずっと思ってた。

あたしの右耳には、いまでも当時の勝也のささやきが冷めない熱を持ってのこっている。

身を切るような痛みとやわらかで横暴なまでにあつい体温。あの日、熱っぽく、どこか切羽詰まったようにささやいた勝也の声の色を、表情を、その温度を、あたしはきっとこの先何十年と忘れないのだろう、と一種の確信をもって思うのだった。

できるなら別れたくはなかった。別段、彼に悪いところなんてなかったのに。

でも、いずれにせよ、もはや過去の出来事だ。

これはもう、終わったことなのだ――

＊

十五分、などと言ったが、ほんとうに十五分きっかりに男女がふたりきりの部屋に戻ったりするほども、敦は気の利かない男ではなかったので、ちょうど一時間ほど、たっぷりと時間をつぶしてから彼はコンビニをでた。実際、一時間の暇というのは、コンビニで消化するにはいささか手に余るものだった。店員たちの不審そうな視線をときたま感じながらも、敦は終始素知らぬ顔をつらぬき、マガジンラックに陳列された雑誌を片っ端からぱらぱらとめくっていった。

アイスがふたつ――もちろん、自分と奏のぶんだ――入った白いビニール袋を下げコンビニを出ると、雨足はずいぶん弱まっていて、敦は傘もささずにだらだらと歩いた。

あのオッサン、もう帰りやがったかな。勝也は見た目こそ若者じ

みているが、高校生である敦からみれば十二分におっさんだった。敦と勝也の歳はちょうど十も離れている。
ずいぶんと余裕なさげだった、と敦は思った。いい兆候ではなかった。
以前奏は「ただのセフレ」だと笑ったが、やっぱり後ぐされありまくりじゃないか。あの男は、とおんなじ男である敦にはしっかりと見抜いていた。あの男は、奏に惚れている、と。

そんな風に思考が進んだところで、胃の上あたりになにか得もしがたいものがぼんやりと浮き上がっているのに、敦は気づいた。
まさか、と敦は思わず息を漏らしてひそかに笑った。
まさか俺が？　あの女に独占欲を抱いている？　まさか。
それはとても新鮮味のあるもので、恋愛なんぞにまったく興味も湧かない敦はちょっと愉快な気分になった。

まさか。

それの感触が新鮮、というよりかは、どこか懐かしいものである、ということに、敦は気づかないふりをした。

＊

「げ」

という石川くんの声が耳に入り、あたしはようやく彼が二階の踊

場までのぼってきたことに気がついた。あたしはどのくらい、こうして座っていたのだろう？　無機質でつめたい、コンクリートの階段に。

「なにやってんの、奏」あたしのもとまで駆けのぼってきた石川くんが、あきれ声で言った。

「あいつは？　帰ったの？」

あたしは黙ってうなずいた。まだちょっと、意識は浮遊状態にある。

「あのオッサン一体なんの用事だったんだよ？」

「……。」

「奏？」

あたしは立ち上がると石川くんの手をとった。すこしおどろいたみたいな、石川くんの顔。

「さき、部屋入ろう」

すこし上目づかいに、石川くんを見上げる。それから彼の左腕に自分の腕をからめ、寄りかかるようにしてからだをあずけた。

そして遠い気持ちで思った。

あたしは、こうしてどんどん嫌な女になっていくんだ。

――お前もいつかまた、誰かを愛しいと思えたらいいな。

勝也はそう言ったけれど、あたしがまた誰かを愛せるようになるなんて、他人の痛みもわからない最低な人間に落ちぶれるよりもずっとむずかしいことだ。

ドアが閉まると同時、あたしは石川くんの背中に抱きついた。Tシャツのしたの、彼の腰はちょっとびっくりするくらい引き締まっている。

「ちょ、奏？」

「しばらく」ひとりごとみたいにつぶやいた声が、どこか冬の町から帰ってきたときのように淋しげに震えていた。

「このままでいさせて」

こんな風な声をだして、あたしのことを抱きたくならない男なんていない、ってことを理解したうえでのことだ。

石川くんはあたしのほうに向き直ると、ちょっと困ったように笑って「しょうがない奴だな」と言った。あたしは彼の首に両手をまわした。

あつく激しいキスは、あたしをひどくあられもない気分にさせる。長いひとつの儀式みたいなそれを終わらせたあと、石川くんがあたしの耳元でささやいた。

「このあと、また先輩に呼ばれてるんだけど、いい？」

こんなタイミングでそんなことを言う彼と、こんなにみっともなく、汚くなってしまったあたしと、いったいどちらのほうがひどい人間だろう。

＊

タカタン、タカタン、タカタン、タカタン……
ドラムのリズムからはじまるお気楽な古典的ロックンロール。それがまた再び敦の頭のステレオから流れだしていた。
この一週間ほどで、性欲は制御ぎりぎりのところまで蓄積されていたが、長期戦、と決めていた敦はいままでどうにかその野獣のような自分自身をなんとか統制してきた。
ほんとうに、つくづく……と自分の左腕にからまった白くほそい腕を見下ろしながら敦は考えていた。

つくづく、魅惑的な女だよ。
ほかの男とふたりきりで喋っていたあとだというのに、ひどい女だな。

そういうところが、たまらなくいいのだが――今夜はまた眠れないな――、ドアが閉まるなりこちらを誘惑してきた、このどうしようもなく魅惑的な女にあついキスを落としながら、敦は行為後に奏のアパートを抜けるための言い訳を考えていた。

――アー・ユー・ゴナ・ビー・マイ・ガール。

→次話。

夢の暗示するもの、それから悪夢

4.

夢をみていた。

辺り一面ピンク一色。前後左右、四方八方、見上げても見下げても視界に入るすべてがピンク、ピンク、ピンク。それもパステルカラーのような淡い桃色ではなく、深夜のクラブなんかによく似合いそうなネオンピンク。目がちかちかする。単色だったはずの世界はいつのまにかその色彩を増やしていた。ネオンカラーのピンクとグリーン。

あたたかい気持ちでまどろんでいると、突然からだがずぶずぶと沈みはじめた。グリーンはあたしの遥か頭上にのぼり、ピンクが鼻先にまで迫ってきた。波音が聴こえる。

波？

どうやらここは海らしい。ネオングリーンの空に、浮かぶ雲は毒々しいパープルだ。

どうやらあたしは海のなかにいるらしい。泳がないと溺れてしまう。

サイケデリックで頭痛のしそうな配色をした心地よい夢のなか、あたしはざぶりざぶりとピンクの波を掻き分け、進んでいく。冬の温水プールみたいな水温。ぬるま湯のようだ。いちど入ったら、なかなか出たくなくなるほどの心地よさ。どこからともなく、いい匂

いがただよってくる。香水のような、お香のような、からだ中のちからが抜けてしまいそうにいい匂い。たのしげな音楽も聴こえてくるし――ビートルズだ。「ルーシーはダイヤを持って空の上、ルーシーはダイヤを持って空の上、ルーシーはダイヤを持って空の上……」――、とても気持ちがいい。片手をつきだし、もう一方の手で水を掻き、クロールする。海水のようなこの液体の正体はペンキなのか、一生懸命バタ足をするのにちっとも前に進まないのだった。

どこへ向かって泳いでいるのかはわからない。目標もなく、あたしは手足を動かしている。まったく前進できずにいるし、すでにへとへとだった。やめちゃえ、とだれかが耳元でささやいた。そうね、とあたしは同意する。いい匂いがするし、音楽はたのしいし、ふわふわするし、いますぐ泳ぐのをやめて、このままネオンカラーの海で溺れてしまうのもいいな、なんてことをあたしは思った。

心地がいい。

夢だな、とあたしは思った。あたし、夢をみている。この夢の暗示するものはなんだ？　わからない。いまは、何にも考えたくない。なんていい夢なのだろう。

唐突に、不穏な風が吹いた。グリーンの空が、東から迫ってきた黒い雲に覆い尽くされていく。そして墨汁のような雨が世界をすこしずつ闇色に侵していった。

ぞっとした。

まずい。

まずい、はやく陸にあがらなくては……と思った矢先、前方からは、真っ黒なビックウェーブが――！

目を開いてまず飛び込んできたのは、自分の部屋の白い天井だった。

やっぱり夢か。敦と抱き合ったあと、そのまま眠ってしまったらしかった。夢うつつの頭でしばらくぼんやりとしていたのだけれど、穏やかでない事態に気づき、冷水を浴びたみたいに飛び起きた。シングルのせまいベッドに、あたしともうひとりの人間が眠っている――敦だ。出かける予定があると言っていたはずだが、あたしと同様、彼も眠ってしまったのだろう。

「敦？」

敦はうなされていた。それもすこし異常なまでに。

彼はプールにでも落ちたみたいに全身びっしょりと汗をかいており、そのせいで額に前髪が張りついている。眉をひそめ、苦しげにうめいていた。ぞっとするほど、その声は低かった。

「敦？」触れたからだの熱に肌が粟立った。あたしはさらに声を大きくして彼のからだをゆすった。なかなか起きてくれず、不安は二次関数のグラフのように膨れあがった。パニックに陥りそうだ。病気なのだろうか、とか、救急車を呼ぶべきか、とか。

彼の名前を呼びつづけ、何十回めでようやく敦は目を開いた。あたしは心底ほっとしていた。

「うなされてた？」額の汗をぬぐいながら、なんでもなさそうに敦は言った。

「“うなされてた”なんてもんじゃなかったよ」あたしはちょっと愕然としてこたえた。敦が居着くようになってから、こんな風にうなされたことなんて初めてだった。

「心配したのよ」

「ごめん、たまにあるんだ」

「でもいままでにはなかったのに」

「周期的なもんなんだよ」

ごめんな、なんて言う割にはたいして悪びれた風もなく、敦はベッドを降りた。「シャワー借りるな」と言いつつ。
訊きたいことはたくさんあったけれど、ほんとうになんでもなさそうな彼の態度に、そのたくさんのことも訊くに訊けず、あたしはただ「どうぞ」と言うしかなかったのだった。
背を向け、洗面所に向かった敦がとても苦々しく顔を歪めていたことに、あたしは気づくよしもなかった。

＊

翌日の昼休み。授業のあるほとんどの日、ケンヂは敦のクラスで昼食を共にする（ふたりは別々のクラスだ）。敦の席のひとつ前の席に後ろ向きになって腰掛け、購買部のパンをかじりながらもずっとケンヂは敦の顔を見つめていた。敦の机に置かれたイチゴオレに手をのばすときでさえ、その視線は外されない。一時たりとも外されないのだ。監視されている気分になるような、じっとりと湿った嫌な視線だ、と敦は辟易して思った。はじめは無視してやろう、と思い、気づかないふりをしていたのだが、あんまりにもしつこいので――嫌味やら不満やら、いろいろなものが彼の目を介してこちらに訴えかけてくるのだ、嫌にもなる――、とうとう敦はあきらめ、ケンヂの目を見た。
「なんなんだよ、ずっと」
「なんでもねー」

なんでもねえわけないだろう、と内心吐きつつ、しかたなくコンビニ弁当を食べすすめる。その間も、あいかわらずケンヂの視線は敦に向かってなみなみと注がれていた。
ちらり、と悪友を見やると、あからさまにすっ、と逸らされる。ちらり、と見、すっ、と逸らされる。ちらり、それから、すっ。……それを数回繰り返したところで、とうとう敦は音を上げた。降参降参と、両手を上げるジェスチャーつきで。

「なんなんだよ。教えてくれよ。なんでも答えるからさ」

ケンヂはしてやったり、と言わんばかりに、「そのことばを待ってたんだよ」とほくそ笑んだ。しまった、と敦は思った。まんまと罠に引っかけられたわけだ。
「で」あきらめて敦は悪友に質問をうながす。「なにが訊きたいんだよ？」

「訊きたいことなんかたっくさんありすぎなんだよ、たっくさん」
「なんでも答えるって」
「じゃあまず」
「はい」
「最近家に帰らない理由は？」
「……。」
「大嘘つきなヤロウだな、さっそくかよ」

「ちゃんと答えるっつうの」悪友のせせこましさに苦笑いしつつ、敦は言った。
「女だよ。居候ってやつだよ」
「また女かよ」ケンヂに驚いた素振りはない。女たらしで悪名高い敦のことだ。いまさらなにがあったって驚くことはなかった。

「また、とか言うなよ」敦はちょっと傷ついて言った。
「女ん家、って独暮らしなのか？　彼女？」
「彼女じゃねーけど、独暮らしだな」
「あいかわらず最低な奴だな、オマエ」
「恐れいります」
「誉めてねーよ」

というか――パンをかじる動きを無意識に止め、ケンヂは思考をめぐらした。独暮らし。独暮らし？　女子高の寮か？　それはありえねーな……そしたら大学生？　大学生？　年上？

「年上っ！？」唐突に椅子から立ち上がり、ケンヂがすっとんきょうな声をあげた。
「うるせー」ほんとうにうるさいので敦は思わず指で耳栓をする。
「な、な、まじで？　まじで！？　うらやましーヤツだな！　どこで知り合ったんだよ？　紹介？　ナンパ？　逆ナン？　何歳年上だよ！？」
「まじでうるせーし」
「何歳？　大学生？」
「何歳だっけ、五歳上だから……」
「五――！？」
「二十二か。ただのフリーターだぜ」

興奮のあまり、ケンヂは失神寸前だ。軟体動物のようにぐにゃり、とちからなく着席する。

「うらやましーヤツだな……」
「まあな。いいヒトだよ。男癖は相当悪いけど」

「オマエが言うな」とケンヂは苦笑する。
「や、まじで。おんなじ種類の人間だよ、あいつは」
「ヤリマンってこと？」

敦は黙り込んだ。そのことばは、奏のいる場所からいちばん遠いところにあるものだと思った。
「なんていうか……」そんな俗物というか、そんな安っぽく不誠実なものなんかじゃない、もっと、なんていうか……
「まあでも、安心したよ」実践して胸をなで下ろしてケンヂは言った。「ユリちゃんにも言っとくよ。帰ってこねえ、つってすげー心配してたから」
「なんで？」訝しげに敦は訊き返した。ほんとうに不思議だった。
「あいつは百合に紹介したもらったんだぜ」知らないわけがないだろうに。

「え、そうなの？」
「バイト先の先輩なんだそうで」
「あの高っかい料亭の？　すっげえお上品なヒトなんじゃねーの？　そしたら？」
「まあ」先ほどのことばに比べれば遥かにそちらのことばのほうが正当だ、と敦は思う。
「いいなー」と心底悔しそうな声でケンヂはうらやましがった。「生真面目な感じでさ、じつは『夜はスゴいんです！』ってタイプの女ってたまんねーよ」
「激しく同意する」

実際奏はそういう女だ、と敦は思う。見かけこそおとなしく、『男なんて誰ひとり信用しない』と言わんばかりの目をしているし、安易に声すらかけづらい雰囲気があった（高嶺の花、とはよく言ったものだ）。そのくせ極度の淋しがり屋でもあるのを、敦は一緒に

住んでいるこの半月ほどの期間ですでに見抜いていた。男嫌いそうな、恋愛事に無関心な風体でいるくせに、すぐに男に抱かれようとする。敦が似ている、と感じたのはその点だった。もっとも、「女だったら誰彼構わず」といった敦のろくでなし精神とは正反対にみえるが。奏は男を選ぶ。面倒や後ぐされなく、気軽な関係でいられるような男を。

そういえば。と敦は思いいたる。

そういえば、昨日の晩、結局あのオッサンとなにがあったのだろう？

昨晩、何度となく敦はたずねてみたのだが、そのたびにうまくはぐらかされた気がする。

――別れた、とか。

そりゃあないか。と敦は内心首を振る。だってあのオッサン、奏から離れづらそうだったし。ほとんど、首ったけ、と言ってもよさそうなぐらいだった、と昨晩の男を思い浮かべ、敦は不愉快に思った。

「おい」と呼ぶ、ケンヂの声で現実に引き戻された。

「悪い。なにか言ったか？」

あきれたようにケンヂは目をまるくした。

「だから。大西さんが」

その名前に、ぞくり、と背筋が凍る思いをした。

「大西さんが？」いたって気楽さを装い、訊き返す。

「オマエここんとこずっと携帯、電源入れてないだろ」

「……壊れたんだ」
「修理だせよ」
「金がない」

ケンヂは黙った。顔が曇っている。

「オマエはさ」顔もあげないで悪友は続ける。
「オマエは、気に入られてるからそんな言い訳でも通用するかもしんねーけど。ほどほどにしとけよ」
「……。」
「よくしってるだろ、あのひとの恐ろしさは」

わかってる、と言ったつもりだったが声にでてはいなかったようだ。
わかってる、と敦は繰り返して思った。わかってるんだよ、でも、あの部屋にいると、安全なんじゃないかって思っちまうんだよ――外に出るのが、大西さんにびくびくしながら暮らす日々に戻るのが、怖くてしかたないんだよ……

「いつまでも逃げつづけられると思うな。つぎの集会には絶対来いよ」

わかってる、と思ったが、声にはだせなかった。
つぎの集会に出たら、きっとここ一週間以上も音信不通だった理由も訊かれるだろう。からだが震えるほどつめたい。肌だけでなく、その皮膚のしたの肉や骨、内臓までも。今日はやけにエアコンが効きすぎだな、とひんやりとする心で敦は思った。

召集がかかったのは、それから数日の経った、週明けのことだった。

奏とはここのところ毎日寝るようになっていた。仕事から戻るとまずシャワーを浴びるのが奏の習慣で、入浴後に部屋着すがたになる彼女にはすでに慣れていたのだが、それでも若い盛りの敦は毎晩もんとんとする。それにつけ、最近、彼女が纏う雰囲気がどこか変わったように感じるのだった。以前にはなかった親密さとやわらかさで、ことばにも態度にもしめさないのに、まるで雰囲気そのものがキスをせがんでいるような。それは、と敦は思考をめぐらす。

それは、俺をひとりの男として意識してくれるようになった、ということなのだろうか。

あるいは、敦が以前分析したように、ただ淋しいだけなのかもしれないが。どうして、だとか疑問点はあるし、理由はまったくわからないのだったけれども。

性交のあと、奏はすぐに眠ってしまう。敦にとって、それは感謝すべきことだった。つられて自分も眠ってさえしまわなければ。彼女の寝息がたしかなものであるのを確認し、敦は奏のアパートをあとにする。そんな風な生活リズムになって、早一週間。

その晩も一時間たっぷりと抱き合い、奏が眠ったのをベッドのふちに浅く腰掛け、見届けていた。とても親密でやさしい気持ちだった。

携帯が鳴り出したのは、さあ帰ろう、と腰をあげようとしたそのときだった。ケンヂに忠告を受けてから、携帯の電源をオフにするのをやめていたのだが、いまかいまか、と構えていたものだから、そのときだけはぎくり、としたというよりもむしろ、ほっとしたものだった。

「やっと繋がったな」電源越しでも、大西の悪意ある笑みを浮かべた顔が想像できた。

「すみません」まずは謝った。それが先決だ。
「なんでずっと電源入れてなかったんだよ？」ことばは柔らかいが、声は敦の首を容赦なく締めにかかる。
「携帯の、電池の調子が悪かったんです。修理にだしたかったんですけど、金なくて。でも母親に金借りて、やっと昨日携帯ショップに持って行きました。そしたらどうも悪いのは電池だけだ、って言われて、新しいやつもらって帰ってきたんです」
沈黙が流れた。
「そうか。それなら別にいいんだけどよ」
「すみませんでした」通用したぞケンヂ、と敦は悪友に内心呼びかける。
「とりあえず来いよ。いつものカラオケ屋な」
それだけ言うと、大西は敦の返事も訊かず電話を切った。

大あわてで原付を飛ばし、いつものカラオケショップの前に着くと、駐輪場にケンヂが立っていた。
「通用したぞ」
「それはよかった」ケンヂの声は暗い。
「どうした？」なんだか嫌な予感しかしないが、敦はたずねる。
「すっげえ今日、機嫌悪りいから、オマエ気をつけろよ」
声をひそめ、ケンヂが言い、それは敦の表情を凍りつかせるには十分すぎることばだった。

部屋もいつもの場所だった。大西所定の、２０１号室。

「久しぶりだな」所定席でふんぞり返る大西の隣に二席分空きがあり、敦はめまいがした。そちらに向かう途中、目線で「お前が隣行け」とケンヂに合図するよりもはやく、「敦、横座れ」と直々にご指名をいただいたものだからしかたなかった。

「会いたかったぜ」と大西は言った。敦から見た限り、不機嫌な様子は見当たらなかった。葉っぱをキメているのかもしれない（気のせいか、変な匂いがするのだ）。

「すみませんでした」先決、謝る。

「もういいって」

「でも悪かったです」ほんとうならば報告や連絡や、ケンヂを介してなんでもできたはずなのだ。

「別に気にしてねえよ、ただ心配しただけだよ。俺はお前が好きだからな」酒のグラスをごとり、と音を立ててテーブルに置き、大西は敦の耳元に囁いた。

「まさか俺から逃げれるとか、思ってねえよなあ？」

からだが強張る音がした。

「まさか」なんとか、それだけは口にする。

「だよなあ」大西の笑い声はまさに悪者のそれだ。

「そんなわけねーのはわかってたんだけどよ、でも心配でたまらなくなっちまってよ――前の日曜、お前ん家まで行ったわけだ。そしたら母ちゃんが出てきて、お前が、『もうずっと帰って来ない』って言うじゃん？　そんなわけない、って頭は思うのに、心配で心配でしかたなかったんだよなあ。お前はちゃんと、知ってるはずなの

によ。この俺から、逃げれるわけねーって、なあ？」

大西が敦の肩に腕をまわした。からだが金縛りに遭ったようだ。身動きひとつ取れない。

「どこにいんだよ？　いま？　半月も家空けっぱにして、あんまり母ちゃんに苦労かけちゃいけねーだろうがよ」

背中を、冷たい汗が流れ落ちた。気を確かにしようと握った拳が震えている。悟られてはいけない。いたって平然を装え。平然を。言い訳すればいい。ごまかしはてめえの得意なところだろうが、と敦は自分に言い聞かせる。が、だめだった。なにもことばが浮かんでこないのだ。喉も砂漠の砂のように干からびている。

「当てようか」、敦がなにも言わないのを見て業を煮やしたか、先に口を開いたのは大西だった。

「当たってたら否定すんなよ――まあ、できねーとは思うけど」

敦はまだ口をきけない。隣のケンヂが青ざめているのが、纏うオーラのようなものでわかった。

「女だろ」

敦の耳に、それはなにか別のことばのように響いた。たとえば死の宣告を意味するような――それがどのようなものであれ、敦には肯定する以外の道を選ぶ権利などないのだった。

「……そうです」

「いいよなあ、男前は。あいかわらず別の女んとこ転々としてんの

かよ？」

そうです、と言ったつもりだったが、実際は口をつぐんでしまっていた。最低だった。

「え？　おんなじ女んとこなのかよ。めずらしいな、ろくでなしのお前らしくもねえ」

「……。」

「柄にもなく、惚れ込んじゃった、ってか？」

「そんなんじゃないっすよ」それより、歌ってくださいよ。つとめて陽気に敦は顔を崩してみる。もうたくさんだ、と電目リモコンを目の隅で探しながら。いい加減話をどこか別方向に逸らさなくては――

「いや」ぴしゃり、と凄みのある、大西の一言。指先に痺れに似た震えがはしる。

「俺はもうちょっと、その女の話が訊きてえなあ」そして周囲に同意をうながすのだ。まさか反対する人間などひとりもいないことを、誰よりもよく知ったうえで。

いよいよ敦は戦意を失くしはじめていた。

「いいですよ、別に」

もうだめだ。白旗を振ってしまう。なんて俺は弱いのだろう。ただ話すだけ。当たり障りなく、核心にさえ触れずにいればなにも恐いことなどないのだ、ごまかしはお前の得意なところだろう、ともうひとりの敦が自分をなだめている。

ただ当たり障りなく話すだけ。そうすれば誰も傷つけなくてすむし、奏を裏切らずにすむ。

そこまで考えて、敦はとても不思議な気分になった。

奏を裏切らずに？
俺が彼女のことをすべて喋ってしまったからといって、それが結果的に彼女を裏切ることになったからといって、だから一体なんだというのだ？
一体誰が、なにを困るというのだ？

＊

敦が誰かと電話でなにやら話をしている声で目が覚めた。まだ半分まどろんだ頭で、あれ、携帯なおったんだ、と思った。
それから五分と経たず、「いますぐ行きますんで」、と締めくくると敦は電話を切り、ほんとうにすぐに部屋を出て行ってしまった。いま思えばどうしてあのとき、むくり、と起きて声をかけなかったのだろう、とちょっと後悔している。

祝日の月曜日。今朝は寝不足だ。おかげで、昨夜はその後、一睡もできなかったのだ（彼の口からなにか訊けたとしたら、もしや安心できたかも――後悔していると言ったのは、その点にあるのだった）。
今日は店長と勝也のどちらもが朝一で出勤することになっていたので、あたしにはめずらしいお昼出勤だった。とてもありがたくて、シフトが出た日には小躍りしたいくらいに喜んだあたしだったが、この一週間ですっかり、そんなささやかな嬉しい気持ちは完膚なきまでに粉砕されてしまっていた。

最近、敦が変だ。
ここのところ、あたしが眠ってしまったあとになって、アパートを出て行く。
敦のすがたがどこにも見当たらないはじめの朝はとても驚いたし、これはすなわちおわり、という意味なのだろうか、と思うと傷ついた。しかし、その夜仕事から戻ると、普段以上に普段の調子でくつろいでいる敦を見つけたときは、嬉しいやら腹立たしいやらですっかり脱力してしまった。結局翌朝も、その翌々朝も敦のすがたはこつ然と消えていたが、あたしが仕事から戻るころには何事もなかったかのようにのらりくらり、とベッドで村上春樹なんかを読んでいるのだった。やれやれ。
理由を問いただせば、「携帯が壊れたんだ」と敦は言った。ご丁寧に、充電器に差して（あたしと敦はおなじメーカーの携帯を使用していた）、「充電しても電源が入らない」ところも披露し、「連絡が取れないと、さすがのうちの母親も心配してさ」と「毎晩実家に戻っている」理由を説明してくれた。

――携帯ショップに持っていかないの？
――金がないんだ。
――それぐらい貸してあげるよ。払ってあげようか。
――だめ。それじゃ俺ヒモになっちゃう。かっこ悪りい。

「母親に借りるから」の一点張りで、あたしはそれ以上なにも言えなかった。

出勤すると、すでに店は大忙しだった。もう夏休みに入ったのか（あたしが高校生だった時分はいつからが夏休みだったろう？）、連日予約がたくさんだった。お盆のようなおおきな団体でのご予約

はなく、四〜十名、と細々とした集まりがたくさん入る（これがいちばんやっかいだし大変だ）。なにかの婦人会や老人会のような集まりもあるが、この時期はファミリーだ。駅の東側の高級住宅地に住む、富裕層ファミリーの会食。

「中村さん！」

裏口から厨房に入るなり、フロアから勝也がどなった。

「はい！」あわてて手洗いを済ませ、フロアまで駆ける。

「二階が飲み物オーダーできりきり舞いなんだ。悪りいけどこっちのサーバーでフォローして、持って上がってやってくんないかな。これ伝票」

「かしこまりました」頭を下げ伝票を受け取り、勝也――伊吹副店長の脇をすり抜けようとしたとき、左手をつかまれた。思わず顔をあげ、副店長の顔を見てしまう。

「奏、あのさ、」

あの日からほとんど毎日、副店長と仕事をしていたはずなのに、ずいぶん久しぶりに彼の肉声を聞いた気がした。目が揺れている。およそ、勝也らしくもなかった。

「いま仕事中ですので」

「そうだよな……悪かった。ドリンク頼むわ。今日は一階にいてくれな」

「かしこまりました」

彼に背を向け、ドリンクスペースに入ってから振り向く。すでに勝也のすがたは見えなかった。彼、痩せたよな、とあたしはすこし寂しくなった。

通常のピーク時が過ぎても、まだまだ店内は繁忙で、ようやく一段落が着いたのはそれからずいぶん経った午後三時だった。店長も副店長も休憩中で、一階フロアの店員はあたしひとり。この時間なら、あたしだけで十二分にまわせる。

お客様は三組。ひと組は二階の団体予約なので、一階にはカウンター席に座る上品な雰囲気の老夫婦と、フロアのいちばん奥にある個室に老人会らしき集まりの六名様がいるだけだった。

「いらっしゃいませ」

入り口のドアの鈴が鳴り、あたしは元気よく挨拶をした。そして普段のように気持ちのよい接客をするべくにこやか振り返って、そこに場違いなものを見たのだった。

頭を色とりどりに染め上げた、ちゃらちゃらとした同年代の男が三人。「店員さん超可愛い――タイプ、タイプ！　ガチで！」と騒がしく、入口付近のカウンター席に座っていた老夫婦が、顔を見合わせ眉をひそめている。

「……こちらへどうぞ」

いくら若くて場違いだからといって、「どうかお引き取りください」などと塩をまくわけにはいかない。内心「早く帰ってくれ」と毒づきながらも、カウンター席の老夫婦、個室の老人たちから、出来るだけ離れたテーブル席へ案内した。

しばらくして、「すいません」と場違い三人衆に声をかけられた。「ご注文がお決まりでしょうか」ボールペンの芯を出し、伝票を用

意したところで顔をあげると、いちばんからだのごつい男と目があった。ニヤニヤしていて粘り気のある不快な――そしてひどく悪意に満ちた――その目に、肌がぞわりとする。

「中村……奏ちゃんだよね」

驚きのあまり、あまりにも自然な流れに思わずうなずいてしまった。それから徐々に、言い表しがたい、じめじめとした感じがつま先からはい上がって来る。

あれ？　どうしてだ？

どうして、と感じたことについての理由はすぐにわかった。あたしは理解し、それからしばらく口も訊けないくらいのおぞましさがからだ中を這い回ったのだった。

ひとつは、あたしの知り合いに、このように柄も態度も悪い知り合いなんてひとりもいなかったこと。

ひとつは、従業員の名札には書いていないのだ――下の名前は。

――どうして。

指先が震えているのを必死に隠し、あたしはだまっていた。答えないことに決め込んで。だれかの知り合いではあるかもしれないが、上品な雰囲気と伝統的な味を売り物にしているこの店に、このように無粋なかたちで来店されたのであれば、真摯に対応できるはずもないのだ。

「奏ちゃんでしょ？　いい名前だよね。顔とか雰囲気に超合ってる」

「……ご注文が」

にこり、ともしないあたしを不快に思ったか、男たちはぴたり、とだまった。そのおぞましいにやにやも引っ込めて。あたしは怯ま

なかった。

「ご注文が、お決まりでないのでしたら、またお決まりの頃にお呼びくださいませ」

一息で言いきった。まったく冗談じゃなかった。激しく腹を立てていた。

浅く礼をし踵を返したとき、男の手が、あたしの腕をとても強いちからでぐい、とつかんだ。一瞬で全身に鳥肌が立ったかと思った。今日は腕をつかまれる日か？　と冗談まじりに思ったが、正直それどころではなかった。

「は」声がまぬけなほどに裏返ってしまう。「はなしてくださいっ！」

「おめえよ、なにか勘違いしてんじゃねえの？」地面から湧き起こるうなりのように低くおそろしい声。腕をつかんでいるのは、三人のなかでもひとりだけばかごつい、リーダー格らしい男だった。先ほどのあたしの態度が気に入らなかったのか、相当ご立腹のようだった。つかむ手のちからに加減なんてものはなく、下手をすればこのままへし折られてしまいそうだ――と自分で想像して、あたしはたちまち真っ青になった。

「俺たち、客だよ？　従業員がそんなにえらそーでいいわけ？　奏ちゃん？」

連れの男が「飯よりお姉さんが食いたい」などと下品なことを言い、もうひとりが「いいっすね！」と手を叩いて喜び、下品な笑い声を立てた。限界だと思った。

「警察呼びますよっ！　だいたいっ、あなたたち一体だれなんですかっ！」

「あれ？　俺たちのこと聞いてねえの？　君の友人の先輩だよ。きちんと紹介されて、俺たちはいま、ここにいるわけ」

あたしは半ばパニック状態だった。熱にうなされたような声しかでない。

「だからだれ……」

「敦だよ」

敦だよ。

「え……？」

「しってるっしょ？　君のセフレ君だもんね、石川、敦だよ」

「……。」

抵抗するのも忘れ、あたしは茫然とした。「敦の？」

敦の、なに？

「なんかさー、君のこと持て余しちゃったみたいでさ、で、それなら俺たちがあいつに変わって君を可愛がってあげましょう、と思ってやってきたわけ」

「持て余したって……？」およそ信じられない。というか、こんな下劣なやつらの口車になんか乗っちゃいけない、わかっているのに口が勝手にするすると動いてしまう。

「飽きたっつーことでしょ」

「おい大西、ちょっとロコツすぎ」

連れの男たちがぎゃはは、と下品に笑い、大西と呼ばれたあたしの腕をつかむ男は卑劣な笑みを浮かべてにやにやしている。

「だからさ、ね、奏ちゃん。君は俺たちに感謝しなくちゃいけねーの。わかった？」
「でも想像以上に美人でびっくりしたわ。俺、一発ヤらせてくれるんなら、金払ってもいいよ」
意識が朦朧とする。いますぐにでも悲鳴をあげ、その場にしゃがみ込んでしまいたかった。
「金？　いらねーだろ、そんなもん。相当好きらしいじゃん、アレが。現に敦以外にも何人か男いるらしーし」
「えっ？　こんな清楚な顔してっすか？」
「でしょ？　インランちゃん？　いままで何人としたの？」
「ここの社員とも不倫の関係にあると聞きましたが、ほんとうでしょうかっ」
「わはーっ、超絶っすね！」

うそだ、とあたしは思った。
いますぐ泣きだしたかった。もうすでに半分泣いているのかもしれない。
信じられなかった。不倫だとかまったく倫理的ではない関係を大声で、よりにもよってこの店内で騒ぎ立てられたことを気にしているのではなかった。正直ちっともそんなことにかまっていられる余裕などなかった。
信じられなかった。勝也との関係まで知っているなんて。そんなのって、まるで……
あたしは首を振った。うそだ。こんなのが、現実に起こるはずがないのだ。品のない冗談だ。たちの悪い夢だ。絶対うそだ、こんなのが……

「手始めに、仕事終わったらみんなでヤろっか。何時あがり？　どインラン奏ちゃんは？」
「４Ｐはイカツイなー」

うそだ。
うそだ。
うそだ。
うそだ――。

「お客様」

唐突に左手首の痛みが消え、かわりにひんやりとした空気がやさしくおなじ部分をつつんだ。
大西が手を離したのだ。その左手を、だれかがねじり上げている――だれか。

山下くんだ。

「なんだてめえ」連れの男たちが乱暴な音を立てながら立ち上がる。やばい、とあたしはぼんやり思った。彼がきてくれたことに安心してしまったからか、いつのまにか床に座り込んでいた。
大西はまさに怒髪天、と言った感じだった。いますぐにでも山下くんに殴りかかりそうな勢いで彼を睨んでいる。まるで相手を睨み殺そうとしているようでもあった。鬼の形相、ということばがぴったりだった。
やばいよ、山下くん。

必死で呼びかけているつもりなのに、ちっともことばにならない。やばい、やばい、やばい、……ことばはあたしの口から、ただの吐息としてこぼれていく。

ぼこぼこにされちゃうよ。殺されちゃうよ。

「お引き取りください、営業妨害とみなし、先ほど通報させていただきました」

「はあ？　なんだと？　営業妨害？」

「オタクの店の従業員は全員こんなのばっかりなのか？　客に対しての礼儀がなってねーんだよ。店長どこだよ、いますぐ呼んでこい！」

大西の向かいに座っていた男が山下くんに一歩歩み寄ったかと思うとぐい、と彼の胸ぐらをつかんだ。あたしはひ、と悲鳴にならない悲鳴をあげた。

山下くんはまったく動じない。毅然として、「店長はまもなく来ます。しかしそれより早く警察が到着するかもしれませんね」と言った。

「それとも、警察が来るのを待って、店長とあなたがたと、心ゆくまで話し合いでもしますか？」

「どうかされましたか！」騒ぎに気づいたらしい店長が、あわてて二階から降りてきた。

大西が忌々しげに歯ぎしりをし、「行くぞ！」と連れのふたりをどなりつけた。山下くんの胸ぐらをつかんでいた男が不服そうにその手を離したとたん、大西は思い切りテーブルを蹴り上げた。がしゃあん、とひどく大きな音を立ててテーブルが飛び、上に乗っていたグラスやらカスターやらが地面に無惨なすがたになって散らばった。店長が息をのむのがわかった。

「おい、てめえら！」

入り口まで出たところで、最後に大西がこちらに向かって叫んだ。

「てめえら、ただ済むと思うなよ……殺すより酷い目に遭わしてやるからな」

そして思い切りドアを蹴り、店を出て行った。

おそるおそる山下くんを見上げると、彼は、入り口に向かって舌を出していた。そして見上げていたあたしと目が合い、いたずらが見つかったこどものような顔をして笑った。

「大丈夫ですか？」

ありがとう、とあたしは言った。あいかわらず、熱にうなされたようなひどい声だ。それでもなんとか、大丈夫、とも付け足す。

安心したように山下くんは笑いあたしの頭を撫でた。「一体これどういうことなの」という、怒りをあらわにした店長の声がした。山下くんに背中を押され、思わず二、三歩歩いてしまう。振り返ると、山下くんは目で「はやく」と言っていた。はやく行け、ということか。あたしはちからなく笑った。

「あとの始末なら俺に任して、奏さんは事務所に戻っててください」

「ねえ山下君、これ一体どういうこと？」

うしろで、なお怒りをあらわにした店長の声が聞こえる。

情けない。年下の高校生にかばってもらうなんて――けれど、それにかまうほどの余裕なんて、いまはこれっぽっちもなく、山下くんに言われるがまま、ふらふらと、あたしはフロアを出た。

事務所には、二、三人ほどの従業員しかいなかった。

「中村さん、大丈夫でした？」厨房の男の子が声をかけてくれる。さっきまで厨房で働いていた子だ。彼が店長を呼んでくれたのかもしれなかった。

平気平気、といつもどおりの笑顔で手をふったつもりがまったくうまく行かず、ことばにすると「ぜんぜん大丈夫じゃありません」と言った風なジェスチャーになってしまった。

「中村」副店長が心配そうにあたしの腕をとった。

「着替えろ。送るから」

あたしは首をふった。

「休憩さえいただければ、ぜんぜん、大丈夫です」

「おまえの顔全然大丈夫に見えねーよ、つべこべ言うな」

更衣室に向かって、今度は副店長に背中を押される。

よろめきつつ振り返ったが、反論する気力もなく、しかたなくお礼を言った。

「中村さん！」

着替えが済み、店長の了承も得て、副店長と駐車場にでたところで、裏口から山下くんが駆けてきた。

「さっきはありがとう」先ほどよりもいくぶんはっきりとした声で

お礼を言う。
「いえいえ」と山下くんは胸を張った。冗談のつもりだろう、あたしは微笑んだ。
「大丈夫だった？」
「お店ですか？　俺と店長でフロアのお客さんたちに謝って、飲み物一杯ずつごちそうしたんです。そしたらみんな許してくれましたよ。俺、誉められちゃいました、お客さんたちに」
「山下くんは大丈夫？」
「大丈夫ですよ、輩には慣れてるんです、こう見えて」
「全然見えない、意外ね」
「よく言われます」

「中村、もう行こう。山下は中戻れ。ありがとうな」と副店長が言った。
丁寧なことばだったが、山下くんは険しい目をして副店長を一瞥し、返事もせず帰っていった。それから思い出したように振り返り、「お気をつけて、中村さん！」と言った。
手をふるあたしのうしろで、副店長が舌打ちし、「かわいくねーガキ」と言った。

「ひさしぶりだな、こうやって助手席におまえが座んの」、ノアに乗り込むなり、副店長は言った。
どう相づち打っていいかわからず、あたしは「すみません」と謝った。
「すみません、わざわざ副店長に送ってもらわなくてもよかったのに」

「おれが送りたかったの」
「……。」
「てかさ。やめてくんないかな、副店長、ってのと、敬語」
「そんなこと言われても」
「かなりヘコむ、それ」

あたしはだまった。

「まえまでみたいにさ、カツ、って呼んでよ。おれたちが顔合わせれんのもあとちょっとなんだからさ」
「……できない」
「なんで？」

あたしはだまった。

「……もういいよ、おれが悪かった。ごめん、困らせること言って」
「……。」
「あーあ、攻め方間違えたよなあ、まったく」

攻め方？　あたしは勝也のほうを向いた。ばっちり目が合い、「やっとおれの目見てくれたな」とほほえんだ。
「なんだかんだ言って結局、おまえはおれについてきてくれる、って思い込んじゃってたわけだよ。最後のとこでばかみてえに焦っちまったのもミスったな」
「なに、焦るって」
「ん、べつに」

もの思わしげにお腹のあたりをさすり、勝也はそれきり黙ってしまった。あたしは助手席の座り心地のいい革張りのシートに深く身をしずめる。甘い、いい匂い。勝也が仕事の休日にだけつける、香

水の匂いだ。

「……いま」

「ん？」

「どこ住んでるの」

「どこって、まえ住んでたとこだよ。変わらない」

「え？」

「え？」

あたしは再び、右を見た。勝也は前を向いていた。

「離婚してないの？」

「ばか、したっつの」

「でも奥さんとこにいるの？」

「おれと違ってね、寛大だから、あのひとは。離婚までしたのに愛人に棄てられて、家まで無くして、かわいそーすぎて見てらんないわ、って。今月末までは居候許可してくれた」

「ふうん」

“ふうん”！？　冷てえやつだな」

勝也があまりにも愉快そうに笑ったので、あたしまでつられてしまった。

「やっと笑顔みれた」

再び目が合う。勝也の笑顔はかなしそうだった。

「おまえに棄てられて、別れた奥さんに居候させてもらってさ、みじめなおれだけど、いちから頑張ってんだよ。だからお願いするよ。ひとつだけでいいから、みじめなおれの願い訊いてやってくれよ」

「……。」
「笑ってろ。つん、としたおまえもかわいーけどよ。やっぱ笑ったほうが女は百倍魅力的なんだから」
あたしはうなずいた。ぎこちなく、ほほえみのようなものを浮かべてみせる。満足そうに、勝也はあたしの髪に触れた。
「居候といえば、あのガキまだいんの？」
「……いるよ」
「いんのかよ。今日祝日だから帰ったらいるわけ？　遊びに行けよなー」
「……。」
「なに、どうした？」
「……。」こらえきれずに、あたしは両腕を抱くようにして、前屈みになった。
「どうしたんだよ？」勝也があたしの背中を撫でる。彼の不安が彼の手のあたたかさからひしひしと伝わってくる。
「なんかあった？　あのガキと」
「ない」
なんにもない。
なんにもなかったはず、とあたしは思うのに。
どうして、急に……
「こわかったろうな、さっきのな」やさしい声でなおも勝也はあたしの背中を撫でる。
「つらかったら二、三日休んでいいぞ」

あたしはからだを起こす。勝也の腕があたしの肩を抱くように添えられていた。車はいつのまにか道路の脇に停められている。「平気。休まない」

「無理すんなよ」

「しないよ」

「かなり柄の悪いやつだったらしいじゃん、また来るかもしんねーよ。そういう奴らってしつけえからな」

「……。」

「まあ、今月いっぱいはおれが送り迎えしてやるから」

あたしは断ろうと彼の顔を見たけれど、それをことばにするよりもはやく、「嫌とは言わせない」と勝也が言った。

「嫌とは言わせないから」

「でも悪いよ」

「休まないんなら、そんくらいさせろ。おれとしても店長としても、そっちのほうが安心だからな。もしおれが嫌だ、ってんなら、店長にでも料理長にでも頼めばいい」

「……そんなこと言ってるんじゃない、けど」

「じゃ、おれでもいいな」

それ以上口ごたえする元気もなく、あたしはうなずいた。

勝也が再び車を発信させる。あたしのアパートはもうすぐそこだった。

「ところで、」訊きにくそうに勝也が口をひらいた。

「あいつら、奏の知り合いか？」

あたしは首をふった。ほんとうにやつらが敦の先輩だったとしても、あたしとはまったく面識がなかったのだから、知り合いとは呼

べない。

「……でもリーダーっぽいでかい男のこと、他のやつらが大西、って呼んでた」

「大西、な。わかった。一応たいした罪にはならねーけど、うちの店としても被害届ださねーわけにはいかないからな」

「……ごめんなさい」

「どうしておまえが謝んだよ。厨房のバイトもさっき、中村さんの接客態度には非がなかったって言ってたぞ。……まあ『非があった』って言われても信じねーけどな、おれは」

ま、はやく元気だせよ。そんな風に締めくくると同時、アパートまえの住宅地に車は停まった。

蒸し返る暑さに、インフルエンザにでもかかったかのような足取りで、朦朧と階段をのぼり部屋に戻ると、敦は彼の荷物ごと、すがたを消していたのだった。部屋のなかは大きな窓から流れ込んできた西日でいっぱいになっていて、まるで燃えているかのようだった。

カツ、とあたしはぼやける視界のなか絶望的に思った。目の前が真っ赤に染まっていく。

元気なんか、だせるわけ、ないよ――。

＊

――奥さんがいるんでしょう？

あの晩の、と店まで戻る道のり、勝也は回想をしていた。
あの晩の山下は、いつもの大人しい好青年然とした彼らしくもなく激昂していた。

――そんな風な付き合いかたして、中村さんが傷つかないとでも思ってるんですか？

勝也が常連客と大きく揉めた日の夜だった。発注のために事務所に戻ると、十時半を過ぎていたというのに、とっくに帰ったはずの山下がいた。
奏を待っているのだ、とあの真っ黒いビー玉のように大つぶな瞳で山下は勝也をまっすぐに見つめ、言った。山下は十八未満の高校生だ。社員として早く帰そうとするのは当然のことだった。ただ、勝也の場合、かねてから彼のことが気に入らなかったので（大人げないこと上等だ、と勝也は思う）、ついつい必要以上に厳しい物言いになってしまうのだ。

――待つ必要なんかねえよ。未成年は帰った、帰った。

しっしっ、と野良犬や野良猫にでもやるような仕草でもって。
山下が奏に好意を寄せていることは周知の事実であったが、同時に中学校の同級生である、原田百合子とも噂があった。
他の女のケツ追いかけてっと、原田さんに言いつけるぞ。と勝也が嫌味ったらしく（自分のことは高い高い棚の最上部に上げて）言うと、山下はビー玉みたいにまるい目をさらにまるくし、きょとん、

とした。

――おまえ、原田さんと付き合ってるんでしょ。

――つ、付き合ってません！　俺が好きなのは、中村さんだけです。

顔を真っ赤にして否定し、そしてすぐに真顔になると大まじめにそんな恥ずかしいことを言ってのけた。さらに、このあと奏に告白をする、とも。

若さが持つ独特の、その突飛さに勝也は面食らってものだったが、すぐに嗜虐心がじわりじわりと湧き上がってきた。子供と大人の中間にいる、まだあどけなささえのこる少年を、汚い大人の権力や詭弁でねじ伏せるのは気がすすまなかったが、奏のこととなると話は別だ、と勝也は自分に言い訳した。

――おまえには、あの女は懐柔できねえな。荷が重すぎる。

バイトたちの間で、勝也と奏の関係がもうずっと前から噂されているのはよく知っていた。それを知っていたうえで真相を――それも事の始終をことこまやかに――話したのは勝也自らの意志だった。言いふらされたら一大事ではあったが、そのときの勝也はまるで頓着しなかった。

不倫関係はもう四年になる、と。

彼女を、ただ欲望にだけ忠実になる、本能的な女に育てあげたのはこのおれだ、と。

――だからおまえには無理だ。恋も愛も、あいつにとって、まったくくだらない、“ままごとあそび”みたいなもんだからな。おれだってたまに、一緒にいると風俗嬢と同伴しているような気になったりするよ。

――そりゃあ、すげえぞ、ベッドの上ではよ。最高の女だ。
――ただ誤算だったのは、あいつにはその素質があった、ってことだな。
――小悪魔、ぐらいにしといたつもりが、悪魔にしちまったみたいだ。

勝也の話を訊き終わると、山下は茫然としていた。
しばらく無言の時間が流れたあと、消え入りそうにちいさな声で、俺は信じません、と山下は言った。

――中村さんはそんなひとじゃないですよ。俺にはわかります。

甘めえよ、おまえ。と勝也は呆れた。

――甘いのは顔だけかと思ったら、考え方まで甘いのな。

同世代からマダム世代までを虜にする、甘いベビー・フェイス。それもまた勝也の気に入らないところだった。つねにちやほやされて、もてて、女なんかよりどりみどりのくせに、なんでまた奏に色目を使ったりするかな。山下の顔を見ながらそんなことを考えていると無性に苛立ち、無性にこの目の前の好青年を傷つけたくなった。相手はすでに戦意喪失の状態にあるというのに。大人げもなにもあったものではなかった。

――おまえはあいつのこと、なんにも知らないのな。

おれは、と勝也は思った。おまえが知らない奏をすごくたくさん知ってるんだぜ。
まだ中学校を出たばかりのたよりない奏を。
十八ではじめての彼氏ができ、とたんに香り立つほどの色気を纏

うようになった奏を。
失恋をして、この世の終わりが来たみたいにひたすら涙を流しつづけた奏を。
いとしそうにおれの名前を呼ぶ奏を。
ベッドのなかでの、どうしようもないほどに可愛い奏を。
おれがこの六年間ものあいだ見てきたたくさんの奏を、おまえはなにひとつ知らないくせに、知った顔をするな。

――結局、おまえは奏のこと、なんにも知らねえし、なんにもわかっちゃいないんだよ。

山下はひどく傷ついていた。
あのときの、悔しそうな顔――あれは一生もんだな、と勝也はうんざりと思い返す。なにかの折、おれはこの先ずっと、奴のあの表情を思い出してしまうのだろう、と――。わめき散らしたいのを必死に抑えたような、怒りに満ちた、ともすればいまにも泣きだしそうな、そんな表情だった。こちらの胸までちりちりさせるような。
さすがに大人げなかったな、もうちょっと手加減してやるべきだったか、と思ったが、いずれにしても、勝也には都合のいいことでしかなかった。相手が大人であれ子供であれ、恋敵はひとりのこらず叩きのめしてやろう、と思った。何びとたりとも生かしておけない、と。
このとき、すでに勝也は離婚を決めていた。

――わかったなら、もう帰れ。おまえが補導されてバッシング受けるのはこっちなんだよ。

ことばとは裏腹にやさしく肩を叩いてやった。これでもう二度と、奏には近づけまい、と内心高笑いしながら。
しかし、山下はちっとも打ちのめされていないようだった。あの

大きな瞳できつく勝也を睨みつけると、はっきりとした声で宣言したのだ。泣きだしそうな、悔しそうな表情のまま。

――俺諦めるつもりなんかありません。彼女がどんな人間で、どんな欠点を抱えているのであれ、俺はきっと全部を好きになってしまうから。

結局、と勝也は思った。

店には、あと五分と経たずに着くだろう。着いたら急いで今晩入っている予約の最終準備をしなくてはならない。午後五時になろうとしていた。

結局、おれは、攻め方を間違ったのだ。まったくのところ。

奏は、勝也を選ばなかった。

→次話.

5.

はじめてだ、と敦は思った。

本屋で漫画や雑誌以外を買うなんて、敦にははじめての経験だった。高校受験を含めた中学時代はもとより、高校に入ってからもとくに学校以外で勉強などしたことのない敦は、いままで参考書さえ買ったことがなかった。

今日のことに備えて訊いたつもりはなかったが、奏の出勤時間はあらかじめ知っていた。彼女が家を出たはずの時間に敦は自宅を出て、アパートを目指した。いかにも丈夫そうな大きめのバックパックを選んで背負ってきたものの、持ち帰るべき荷物はとくになかった。ほんのすこしの着替え、歯ブラシ一本。それだけだった。歯ブラシに関しては置いたままにしようか、とも思ったが、これからはもう奏のアパートに泊まることもなくなるだろう、と考え、寝巻きとともにバックパックに詰めた。

アパートを出て自宅に戻る道の途中に、大きな全国チェーンの本屋がある。そこに差し掛かったとき、寄ろう、と考えるより早く、敦はほとんど無意識のうちに原付きのウインカーを左に点滅させていた。

自分が卑劣な人間だ、と分かっていた。分かっていて、そのうえ

なにも告げず、ほとんど逃げるようにして彼女のアパートを出た。
いずれ大西は奏のアパートを見つけるだろう。そのときのことを考えれば、むしろ敦はずっと彼女の部屋にいるべきだっただろうし、それが正しいのだ、ということももちろん分かっていた。それでも敦は逃げ出した。

重い紙袋を小脇に抱え、店を出る。本数冊くらいバックパックに入るのではないか、と安易に考えていた自分を責めたくなった。なんとか無理やり詰めることに成功したはいいが、すこし買い込みすぎた。本の重さで肩紐が千切れそうだ。帰って荷物を置いてから来るべきだった、と敦はちょっと後悔をした。

自宅の部屋に着くと、正午をすこし過ぎただけの時間だった。朝からなにも口にしていなかったが、腹はすいていない。エアコンを点けるとベッドに寝そべり、紙袋を雑に破って先ほど購入したばかりの文庫本を一冊開いた。
しかし、それから十分と経たず、脳になにかがくい込んでいくような感覚があった。睡眠は十分に摂っているはずで、睡魔がこんな風に暴力的に襲ってくるのはすこし異常な気がした。まぶたはたちまち鉛の重さになる。何者かが敦の足元に物音も立てず近寄り、乱暴に両足首を掴んだ。敦の意識はそのままずるり、とそれの手によって体外へと引きずり出されていった。
あいつが来たんだな、と敦は理解し、同時に世界は一旦遮断される。

＊＊

物理準備室の椅子に座ったままのそのひとめがけて、あたしは力いっぱい指輪を投げた。

シルバーのちいさなそれが、ひゅん、と風を切って間もなく、かちん、という硬い音を立てる。蒼井先生にぶつけるつもりだった指輪は、しかし先生にぶつかることはなく、彼の机のさらに向こうの窓に当たり、床に落ちてしまった。おそらくガラスには傷がついただろう、傷つけた正体のそれは、うっすらと埃の積もった床のうえで、鈍い光を放ちながらまだくるくると踊っている。まるでまぬけみたいに。外は、惨めったらしい、ぼとぼとの雨が降っていた。窓ガラスは鏡のようだ。惨めったらしく顔をぐしゃぐしゃにした女子高生が、ばかみたいにつっ立っているのが映っている。まるでまぬけみたいに。

泣きわめいて責め立てるあたしに、蒼井先生は、顔をあげることもなく、いつものように椅子に腰掛け、肘をつき、両手を組み合わしている。祈りを捧げるような恰好で。あたしはいらだった。あたしが今日この部屋にきてから、彼はまだいちどもあたしの目を見ていないのだ。信じられなかった。なにより、そのことがいちばんかなしかったし、傷ついた。

「説明して」

嗚咽にまみれた声は、ひどくか細くて、ほとんど独り言にしか聞こえなかった。

「ねえ、なにか言ってよ、言い訳ぐらいしたらどうなの」

蒼井先生は顔もあげない。黙って、机をみつめたまま。

蒼井先生は大人だから、癇癪を起こした子供とは会話にならない、ということをしっている。だからただ、嵐が過ぎるのを待っているのだ。

あたしは下唇を思い切り噛み締め、泣くのを止めようとした。悔しいし、かなしいし、憤っていた。まだまだ泣き足りなかったし、責め足りなかった。それでも大人と会話をするにはこうするほかないのだ。こんなときでさえ、あたしは蒼井先生に呆れられたくない、なんてことを考えていた。

今朝のＨＲで、先生と連れ立って学年主任が教室にやってきたかと思うと、このたび蒼井先生が学生時代からの恋人と結婚することになりました。非常におめでたい、とのたまった。いやに耳につくやりかたで拍手をし、そうして生徒たちにも祝福の拍手をするよう、うながした。そのときはただ状況が飲み込めず茫然としていたあたしであったが、あとからそれを思い出せば、もう、腹立たしいったらないのだった。

あらんかぎりの恨みをこめ、蒼井先生を睨んだ。この恨みによって睨み殺されてくれればいいのに、なんて真剣に思った。

言ってくれたのに。

いちばん大事だって。

六月も半ばになろうとしていた。梅雨のまっただなか、今日はすこし肌寒い。式を挙げるのは今月末だという。おどろくほどの、呆れ果ててもはや笑うしかないほどの無神経さだ。

涙はすでに止まっていた。しゃくりあげながらも、あたしはどん

どん冷静になっていく。どんどん、どんどん、からだが、心がじわりじわりと凍っていくようだった。
否定してほしかったのではない。結婚するのは事実だ、だけど、僕はきみのことだって“ほんとうに大事なんだよ”。そう言ってほしかった。いつものように、そのあつい腕で抱きすくめてほしかった。そうしたら、無条件に彼を許してもいいとさえ思っていた。ばかだ。

大人はずるい。
ずるい。
きたない。
むごたらしい。
平気で嘘をつく。
平気でひとを騙す。
平気でひとを傷つける。

子供だったあたしは、この日、絶望、の意味を知った。
失望、の意味を知った。

――僕、中村さんはもっと大人だと思ってた。。
――残念だ。

＊

息苦しいほどの蒸し暑さに、敦は目を覚ました。
自宅の天井。辺り一面真っ暗闇のなか、それの白さは不気味なくらいに明るい。いつもの、見慣れた天井だ。しかしそれだけでは夢なのかうつつなのかの判別はつかず、ゆっくり、こわごわと上体を起こす。それからひとつ息をついた。よかった、現実だ、と。
ひどい悪夢だった。からだにはいましがたプールから上がったばかりの時のような脱力感があり、実際汗でずぶ濡れだった。エアコンの運転中のライトが消えている。窓はぴしりと締め切られているし、どうりで暑いはずだった。目が覚めても、耳の奥ではまだ雨音がする。
再び“夢”を見つづけるようになって、もう二週間近くになる。毎年、梅雨がはじまると見ていた夢。今年はないのだと勝手に思い込んでいた。しかしそれは思い違いだった。夢は、今年もちゃんと敦のもとにやってきた。時期がすこしばかり、ずれただけのことだった。

「くそ」短く息を漏らし、膝を殴る。
いつになったら、と思った。いつになったら、解放されるんだ、この悪夢から。
なあ、と敦は“彼女”に呼びかける。
なあ、いつまで俺を追いかけてくるんだよ、お前は。
俺はもう、誰のことも好きにはなれない。いつになったら、わかってくれる？

＊＊

その年のこの日は、はじめて二人で過ごす記念すべきクリスマスだった。幸せな恋人たちの日だった。二人は奏の働く料亭で懐石料理を食べ、その最中ほとんどの時間を見つめ合って過ごした。料亭を出ると蒼井のセドリックで海を目指した。毎年この時期、港の公園はうつくしくイルミネイトされるのだ。光の公園は、恋人達であふれ返っていた。みんなおなじ、と奏はうっとりと思った。みんなおなじ、みんなとても幸せそう、と。

港公園のイルミネーションもよく見えるそのホテルは、蒼井が三ヶ月も前から予約を取っていた。そんなに前から先生は、あたしのためにこの日をとっておいてくれたのだ、と思うと、奏は幸福のあまり気が遠くなった。なにより、その気持ちが嬉しかった。

部屋のキーを開けたのは奏だった。奏がしたい、と言ったのだ。蒼井は彼女のそんな好奇心と無邪気なエネルギーが愛しい、と思っていた。彼女のしたいと言ったことはなんでもさせてあげよう、と思う。

ドアノブを回すなり、部屋に飛び込む奏。蒼井はそのあとをゆっくりと続く。普段学校では決して見せない犬のような彼女の無邪気さに、目を細めながら。

ひと足早く部屋のテーブルに乗っているものを見つけた奏が驚い

たような歓声をあげた。僕からのクリスマスプレゼントだよ、と言った蒼井の声は、どこの誰が聞いていたとしても、声が笑っている、と比喩しただろう。

——プレゼント？

——きみが気に入るかどうか、わからないけど。

テーブルの上には、大きな箱が乗っていた。１０キロ入りで売られているみかんの段ボール箱ほどもありそうな、大きな箱だった。それは上品な淡いピンク色をしており、赤いリボンが丁寧にかかっていた。

大きな箱！　奏の目は港のイルミネーションよりもきらきらと輝いている。

開けてごらん、とうながす蒼井の声はまだ笑っている。

——あれっ、綿がいっぱい。

リボンをといて蓋を開けると、中は一面雲のように白い綿の海だった。

——探してごらん、そのなかに本当のプレゼントがあるから。

——発掘ね。

——きみは得意だろうと思ってね、そういうのが。

——犬みたい、だからでしょう？

——それがあれば、僕はきみのものだ、っていう証になるから。それがある限り、きみは僕のものだ、っていう証でもある。僕は幸せだよ。

ほどなくして、綿の海を泳ぎまわっていた奏の手に、小箱の硬い

角が触れた。

＊

自分の悲鳴におどろいて目を覚ました。

まだ完全に覚醒していない脳だと、ここがどこなのか、何時なのか、どうして自分がここにいるのかが曖昧になる。眠りから覚めるとき、とくに不用意に眠ってしまったあとが、いつもそうであるように。

すこしずつ視野があかるくなっていく。

ここはあたしの家だ。

外は、まだうっすらと明るい。いったい何時だ？

……そうだ、思い出した。仕事を早退して帰ってきたんだったな。壁の時計を見ると、夜の七時まえだった。三時間ほども眠っていたらしい。西日に焼かれた床のうえで、サウナのように蒸された暑さのなか、窓を開けることも、エアコンを入れることもせず、ぐっすり、と。当然ながら全身汗まみれだ。なんて不快なのだろう。その不快さが、決して汗のみのせいではない、とあたしはわかっていた。

どうしようもないばかだ。過去の夢を見るなんて。

汗ではりついたTシャツを脱ぎ、洗濯機にほうり込む。そしてブラジャー、短パン、ショーツも脱いで、つぎつぎと洗濯槽にほうり込んだ。裸になったあたしは、そのままの格好で洗面所を出、リビングの冷蔵庫から牛乳とハチミツを取り出した。キッチンで手早くいつものドリンクをつくり、がぶがぶと一気に飲み干す。裸の気楽さ、というのをしったのは独り暮らしをはじめてからだ。ぶ厚いガラスでできた大きなグラスを片手に、キッチンの窓を解放する。風はない。しばらく窓を開けたまま、じっと風が吹くのを待った。風は吹かない。あきらめて窓を閉め、シャワーを浴びに行く。そのまえにエアコンを点けることは忘れなかった。湯上がりに、しっかりとエアコンが効いた涼しいリビングに戻ったときの清涼感を想像すると、すこしだけ心が晴れた。

蛇口をひねると、あついお湯がシャワーヘッドからふきだすように流れでる。栓をし、浴槽に座って目を閉じた。そうやって、頭のてっぺんからあついシャワーを浴びる。息苦しいが、あたしはこうしてときたま瞑想（と、この行為をあたしはそう呼ぶことにしている）をした。

目を閉じ、息苦しさのなか、あたしは無言のなか、理解した。降り注ぐ、シャワーのお湯のようなまっすぐさで、理解をした。それはあたしの頭に、心に、いますとん、と降り落ちてきたのだ。それは、こういうことだった。

あたしは、敦が好きだ。

ほんとうに、どうしようもないな、とあたしは呆れた。

＊

従業員控え室の簡素なドアが開いた。簡素なつくりのドアが開く時に立てる音とともに。
それにほどなくして、「なに読んでんのー」と訊ねるレイナの声がした。パイプ椅子に腰掛けていた敦の首に、その細い腕が巻きつけられると同時。彼女と仲良くなってまだ日は浅いが、顔を見なくても誰の声だかすぐに分かった。鼻から空気が抜けるような、いかにも頭の悪そうな（と敦が見下している）高い声。
「村上春樹」首に絡められた白い腕をはらい、本を閉じ、表紙を見せながら敦は答える。購入した際、レジの店員が丁寧にひとつひとつ掛けてくれた紙の文庫カバーは、すでにはずしてしまっていた。
「敦くん、そんなの読むんだ？　ちょうすごーい、さすが××校通ってるコはちがうー」言いながら、敦の隣に座る。パイプ椅子をなるだけ彼の方へと寄せるようにしながら。
「知り合いん家でちょっと読んで、はまった」気づかれないようにしながら、近づきすぎた距離を敦はどうにか離そうとする。
「知り合い？　どうせ女の子なんでしょー」
「違う違う、俺にはレイナしかいないし」だったらどうなんだ、と思いながらもつい調子のいいことを言ってしまう。
「だまされないし」とレイナは怒った目をしながら喜んだ。
敦がバイトをはじめて一週間が経っていた。集会にいつも利用していた、地元のカラオケ店だ。大学一年生のレイナは、新人である敦の教育係だった。店の常連だった敦のことを彼女は知っていた。バイト初日、「ずっと敦くんのこといいなー、って思ってたんだよね」とごく軽いタッチでレイナは告げた。二人はその日のうちに連

絡先を交換していた。
「おもしろいのー？　レイナ、漫画しか読んだことなーい」
「俺もだけど。でも読んでみたらなかなかはまるし、読んだほうがいいって。賢くなるぜ」
「ちょっと」とレイナは片方の眉を吊り上げてみせる。「それ、レイナがバカだって言ってんじゃないのー？」
実際馬鹿じゃん、と敦は思ったがもちろん言わなかった。

「ヤったの？」テレビから目も逸らさずケンヂは訊ねた。
「ヤってない」と敦は答えた。
高校が夏休みに入ってから、連日この悪友の家に入り浸っていた。毎晩、飽きもせずゲームばかりに時間を費やしていた。

「でも、俺が寝ようって言ったら、簡単にヤらせてくれると思う」多分言わないだろうけど、と思いながら敦は言った。
「オマエ、ホント最低な奴だよな」
「知ってる」敦は苦笑した。
今夜のケンヂはどこか変だ、と敦は訝った。いつものハイテンション（また年上！　女子大生とかアツすぎんだろ、友達紹介してくれるよう頼んでくれよ！　親友だろ、オレ達、うんぬん）はないし、まず元気がない。
「オマエさあ」ケンヂはコントローラーを床に置いた。画面にはゲームオーバーの文字。「もういいわけ？」
「何が？」

「奏ちゃん」
「……。」
敦は黙った。しっかり名前を覚えてんじゃねえ、と内心舌打ちをして。
「もういいも、何も」
俺はひとりの女に執着するような柄じゃねえよ、と言いたかった。ケンヂは言わせてくれなかった。
「大西さん、本気だぜ」
「……本気？」
「なんか、奏ちゃん、大西さんキレさせたらしい」
「はは、なにがあったんだ」
「笑い事じゃねえよ」ケンヂは実際笑っていない。敦は笑いを引っ込めた。
「敦さ、いまはっきりさせろよ。奏ちゃんを守るか、守らねえのか」
「……なんで俺があいつ守らなきゃいけねえの？」
ケンヂは黙った。敦も黙った。
沈黙が鋭くふたりの耳を刺した。敦は事態の深刻さを知った。
「昨日」再び口を開いたケンヂの声は、いましがた深海から這い上がってきたもののように冷たく、暗かった。
「大西さんに誘われたんだよ、オレにも手伝えって」
「……。」
「奏ちゃんをさ……拉致して、その、」

言いにくそうに、ケンヂはことばを濁した。敦の顔から血の気が引いた。

「断んの、すっげえ怖かったけど、なんとか断れた」

「……。」

「オレ、そんなこと絶対に許せねえ……男が女の子を力ずくとかさ、卑怯だし、そんなことした犯人は全員死刑になればいいって思ってる」

去年、独り暮らししていたケンヂの姉が、部屋に侵入してきた見知らぬ男に襲われそうになる、という事件があった。敦もそのことを覚えていた。

「なあ敦……オレ、今回ばかりは許せねえんだ、大西さんを」

「……どうすればいいんだ？　そしたら」

「オレ達でなんとかするんだよ」

敦は笑った。ずいぶんひんやりとした笑い方になった。まるで遠い国の出来事のようだ、と思った。まったく現実味に欠ける。

「無理だって」だから、そうとしか言えなかった。

ケンヂはむきになった。

「なんで無理とか決めつけてんだよ。なんにも考えもしないでよ、」

「何にも考えが思い浮かばないから、無理だっつってんだよ」

ケンヂは無言で敦を見た。

「オマエ、意地張ってる場合じゃねえよ」

敦は思わず笑った。

「意地？　何の？」実際、意地だとか、そんな問題だとは思えなかった。

「もうホントはわかってんだろ？　オマエは大事なんだよ、奏ちゃんが」

「……違げえよ」

「それが意地だっつってんだよ。バレバレなんだよ」

「……。」

「認めろよ。大事だったら大事って言えよ。取り返しがつかなくなるまえに」

“取り返しがつかなくなるまえに”。

「ホント、いまは意地張ってる場合じゃないって。またヒトを好きになんのがそんなに怖いか？」

敦は息を吐いた。してもいいのなら唾も一緒に吐きたかった。「何言ってんだ、お前。そんなくだらないこと」

ケンヂの声がひと際低くなった。「くだらない？」

「ひとりの女ばっかり追っ掛けまわすなんて、そんなこと、すっげえくだらねーことだ、って言ったんだよ」

「……。」

彼がもうずっと、一途に片思いをしていることを知っていて敦は言ったのだった。ケンヂが殴り掛かってくる、と身構えたが、そうはならなかった。

ケンヂは黙って、敦を見つめた。その目に怒りはなかった。同情、かなしみ。敦は自分の顔が熱を持つのが分かった。

「オマエさあ」ケンヂの声は穏やかだった。「オマエ、いつまでそんなこと言ってるつもりなの」

敦は答えられなかった。

「もう何年経った？　あれから？　忘れろなんて言わねえけど、いい加減立ち直れ。オマエがそんなんじゃ……」

「ケンヂ」

ことばを遮り敦は立ち上がった。ケンヂはぎょっとし、身構えた。

「な、んだよ」

「帰る」自分のことばが海を挟んだ対岸から響いてくるようだ、と思った。

ケンヂは慌てて立ち上がり、親友の肩を掴み、制止しようとした。

「待てよ！　まだ話ついてないだろ」

敦はその手を冷静にはらった。

「ついてるよ、もう」

「は？」

もうとっくについていた。すくなくとも敦のなかでは。彼女のアパートから逃げるようにして自宅に戻ったその日に、すでに。

「悪いけど」と敦は言った。実際ほんとうに申し訳なく思っていた。ごめんな、俺、いつまで経ってもこんなんで。

「悪いけど。俺はもう誰のことも大事とは思えない」

振り向きもせずそれだけ言い残し、部屋から出て行ってしまった敦に、ケンヂはなにも言えなかった。

＊

出ていったのとおなじくらい唐突に、ある日敦はやってきた。なんの前触れもなしに、こつぜんとすがたを消した日から、すでに十日ほども経っていた。

その晩も、あたしはくたくたになって帰宅し（夏休み、ということで、連日忙しかった）、あついシャワーを浴びたあと、リビングで化粧水をつけ美容液をつけ、ボディクリームを塗り、寝る準備をしていた。麦茶を飲もう、とグラスを取りにキッチンにでたとき、外からがちゃがちゃ、と音がしたと思ったら、玄関の扉がまるでこともなげに開いたのだった。当然だけど、あたしはおどろいた。

「奏？　起きてた？」

髪はまだ濡れたままだったし、普通の神経を持った女の子ならだれでも、まちがいなく腹を立てただろう。こんな夜分遅くに、風呂上がりの女の子がいる部屋に、あがり込むなんて。呼び鈴もならさずに。それだけじゃない。十日もまえのあの日、この男はなんの断りも、説明すらもなく、アパートを出ていったのだ。そのあと、いちどたりとも顔を見せず、連絡さえなかった。怒ってしかるべき。あたしは傷つけられたのだ。

けれど、あたしはまずなつかしがった。ひどくなつかしい声、と思った。怒りはこれっぽっちも湧かなかった。会わないあいだにヘアサロンにでも行ったのか、髪が短くなっている。以前までのふわ

ふわだったヘアスタイルもよかったけれど、敦は短い髪がよく似合う。男前は得だなあ、と思った。

「急にごめんな」、スニーカーを脱ぎながら敦は謝り（しかしまったく悪びれた様子もなく）、リビングに入っていった。あたしもあとにつづく。

「合い鍵、返し忘れたから」

「……ああ、そうだっけ」

「うん、渡しにきた」

ちいさな銀色の物体が差し出され、あたしは受け取る。受け取りながらも、そんなことは単なる口実でしかないのだ、とわかっていた。

「わざわざありがとう」、と顔をあげると、敦はとても真剣な顔をしていた。

「元気？」

するどい目。からだがあつくなる。肉食獣が捕食するターゲットをとらえたときの目。胸が冷たい音をたてた。理解したのだ。敦は、今日、このためだけにあたしの部屋にやってきたのだ、ということを。

元気だよ。と心のなかでこたえ、うなずいた。なんとかほほえみらしいものを浮かべることができた。うなずくと同時、とてもはげしく抱きすくめられた。心臓がもたない、とあたしは悲鳴をあげたかった。

愛、ということばは、昔からの日本の言葉では“かなしい”といった意味もあったらしい。それをしったのは高校のときだった。当時読んだ、ある女性作家さんのインタビューにあった。それからずっと、あたしの胸の内に、そのことばは無造作に転がったままでいる。愛しい、それは、かなしい。

あたしはとても愛しかった。

敦が帰ったら、またシャワーを浴びよう。ほとばしるあついお湯を頭から受けて、瞑想にふけろう、下着を身につける彼をみつめながら、あたしはすでに敦が帰ったあとのことを考えている。

敦とキスをするたび、あたしのからだのなにかがすりへっていく。からだのなかから、なにかが欠落していく。死にいたるような、決定的でおおげさな量ではなく、ほんの、わずかずつ、わずかずつ。しかし、塵は積もり、やがて山となっていく。あたしはくたびれていた。涙をおさえるのがやっとだった。

「いま、家にいるの？」

敦は振り返った。ジーンズに足を通しながら。そしてあっさり、

「うん」とこたえた。

「高校生は夏休みに入ったんだよね、もう」

「うん。バイトはじめたんだ」

「そうなんだ。なんの？」

「カラオケ屋の店員。地元んとこの」

「忙しそう、カラオケ屋とか」

「そうでもない。廃れてるんだよな、地元の顔見知りしかこねーんだもん」

「いいじゃん、たのしそう」

「楽しかないよ」敦は苦笑した。

元気そうでよかった、とあたしは言おうとしたのだと思う。いずれにせよ、この部屋を出ていってしまったことに関して、問い詰めたり責めたり追及したりはしないつもりだった。というか、おおよそは予想がついたし、それがことばとなって具現化されてしまうのがこわいと思っていた。

元気そうでなにより。

そう言うかわり、

「あたしさ」と、あたしは言っていた。

「うん？」

「あたしさ、好きみたいなんだよね、敦のことが」

元気そうでなにより、あるいは、あした暑くなるらしいね、とか、そんな風な気軽さで、あたしは告白していた。あたかも日常会話文のうちのひとつをたまたま口にした、とでもいった風に。

しかし敦は一瞬、からだのすべての動きが止まったようだった。それから、ちょっと困ったように笑った。

あたしはほほえみ返し、立ちあがった。「帰る？　喉かわいてない？」

「喉渇いたかも」

「麦茶か、アイスコーヒーか」

「アイスコーヒー」

もういちどにっこりしてみせ、キッチンにグラスを取りにでた。こりゃだめだな、と思いながら。

でも、ことばの持つ重い意味合いを、それの働きやちからを、な

いがしろにしてしまったのはあたしのほうだった。

告白について、敦は結局なんにも言わなかった。肯定もしなければ、否定もしなかった。

「じゃあね」靴を履き終え、ドアノブに手をかけた敦に、あたしはまったくいつもどおりの笑顔で言った。

「じゃあ、また」と敦は言った。敦の笑顔も、いつもとおなじそれに戻っていた。

ドアから身をのりだし、階段を降りていく敦を見送った。

一段、また一段、敦はあたしから遠ざかっていく。それを見届けて、ゆっくりドアノブを引き、重い鉄の扉を閉じた。

閉めたあとになって、かなしみは、どっと体内になだれ込んできた。すぐにからだ中がかなしみで満たされてしまった。すりきり満たんに。からだが重たい。重たすぎる。あまりの重量に打ちのめされたあたしは、耐え切れなくなってその場に座り込んでしまう。蒸し暑さのこもる、玄関先で。これは、と打ちのめされながら思った。苦笑いがこぼれた。これは、しばらくの間、立ち上がれないぞ、と。でも涙はちっともでなかった。

勝也のことが浮かんだ。「おまえもいつかまた、誰かを愛しいと思えたらいいな」と言った、やさしい勝也。

「愛しい」とことばにしてみる。口にだしたとたん、心臓が窮屈になった。でも、なかなか悪くない気分だ、とあたしは思った。こんなときでさえ、顔からこぼれるのはほほえみだった。

それでも、これでおわりじゃないのだ、とあたしにはわかってい

た。だって「また」と言ったのは向こうのほうだ。だからそれほどかなしくないのだ、と思った。
その「また」が、嘘だという可能性はあるけれど。だとしたら、それもしかたないことだ、とも思っていた。

＊

送別会をする、というのは、勝也が店に辞表をだした（というか、単に『辞めます』と言っただけなのだが）のとほぼ同時に決定していた。オーナー夫妻にとって勝也は、十年以上も前から目をかけ大事に育ててきた可愛い息子のような存在だったし、それはこれからだって変わらない、と思っていた（実際夫人は、そう言って勝也を抱擁しようとした）。
今日くらい、店はなるべく早く畳んでしまおう、ということになり、閉店は普段よりも一時間も早くなった。個人営業だからといってしょっちゅうこんな勝手なことをしていて、商売に影響はでないのか、と奏は心配したが、厨房の社員二人とオーナー夫妻はすでに宴会の用意をはじめていた。
先週から、新しい社員がやって来ていた。彼は以前、一流ホテルの厨房で働いていた。しばらくは料理長が副店長としての仕事（発注だの営業回りだの、沢山の雑務）も請け負うことになるが、いずれは新しい彼が料理長に、いまの料理長が副店長になる予定だ。
当初は参加するつもりはなかった奏だったが、こっそり帰ろうとしているところを、運悪くオーナー夫人に見つかってしまった。彼女は、奏のこともまるで娘のように可愛がっている。

ひとりで帰るつもりだったの？　こんな夜中に！　あとで私が送ってあげるわよ（おれが送ります、と勝也が挙手したが、あなたは主役なんだから、と一蹴された）。そして宴もたけなわになった午前一時になっても、帰るタイミングを計り損ねていた。

勝也が用を足してトイレを出ると、奏が待っていた。

「どうした、酔った？」

「そろそろ帰りたいなあ、と」

「よし、おれが奥さんに言ってやるよ」

「副店長」、とうつむき加減に呼び掛けた奏に、勝也は不覚にもどきり、とした。彼女についてはもう頓着しまい、と心に決めて早二週間が経っていた。

酔ってるな、と勝也は思った。とくに酒に強いほうではなかったが、普段、奏は酔わない程度にうまく酒をのんでいた。

「まえに、言ってたじゃないですか……副店長、」

「カツでいいって」

「カツ、言ってたでしょ」

「なにを？」

「『お前もまたいつか、本気で誰かを愛しいと思えればいいな』」

「あー、言った」苦笑しつつ、答える。思わず腹部をさすってしまう。消し去りたいほど、苦い思い出だ。

「あれね、できたよ」

「ん？」

春風のように、奏は微笑んだ。

「好きなひと」

勝也は黙った。早えよ、と内心悪態をつきつつ。

「……例のくそガキ、とか言うんじゃねーよな」

「ずばり」

「まじかよー」と勝也は悔しがる。奏は笑った。春の風の穏やかさで、まるで幸福そうに。それはかつて勝也と関係をもつ以前の、勝也がずっと手をだしたくてうずうずしていた頃の奏だった。

「なにが面白いんだよ」と勝也は不服げに言った。

「恋愛とか。ちょう久しぶりだもん」奏は笑って言う。まるで幸福そうに。

勝也はいま、地団駄を踏みたいくらいに悔しかった。悔しすぎて、むしろ笑ってしまう。「どうしてそれが、おれじゃないのかね？」

「ほんとにね。カツだったらきっと、あたしを幸せにしてくれるだろうにね」

「なんだ？　すでに失恋したような言い方」

「したもん、失恋」

「……まじかよ！」

ふたりの間に、しばしの沈黙が流れた。

「ひさかたぶりの恋愛が。むくわれないねえ、若者よ」

「じじくさい、なんか」奏は笑った。

「もうじき３０だからな」

帰りたいんなら、用意しろ。奥さんに頼んでやるから、と言って勝也は奏に背を向けた。頼もしい背中、色っぽい、ほっそりとした

腰のライン。好きだったなあ、と奏は思った。
たしかに、あたしは失恋した。浮遊感のある脳で、記憶をさらうように奏は思った。たしかに、あたしは失恋した。でもまだおわってない、と。
それは事実であり、確かなことだ、と奏は知っていた。でもそれは勝也には言わなかった。

オーナー夫人はすぐに車を用意しに行った。靴を履く奏に、勝也は無言で握手を求めた。二人の“終わり”にふさわしく。正真正銘の“終わり”。
「幸せにな」しばらくののちに勝也は言った。本心だった。
「カツもね」と奏は笑った。

「いままでありがとう」
「うん」

勝也の手の平は大きい。懐かしいあたたかさ、と奏はひっそりと思った。

夫人の車に乗り込んだあとになって、勝也にありがとう、を言わなかったことに気づく。でも、と奏はすぐに思い直した。
でも、さっきの握手にすべての感謝を置いてきたのだ、と。勝也にはきっと伝わったに違いない、と。
「シートベルト、締めてね」と言ったオーナー夫人の声が、銀河の外からのものに思えた。奏の返事は小さすぎて、おそらく夫人には聞こえなかった。

↓次話.

6.

どういった話の流れでそのような昔話をすることになったのかは覚えていないのだけど、あたしはその話をした。まだ敦が、この部屋であたしとともに寝起きをしていたころ、まだこの部屋から出ていくまえのことだった。

いまでこそ、好きでもない男たちと軽々寝てしまうあたしではあるけれど（それもこの久方ぶりの恋愛で、いよいよ打ち切りの予感がする）、そんなあたしにも、まだ純粋無垢な小学生だった時分もあったのだ、たしかに。

――よく家族旅行をしたの。夏休みと冬休みに、年二回はかならず。いろんな場所に行ったな、国内ばっかりだけどね。あたしと、両親とでね。

何年生のときに、どこに旅行に行ったのかはまるで覚えていない。夏だった。父の車で、どこかの田舎町をはしっていた。そして堤防のしたに広がるグラウンドで、町内会が主催しているようなお祭りが催されていたのをたまたま見つけたのだった。いろんな出店がでていて、フリーマーケットのようなものもやっていた。そこでよくわからない生き物のマグネットを買ってもらったな、ということをそのとき、話をしながら思い出した。

――○×ゲームがはじまったの。
――○×ゲーム？
――優勝したら、なんとお米２０キロ。
――すげえ。
――がんばったのよ、あたし。
――米２０キロのために？
――そう、米２０キロのために。

あたしはほんとうにがんばった。気づけば、５０人ほどの参加者のなかで、残るは小学生のあたしとだれかのお父さんのふたりだった。

次の問題です。

いよいよこれが最終問題になりそうですね、と司会の男の人がやけに熱っぽく言ったマイクごしの声が耳に残っている。その問題が、『魚の瞼』に関する問題だったのだった。

――魚のまぶた？
――うん。問題はね、『魚はまばたきする。○か×か』。
――×じゃん。
――不正解。

あたしは胸のまえで大きく×をつくった。あたしたちは裸のまま談笑していた。敦はベッドに寝そべったまま、あたしは床にぺたん、と座っていつもの蜂蜜牛乳をのんでいた。

朝だった。晴れていて、大きな窓から注ぎ込まれた白い光がたっぷりと部屋中を満たした、あかるく爽やかな夏の朝。敦がのんびりとしていたから、土日あるいは祝日だったのだろう。部屋の窓みっつすべて開けても風は入ってこず、朝っぱらから――というか、白状してしまえばひと晩中――エアコンがしっかりと効いていた。

――魚はまばたきなんかしないよ。

敦がすこし、気の毒そうな声で言った。あたしはむっとした。すこしいい高校に通っているからって、あたしのことをきっと格下だと思っているのだ（そうにちがいない）。

――魚にはちゃんとまぶたがあって、まばたきするやつもいるの。

小学生のあたしの趣味は、図鑑をながめることだった。植物図鑑、世界の民族図鑑、昆虫図鑑に動物図鑑……なかでもとくに好んで繰り返し読んでいたのは、海の生物図鑑だった。

そのなかに、ちゃんと載っていたのだ。

魚には、まぶたがある、ものもいる。

あたしは緊張した。『○』のスペースに移動し、どうしよう、と困った。どうしよう。車まで5キロの米袋よっつも、どうやって運べばいいのだろう、と思ったのだ。ライバルであるだれかのお父さんは、ばか正直みたいに『×』のスペースに立っていた。小学生だったあたしの目に、彼はひどく哀れっぽくうつった。かわいそうに、と思った。かわいそうだ、彼も奥さんのため、子供たちのため、一生懸命戦ったのに。あたしは決意した。優勝したら、ともに戦った勇姿をたたえて、半分分けてあげよう。

――で、米貰ったの？

――もらえなかった。だって優勝できなかったもの。

とっくに時間制限は越えていたのに、司会の男の人はなかなか正解を言わなかった。ちょっと困ったように、幼かったあたしの顔をみて笑っていた。

たしかに、動物のからだの一部にならっていえば“まぶたのよう

なもの”のある魚もいる。

――世間一般の常識にのっとって言えば、魚にはまぶたがないらしい。

――正解じゃん、俺。

――あたしはお米をもらえなかったばかりか、お母さんにめっちゃ怒られた。

――それは残念だったね。

残念。まさに。そのことばは非常にあたしという人間の本質を言い得ている。

母に呆れ半分に怒られたとき、あたしは言い返せなかった。“まぶたのようなもの”をもつ魚の名前が、ひとつも思い浮かばなかったからだ。

悔しくて悔しくて、旅からもどるとまっ先に図鑑を開いた。それは河豚の一種だった。そうだったそうだった、と小学生のあたしは思い、うなずいたはずだ。

しかし、せっかくまぶたのあるその河豚たち、眠るときにはまぶたを閉じず、言わば目を開けたままで眠るらしい。そのときはなにも感じなかったのだが、のちのちになって、なんともまあ、と思うようになった。君たちはまるであたしみたいなのだから、と。ちょっとまぬけっぽくて残念なところとか（彼らはいちど眠るとしばらく起きないので、いともかんたんに捕らえられてしまうのだという）。

フグってせっかくまぶたあんのに目え開けたまま寝んの、まぶたの意味ねえ、などと吹き出している敦の隣で、どうしてあたしはこんな話をはじめたのだろうと首をひねっていた。

いまになって、「わたしはこんなに残念な人間なのですよ、あなたが一緒に暮らす価値もないほどの」というアピールをしらずして

いたのでは、と思ってしまう。そしてすこし沈鬱な気持ちになった。

そんな、まぬけっぽくて残念なあたしを見放して、アパートを出ていってしまった敦。出ていって十日ほど経ったころ唐突にこの部屋にやってきて以来、あいかわらず唐突に、敦はしばしばやってくる。夜もおそい時間に連絡もなしに突然やってきては、あいさつらしきものを短く口にすると世間話もはしょり、性急にあたしを抱いた。雑ではなかったが、あまり丁寧とも言えないやりかただった。事が済めば談笑する間もなくそそくさと去っていき、そうしてあたしは流されるがままに日々を送っている。

腹は立たなかった。憤り、というものがまったく湧きあがってこないのだった。あたしはただ彼の神出鬼没によろこび、抱かれ、幸福になってしまう。

しかし、これは恋、と呼んでいいものなのか、と首をかしげたくなる。

恋。あたしがまだ世間知らずで若かりしころ、かつてまだ恋、というものに憔悴していたころのことを――ずいぶんとおいことのように思う――思い出すと、それとこれとはまったく似ても似つかないような気がする。

恋情を認めてからというもの、あたしは過去がさほどこわくなくなった。成長、というのか、単に塗り替えられた、ということなのか（だとしたら、この恋が終わったら今度は敦のことをおそれてしまうのだろうか。それはちょっといやだと思う）。いずれにせよ、進歩だと、あたしはひそかによろこんでいる。敦に会えない日が数日つづくと、かつての、唯一の恋人だったひとと、敦のことを思い浮かべ、ふたつの恋を比べ合ったりして過ごしていたりする。

進歩だ。

かつての、そして唯一の、あたしの恋人だったひと。名前は蒼井先生という。ファーストネームを呼んだり、先生をはずしてただの蒼井さん、と呼んだりは、いちどもしなかった。蒼井先生は最後まで蒼井先生だった。

初恋、ではなかったのだけど（その初恋もまた報われない、不毛な恋であったことに関しては差異がないのだけど）、はじめての恋人だった、ということもあったのだろう、あたしは彼に心底溺れた。会えない日はろくに眠れず、ろくに飲み食いもできなかった。会えばうれしさと愛しさのあまり、死んでしまいそうだった。そしてそれらとおなじくらい、苦しくて、なぜだかひどくかなしくなった。

かなしさ。

敦に対して、その感情が欠落している。

告白し、返事ももらえないまま別れた日。あの日はたしかにかなしかった、と思う。しかしつぎに会ったときにはもう、それは忽然とすがたを消していた。ちっともかなしくはなかった。性交の終わったあとすぐに、帰る、とそっけなく言われたときでさえ。

あきらめているのかもしれない。居直っているのかもしれない。いずれにせよ、敦がなんの前ぶれもなしにアパートをたずねてくると、あたしはただうれしくなった。ただ幸福を感じた。蒼井先生のときよりもずっと、まともな恋ではないのにも関わらず。

まともな恋ではない。それはちゃんとわかっていた。やっぱりあきらめているのだ、と思った。居直っているのだ、と思った。

そういったときはいつでも、ふたつのことばがうしろをついてまわった。

——僕、中村さんはもっと大人だと思ってた。

――お前もいつかまた、誰かを愛しいと思えたらいいな。

前者は蒼井先生と別れたときに言われたもので、後者は勝也と別れたときに言われたものだ。

たしかに最近、あまり大人じゃないな、と思う。誰かをいとしいとは思えたけれど、まともじゃないうえあまり頭のよさそうな恋とは言えないな、と思う。

そして、上等上等、とさらに居直った。それからじぶんでじぶんを「ばかなやつ」と笑ってしまう。うれしさと幸福は、敦に会えた翌日まで、どころか、翌々日までつづいた。

しかし――これは無論わかっていたことだったのだが――、幸福なとき、というのはいつでも長続きしないものなのだった。

当たり前だよなあ、とは思いつつ、あたしは店の事務所で肩を抱いている。発注とちょっとした休憩のために戻ってきたはいいが、目の前のパソコン画面は真っ暗なままだ。そのとなり、長机のうえに置かれた、「休憩ついでに試食してよ」と料理長に渡された試作メニューは、わずか一口分だけを欠かし、ほとんどまるまま原型をとどめている。いけない、と気持ちを奮い立たせようとするが、じぶんのロッカーの中身、着替えと一緒に置かれたエディターズバッグのなかにつっこまれている、乱暴に丸められた一枚の紙切れを思い出し、あたしはもういちどぞっとした。

今朝ドアポストに差し込まれていたそれを見つけたとき、まっさきに浮かんだのは勝也の顔だった。その勝也にはもう頼れない、というのに。

それは、ピンクチラシだった。一見なんのへんてつもない、どこにでも、どんなアパートにも投函されるような、安っぽく迷惑きわまりないピンチラだった。ドアポストにまで入れにくるか、と眉を

しかめたあたしだったが、ひっくり返して裏面を見たとたん、すぐさま指先がこおりついた。すっ、と背筋をなにかおぞましいものに撫でられ、からだが動かなくなった。我にかえり、あらんかぎりの力を込めてそれをぐちゃぐちゃと丸めた。その場に、玄関の床に叩きつけずに鞄のなかにほうり込んだということは、たぶんあたしはだれかに相談したい、と思ったのだろう。今朝のことだけども、すでに思い出せない。

相談。

どうしたらいい。

だれに相談すればいいのか、わからなかった。

「お疲れ様です」ほがらかな声とともに、山下くんが事務所に入ってきた。反射的に時計に目をはしらせると、すでに十時だった。

「おつかれさまです」やばい、と思いながら返事をし、キーボードを叩きはじめる。やっと指がうまくうごくようになった。

「これ何ですか？」と山下くんが背後で言ったとき、うかつにも必要以上にびっくりしてしまったのがいけなかった。

「なにって」血の気の引いた顔であたしは振り向いた。山下くんが指していたのは、当然ながら長机の皿だった。ああ、とあたしは言った。舌打ちしそうになる。

「九月からの新メニュー。試作したからって」

「うまそうですね」と山下くんは爽やかに言った。

「たべていいよ。昼食がおそかったからね、お腹すいてないんだよね」感想は多いほうが参考になるし、と言い訳っぽく付け足した。

「いただきます」と言った山下くんが、俺箸取ってきますね、と入口に向かおうとした。お箸、あるじゃない、と不思議に思って言えば、真剣な顔で「間接キスになるじゃないですか」なんてことを言

う。あたしは思わず笑ってしまった。

「気にするんだ、そういうの」

「ガキだ、って思ったんでしょう」

山下くんは顔を真っ赤っかにして抗議した。あたしはちょっとだけ、かわいいな、と思った。それでそんなことないよ、と言ってあげたのだけど、嘘だ、と指摘されてしまう。そのとおりだったので、肩をすくめるしかない。

「たべて、いまのやり取りなかったことにするから」

「余計食べにくいですよ」

「なごり鱧だよ。おいしいよ」

「なごり？」

「鱧、は夏の魚でしょ。いまから出回るやつはなごり鱧って呼ばれて、これも秋の旬なの。毎年あるじゃない」

「ありました？　去年」

「全面的にプッシュはしてないけど。ほそぼそと土瓶蒸しなんかに入ってたね」

覚えてないや、と山下くんは困ったように――ほんとうに困ったように――頭をかいた。いい子だよなあ、ほんとう、と甥を見守るおばさんのような気持ちであたしは思った。

いい加減したに降りなくてはならない。すでに三十分もここにいることになっていた。気を取りなおしてキーボードに両手を乗せたとき、「中村さん」、と山下くんがひと際まじめな声をだした。

「なあに」素知らぬ顔であたしは発注の数字入力をつづけた。山下くんはもういちど、中村さん、とあたしを呼んだ。彼の顔を見もせずに適当な返事をしたせいか、さらにぴりっとした声で山下くんはあたしを呼んだ。返事はしたが、それでもあたしはまだ彼のほうを

見なかった。いつの間にか、あたしのすぐ隣に彼は立っていた。

「何かあったんでしょう？」

「なにかって？」

なんにもないよ、とあたしはこたえた。指を止めることなく。

嘘ではない、と思った。実際嘘ではない。山下くんに相談できることなんか、なんにもなかったからだ。

山下くんはだまったままうごかなくなってしまった。数字の入力が済んでしまってもそのままなので、もういちどなにもない、と言い、彼を見あげた。「大丈夫だから」と。

「ですよね」と山下はあたしの目を見てしずかに笑った。そうとおくない以前に、いちど目にしたことのある笑いかただった。

「ガキですもんね、俺。相談することなんて何にもないですよね」

今度はあたしがだまる番だった。わかった、と思っていた。わかった、思い出した、“あのとき”の勝也の笑いかただ。

「俺、何五年も遅く生まれてきてるんだろう」

と、さらに彼は笑った。ひどく傷ついた声で、おかしくもなんともなさそうに、けれど山下くんは笑っていた。

「役に立ちたいんですよ、俺。中村さんの役に立ちたいんですよ」

あたしはだまったままどうすることもできなかった。そんなあたしを見つめ、山下くんは凄惨に笑いつづけた。それからひっそりとした声で「好きなんです、中村さんが」と言った。

好きなんです。
これは、告白？　あたしは困った。逡巡したのち口にできたことといえば、そう、の、たったひと言だけだった。

そう。

そのひと言はいやに鈍く、しばらくのあいだ宙を漂った。沈黙。あたしの返事があんまりだったせいで、山下くんもなにを返せばいいのかわからないようだった。沈黙。すこしあとになって、なんて最低な女だ、とじぶんのことを思ったが、限界だった。

「ごめん、もうもどらなきゃ」
なにより、はやくこの場から逃げたくてしかたがなかった。
顔を背けて言ったあたしの声、彼にはどんな風に聞こえただろう。

また、あのふたつのことばがあたしのからだに身をよせる。
大人、になってしまったのかもしれない。
だれかを愛しいと思えようが思えまいが、あたしがひどい女であるのに変わりはない。
これじゃまるで、あたし、蒼井先生みたいだ。

そもそも、こんな風になるのがいやで、彼らとは深く関わらないようにしてたはずではなかったか。じぶんに訊ねてみたが、こたえはなかった。

＊

二人を乗せたドラッグスターは、山の麓にある百合の家の前の坂を登り、山下の家と病院がある住宅街を抜け、山沿いの国道に出た。くねくねとしばらくカーブの道を走っていると、唐突に視界が開ける。高度三〇〇メートル、見下ろせば山下達の住む町からさらに晴れた日には、十数キロも離れた市内までが一望できるのだ。数メートルほど進んだあと、道幅が広くなっているところで、山下は慎重にドラッグスターを脇に停めた。バイクが停まるやいなや、後部シートから転がり落ちるように百合が降りた。ひゃあ、やら、きゃあ、やらと歓声をあげながら。

「きれーい！」

「好きだよね、女の子って。夜景とか」

先に走っていってしまった百合に追いつき、山下は言った。人々の生活の灯がゆらめき、輝いていた。絶景だったが、どこか現実的に思えなかった。水面で屈折した光を見ているような。自分達の住む場所とはまったく別の、遠くかけ離れた世界のように感じ、ひどく心細くなった。

ここに、と山下は思った。ここに中村さんが一緒だったらな、と思った。

勢いまかせに告白してから三日が過ぎていたが、あれ以来、二人きりで会話をする機会は訪れていない。次にその機会があれば、ばっさり切るみたいに振られちゃうんだろうな、と山下はそっと、まるで人ごとのように思った。振られるのはまず間違いないだろう。なのに、なんの感慨も湧いてこないのだった。実際自分の耳にするまでは、認めたくないのかもしれなかったし、あるいはまだ心が追いついていないだけなのかもしれない。彼女に告白をした、という

事実は、山下にとって、すでに百年も昔に起こった出来事のようだった。

「きょうはありがとね」と百合は言った。

「たいしたことじゃないよ」山下は爽やかに微笑んだ。

たいしたことではない。バイト後迎えに来るはずの両親どちらとも連絡がつかなくて（百合いわく、「どうせ寝ちゃったんだろうけど。ひどくない？」）途方に暮れていた彼女をバイクの後ろに乗せて、山下の帰路途中にある彼女の自宅まで送り届けた、がしかし、到着した途端気が変わった百合に催促され、さらに山頂までバイクを走らせた。それだけだった。たいしたことではない。

「お礼にね」などと百合が言いかけるので、それを遮るように山下は「何お礼って。べつにいいよ」と笑った。

「わたしの気が済まないの」とさらに百合は言い募る。「だからね、相談聞いたげる」

「相談？」笑いながら訊ね返す。山下にはこの同級生の突拍子のない発言が好ましかった。

「相談。いくら長くてもいくら深刻で込み入ってても、なんでも聞くから」

「そう言われても」山下は苦笑する。

「山下君さあ」百合が突然真剣な声をだした。「ここんとこ、変なんだよ」

「変？」

「変。元気ない」

「そうかな」そんなつもりないんだけどな、と首を傾げた。

「そうなの。笑顔に影があるっていうか。漫画みたいに、頭のうえに不揃いの縦線がこう、何本も垂れ下がってるかんじ。オーラ的な」

「そう？　自覚はなかったんだけど」

「暗い影がある、なんか」

なんだろうな、わからないな、山下ははぐらかそうとする。百合はいっそう真面目な声で言った。

「なにを悩んでるの？」

「悩みっていうか」山下は諦めて言った。とぼけるのをやめて。「恋煩いだよ、ただの」

百合は感嘆の声をもらした。「山下君でも、恋に悩みとかあるんだね」

「大ありだよ。まったくだめ。全然上手くいかない」半ばやぶれかぶれに山下は答えた。

「それでも意外」などと百合が感心するので、なお苦く笑うほかない。

「上手くいく恋ばっかりできる人なんていないよ」

「山下君はそういうタイプだと思ってたな、わたしと違ってさ」

「上手くいってないの？」

「まったくだめ」先ほどの山下の口調を、百合は真似て笑った。

「ばかなんだよあいつ。基本的に」

「馬鹿……」

「そう」容赦なく百合は言った。「鈍いって大罪だと思う。放火犯とおなじくらい」

「そうかな」

「そうなの。そのうえだらしないし、しょっちゅう女の子紹介しろって言うし」

「うわあ」

「飽きたらかんたんに女の子すてちゃうし。すずしい顔で」

「ええ」

「ほんとのとこ、いっかい死刑になればいいのにって思う」

「死刑」

そう死刑、と笑った百合の目から本心は読み取れなかった。

「それで」と百合は山下に詰め寄った。「山下君の恋の悩みはどんななの」

「どんな」と言って、山下は考え込んでしまう。はっきり言ってしまえば、視野にさえ入れてもらえないのだ。論外。山下を見つめる彼女の目には、その漢字二文字がいつも映っている。

「完全なる一方通行」

「うそ、山下君が？」

「嘘なんかじゃないよ。一方通行の標本だよ、まるで」

「不毛だねえ」

「不毛だね、お互い」

百合はすこし考えを巡らすように黙った。ふたりの職場での、ある噂を思い出した。とても有名な噂だった。山下の想い人が中村奏で、山下はまったく相手にされていない、という話だ。噂はほんとうみたいだ、と百合は解釈する。そして、案ずることはないよ、と、にやりとして思った。

「あのね」山下の耳元に顔を寄せ、彼女は言った。すごくいいことを伝えるときの声で。

「奏さんね、失恋したらしいよ」

山下はぎょっとした。顔が赤くなる。当人はそんな噂が流れていることを、まるで知らなかったのだ。

「そうなの？」かろうじて、それだけ口にできた。

山下は動揺していた。想い人がばれていた（職場ではほとんど周知の事実だったのだが）のにまず驚いたし、なにより初耳だった。

初耳。――中村さん、恋をしてたのか。と。

「うん」神妙に百合は頷いた。

「わたしが紹介したコだったんだけど。だめだったんだって。お似合いだったんだけど……あ、ごめんね」

「謝らないでよ」山下は笑った。むしろ傷つくから、と実際に傷つきながら思った。

「頑張って、山下君。山下君ならきっとうまくいくよ」

だといいんだけどね、星を探しながら山下は言った。夜空は黒く曇って、星ひとつ見えないくせに街の灯りのせいで、やけに明るく、汚く煙って見える。

「応援してるからさ」

ありがとう、と微笑んでみせたが、山下の心はすでに折れかけていた。

せめて三年、と思った。それだけでも早く生まれたかった。そうして、中学高校生活を、同じ時期に過ごせていたならばすこしはいまとは違う結果になったのではないか、と、思わずにはいられなかった。自分の境遇が恨めしかった。

好きです――思わず口をついたその言葉に対する返事。あのときの奏の声は、あまりにも冷たかった。口からでた途端凍りつき、ぱらぱらと床に散っていくような。仕事中自分のミスを報告したときのほうがよっぽどあたたかい声を掛けてくれるのに、と思うとまた一段と山下の心は沈んだ。

山下は水面下の、水底の街を見下ろした。数多の人々がこの王国で、各々営みの灯をともしている。見えない水面がそれを屈折させているせいで、彼の目にそれらは随分平べったく映った。まるで現

実的じゃない、と山下はもう一度思った。ひどく寄る辺ない思いで。彼らの足元から下の世界のどこにも、自分の居場所はなくなってしまったかのような気分だった。

そろそろ帰ろっか、と満足した百合が言うまで、山下は非現実的な思いで眼下の街を俯瞰しつづけていた。

「お互いがんばろうね」

そう言ってぽん、と百合に背中を軽く叩かれたとき、このままじゃいけないよ、と言われた気がした。

「そうだね」

なんとか笑って応える。

もう一度、正式に告白をしようと思った。しっかり、彼女と向き合って話をするべきだ、と。

それに、と山下はもうひとつ、彼を沈ませる要因について思った。先日からここ数日の奏の様子は明らかにおかしい。なにかに怯えているようで、些細な出来事——皿が割れたり、若い男性客が来店したり、そういう出来事——にもはなはだ過剰に反応するさまは、まったくもって平穏、とは言い難かった。山下は本当に、彼女の力になりたいと思っているのだ。打算もなにもなく、ただ真摯にそう思っているのだった。

＊

同じ夜、敦は十数日ぶりに親友といた。ケンヂに会ったのは、彼の家で奏について言及し、軽い言い合いになって以来だった。すこし気まずかったのは事実であったが、意識して避けていたわけではなかった。しかし結果的にそういうことになってしまっていた。

前日から降り続いていた雨は、夕方、敦が出勤する頃にはすっかり止んでしまっていたが、その名残で今夜の空気はじっとりと湿っている。蒸されるような暑さだった。あまりの蒸し暑さに息苦しさを感じながら、敦は左手をうちわのようにあおいだ。

「前言ってたさ、」と唐突ケンヂがはじめた。敦は親友の方に振り向いた。ケンヂは自分の原付に、後ろ向きになってまたがっている。

「レイナちゃんってあの子だろ？　ヤろうと思ったら簡単にヤらしてくれそうって言ってた」

「そんなあからさまな言い方してねえよ」敦は肩をすくめ、ケンヂの原付の隣に停まっているバイクにもたれかかった。

「かわいーな、レイナちゃん。いいなあ、オマエは。友達紹介してくれるように頼んでくれよ」

「そんな話しにきたわけじゃねーだろ？」

敦がため息まじりに言えば、ケンヂは「そうだった」と楽しそうに笑った。その明るさが繕ったものであるのを今度こそ確信し、敦はとても嫌な気分になった。

十五分ほど前、敦の仕事中に突然ケンヂがやってきた。ひとりきりで。敦は目をまるくした。大西の召集がかかってもいないのに、ひとりでケンヂがカラオケ店に――この店に限らず。そもそも彼は音痴なのだ――出向いたりしたことは、いままで一度もなかったからだ。

――どうしたんだよ。

――ちょっと報告に。

今夜、ケンヂは現れた当初からずっと明るかった。その明るさには、なぜだか妙に引っ掛かるところがあり、敦は眉根を寄せた。

二人は、店内に入ってすぐの受付カウンター越しに会話をしていた。敦の隣でしばらく所在なさげにしていたレイナが、彼の肩をつつき、「友達がきたのならあがっていいよ」と耳打ちした。店長に言っておいてあげる、と。

――いや、ホント一言で済むんで。

礼を言おうとすると、ケンヂが慌てて手を振り振りそんなことを言うので、敦はレイナに片手を上げ断った。爽やかに微笑んでみせ。いくら暇な夜だといえ、私用で仕事を早退してしまうのは確かに気が引けることだった。

――で、何。

わざわざ仕事中に会いに来るわけだから、相当大事な報告なんだろうな、と敦は鋭い目をして言った。ケンヂは頷き、「大事大事、超一大事だから」と安く請け合った。

――何だよ、一大事って。

と敦が笑うと、途端に親友の表情が真剣になった。

――いまから、大西さん家行ってくるわ。

敦のからだが一瞬にして強張った。たっぷり数秒ほどその場で凍りついてから、思い出したように慌てだし、まだかちこちのままレ

イナに「やっぱりあがっていいですか」とぎこちなく言った。

そしていまに至る。

「タバコくれよ」

大慌てで控え室に戻り、着替えて駐輪場に飛んで出てきた敦に、ケンヂはまずそう言った。

「お前吸えねえだろ」首を傾げながらもソフト箱から一本取り出し、渡し、百円ライターで火をつけてやる。短く礼を口にし、ケンヂは大きく煙を吸い込んだ。むせた。苦しげに咳を繰り返す親友を見て、敦は思わず笑ってしまう。

「慣れねーことするからだよ。もう止めとけ」

「いいや、意地でも一本吸いきってやるね」とケンヂがむきになる。そして今度は慎重にそろそろと息を吸い込み、「うえ、まず」と舌をだしながら煙を体外に吐き出した。

その様子を横目で見やり、敦は「お前」と呟いた。「止めたほうがいいって」

「うるせー。平気だし、これくらい」

「煙草のことじゃねえよ」

ケンヂは黙った。敦も黙った。沈黙は、煙のように夜風に吹かれ、辺りに漂った。

「だいたい、何しに行くんだよ」顔も上げられないのが、なにより情けなく思った。

「見つけたんだよ、大西さんを懲らしめてくれるこわーいヒトをさ」

「誰だよ」

「ハッパなんかさ、たいした罪にならねーからな。ポリはあてにな

んねえ。栽培してたって下手したら罰金だぜ。執行猶予とかふつーにつくし。全然意味ねえ」
「だから誰だって」敦は嫌な予感がし、それを紛らわせようと煙草に火をつけた。
「蛇の道には蛇っていうもんな、昔からな」またがっていた原付から飛び降りると、まだ半分以上の長さのままの煙草を地面に落とし、スニーカーのかかとで火を消した。「そんなわけで、証拠集めにちょっくら行ってくる」

なんて顔してんだよ、と言って敦を指差し、笑ったケンヂの方がよほど面白おかしい顔をしていたが、敦は笑えなかった。
一歩親友の方に歩み寄るとその肩を掴み、揺すった。

「お前何考えてんだよ？　そんな危ないこと……」
「相談させてくれなかったのはオマエだろ」ケンヂの顔から笑みが消えた。「急に家には寄りつかなくなるし、電話にも出ねえし。おかげで相談じゃなくて報告だよ」

敦はことばをのんだ。的確すぎて、なにも言えなかった。
「オマエ、こないだ言っただろ」再びケンヂは明るい声で言った。穏やかに笑って。

「何を」
「オレ達になにができるって。無理だって。言っただろ。証明してやるよ」
「危ねえって」それしか言えなかった。まだ濡れたままの地面に、いつのまにかしゃがみ込んでしまっている。
そんな敦を一瞥し、ケンヂは原付にまたがり、あみだにヘルメットを被った。「そろそろ行くわ。遅刻したら殺されっからな」

また連絡する。キックエンジンを蹴り、ケンヂは笑った。

「これで一連のことにカタついたらさ、オマエぜったい素直に奏ちゃんにぶつかれよ」

敦は答えられず、無言のうちに遠ざかっていくケンヂのバイクを見送った。

とうにその姿が見えなくなってから、敦は立ち上がった。熱帯夜のせいで頭はぼうっとしていた。朦朧とした意識のなかで、今夜終始明るく振る舞っていたケンヂの様子を思い出した。ケンヂははじめから最後まで、「一緒にきてくれ」とは言わなかった。それが彼の意地で敦に対するあてつけであった、ということに敦はもちろん気づいていたし、口には出さないだけで、それを強く望んでいた、ということもよく分かっていた。

敦はそのうえで、「俺も行く」とは言わなかった。いまから追いかける度胸もなかった。

情けねえ、思わず口に出してしまったが、その声も蚊の鳴くように情けないものだった。自分がひどく醜く、価値のないもののように思えた。

「また連絡する」。敦にできることといえば、そのことばを信じることだけだった。

＊

あれからピンクチラシは毎日玄関ポストに投函されつづけていた。

今日でちょうど、一週間めになる。よくも飽きもせず、とあたしは思ったが、あまりうまく笑えなかった。
毎日、あたしが深い眠りについてから、やつらは鉄扉一枚はさんだだけのこの場所にまでやってきているのだ。
そう思うと、あまりのおぞましさに声をあげそうになった。
しばらく部屋にもどらないほうがいいのかもしれない、とも考えたが、この場所を知られている以上、必要以上に家を空けてしまうのも不安だったし、だいいち逃げる場所も頼る相手も思いつかなかった。一日二日、そして三日とそれがつづき、あたしには自分の孤独がどんどんと浮き彫りにされていくのがはっきりわかった。
しかし、そのことであたしがつよく抱いた感情はおそれや絶望なんかではなく、非常に激しい憤りだった。信じられない、と思った。四日めの朝だった。幸い、いただいたお手紙は捨ても破りもせずに（ぐちゃぐちゃにまるめられた形跡は隠しようがないが、なんとか、かろうじて）無事にのこしてあった。あたしは決心した。上等。

犯人はわかっている。
あたしは断固戦うぞ。

警察に相談したところで、どれほどちからになってくれるかもわからないが、おびえてちいさく震えていたってしかたがない、と思った。そんなの、やつらの思うつぼだ。負けてやるものか、あたしはいきり立った。そうしていないことには、いまにもひしゃげてしまいそうで、こわかったのかもしれない。
仕事の休みはしばらくなかったし（ありがたいことだった）、警察に行けるのは休憩時間ぐらいのものだった。しかし今日の昼間はピークが長く、オーダーストップ後もなかなかお客さんははけなかった。ずいぶん遅い休憩をもらえたころは、もう夕方で、たった一時間の貴重なブレイクタイムに、大急ぎで着替えて往復徒歩三十分ほどもかけて駅前の交番まで行く気力なんて、ちっともなかった。

帰りしなにでも交番に寄ってから帰ればいいや、と安易に考えていた矢先、事件は起きた。

その晩はめずらしく、ラストオーダーの時間にすべての客がはけ、閉店時間まえに閉店することができた。

店の裏口を出て鍵を閉め、従業員専用駐車場の端にある出口から小路に出る。車が一台やっと通れるほどの狭い一方通行のこの道。街灯は、壁の向こうの水路をはさんだ住宅街のためのそれが、ぽつぽつと遠慮がちにならんでいるだけだ。夜も深まって、ほの暗くひと気のまったくないこの小路を歩くのはすこしこわい。しかし通勤時間を五分も短縮するためだ。あたしは今日も川沿いの表通りを歩かずに、この道からひっそりと駅へ向かうのだった。

ちょうど、駅に至る大きな道路の合流地点と店の中間あたりにさしかかったときだった。人の気配がし、顔をあげた。

ぎくり、と思わずからだをこわばらせてしまう。先ほどにも述べた通り、この道はめったに人が通らないのだ。人影を見るとそれだけでぞっとしてしまう——さらに、それが若そうな男の集団だったらよけいに身構えてしまう。

民間の月極め駐車場（しかし住宅街からは不便だし、ほとんど車は入っていない）の脇にある古ぼけた自販機に照らされて、夜道にぼんやり三人の男らが浮かびあがっている。興奮状態でいるらしく、大きな声で騒いではときおりひときわ高い笑い声をあげたりしている。酔っ払っているのかもしれない。

大丈夫、なんでもない、そう思い込まないわけには、恐怖に身がすくんでしまって一歩たりともうごけなくなりそうだった。ここ一週間投函されつづけたピンクチラシのことが、頭をよぎった。

男達までの距離はたったニ、三メートルほど。けれど談笑に夢中

になっていて、まだあたしには気づいていないようだった。たかが座っているだけ、喋っているだけ。それだけで身構えるなんて、たしかにすこし自意識過剰かもしれない。あと、五秒もあれば、奴らの前を通り切れる。

あと、五……四……三……二……、一。

ほっと胸を撫で下ろす。あたしは自販機の前を、彼らの前を、ぶじ、通り切ったのだ。

ぶじ渡り切った。どうやらあたしはそのことにすこし、気を緩めすぎたらしい。

まったくの不意打ちだった。がつん、と突然後頭部に衝撃がはしり、目の前に閃光が散った。ぐらり、とからだが傾いたと思うとすぐさま後ろから何物かに羽交い締めにされ、駐車場脇の細い道にずるずる引きずられていく。

「誰かっ……、……！」

叫ぼうとしたとたん、口を手で塞がれる。ごつごつとした、男の大きな手からは、タバコとは違うみょうにきつい匂いがした。

→次話.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3309o/

ガラスに触れたら

2011年6月25日14時46分発行